

---

# 魔法少女リリカルなのは～面倒くさがり屋の勇者～

岡崎結弦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜面倒くさがり屋の勇者〜

### 【コード】

N30350

### 【作者名】

岡崎結弦

### 【あらすじ】

ただの学生だった俺。

なのにいきなり神様に選ばれてしまった。

何に？

世界を救う勇者に。

んなアホな、って話だが、事実だから仕方ない。

地獄に落ちないためには、世界を救うしかないという最悪や。

果たして俺は生き残れるんだろうか？

## プロローグ（前書き）

何となくで書いてみた小説ですっ!!!

主人公はひねくれものになる予定ですが、暖かい目で見てください  
ありがたいですっ!!!

いきなり四話投稿してみます!

それではどぞっ!

## プロローグ

俺は普通の学生だった。

特技があるわけでもなく、特別に正義感が強いわけでも、情熱を傾ける何かがあるわけでもない。

毎日学校に通い、授業中に昼寝をしては教師に怒られ、クラスの皆に笑われる。

そんなどこにでもある風景に溶け込んだ、ただの中学生だったんだ。

その日常に満足して、一生をのんびり終える。

そんなのが夢の人間だったんだ。

なのに、俺は突然殺された。

人にじゃない。

動物にでもない。

災害や、事故でもない。

じゃあ誰に？

答えは――……

『神様』に、だ。

## プロローグ1

「……………どこだ、ここ？」

俺は周りを見回しながら、そう呟いた。

確か俺は、トラックにはねられたはずだ。

じゃあ、死んだのか？

俺の人生も、案外あっけないもんだなあ。

「で、どこに行きゃいいんだ？」

全くわからん。あの世なんて初めて来たからな。

『汝は、選ばれし者なり』

いきなり声が聞こえた。

しかし周りに人はいない。

「誰だ？」

『我は、汝らのいうところの、神という存在に位置するものだ』

「ふうーん」

どうでもいいや。

それより、これから俺、どうなんだろう？

「そっぴゃ、選ばれし者って何？」

『汝は、世界を救う勇者に選ばれたものだ』

「ごめん。無理。パス」

速攻で断る。いきなり訳が分かんないし、そんな無理に決まっている。それに何より面倒くさいしね。

『我が、そのために汝を殺し、このことを断れば汝を地獄に落とすと言ってもか？』

「は？」

何それ？そんなわけないだろ。俺はトラックにはねられて死んだんだぞ？

『我がそうなるよう、運命を操ったのだ』

「……………」

じゃあ何か？俺はその世界を救う勇者とかいうわけ分かんないことのために殺されたのか？

……………ふざけんなよ。

何だよそれ。



『世界というもの前に、一人の人間の犠牲などなきに等しい』

全く以てその通りだ。その理屈はガキの俺でもわかる。

でも、それが自分に置き換えられるとなると話は別だ。

そんなの納得できるわけではない。

「ふざけんな。いいからさっさと俺を天国に送れ。お前の頼みなんか聞かねえし、地獄に落ちるつもりもねえ」

『この話をのめば、再び生を謳歌できるとしてもか？』

「転生なんか興味ねえ」

『……話だけでも聞くがよい』

「聞く気なんてねえ」

『……ならば、汝には地獄に落ちてもらおう』

「……ちつ。聞くだけだぞ」

『それでいい。ではこれより、汝の役割を話す』

「へいへーい」

『汝はこれより、パラレルワールド平行世界の二つに転生し、その世界を救ってもらいたい』

「やだ」

『その世界には、七人の異能の力を持った人間が存在する』

「無視か」

『そのもの達は、近いうちに必ずその世界を滅ぼしにかかる』

「だから俺に止めて欲しいって？そんな俺以外の奴に頼めよ」

『『適性者』が、汝だけだったのだ』

「『適性者』？」

『左様。何もこちらも何もしないわけではない。汝には、その世界を守るための力を授ける』

「その力の適性者つてのが、俺だけだったってか？」

『ずいぶん最悪だな俺。確率60億分の1のアンラッキーくじ引いちまったってことじゃねえか。』

『汝には、これより転生してもらい、その力を使いそのもの達を――』

「殺せてか？やだよめんどい」

『いや、殺す必要はない。』封印』さえしてくれればな』

「『封印』？」

『力の『封印』だ。力さえ無くなれば、只の人だ。その力も汝に与える』

「じゃあ無理に戦わなくても、封印さえしたら片がつくのか？」

『いや、封印は相手が気絶しないと不可能だ』

ンだよそれ。結局戦わないといけないんじゃないん。

まあ俺には関係ないけど。

「てか、俺がやらなくてもさ、その世界の奴らが何とかしてくれるんじゃない？」

『無理だ。先に言った通り、奴らの力は異能なのだ。少なくとも、汝の手助けなしには不可能はずだ』

「はずって……また適当だな。その世界にも何か力を使ったりしてるのか？」

『魔法少女リリカルなのはというアニメに非常に酷似した世界でな。魔法文化が発達している』

魔法少女リリカルなのははあ？確かあれだろ？何かどう考えてもそれって魔法じゃねえだろっ！って突っ込みたくなるような魔法を使って敵を主人公が撃ち落とすやつだろ？俺いらねえだろ。

『して、やるか、地獄に落ちるか、どちらがいい？』

「因みに、もしやるを選んで、俺がその七人を放っておく、または  
返り討ちにあって死んだらどうなる？」

『地獄行きだ。ただし、もし七人全員の封印を成功した場合、汝の  
望むことを何でもやってやろう。今後永久的に、だ』

「……………」

こっちにとつちやデメリットが大きすぎるが、メリットも大きい。

その望みで、俺が願えば何でもできるようになる。

でも……………」

「興味ねえや。俺はただ、昼寝だけできりゃそれで満足だし」

『ならばずっと昼寝できるようにしてやるっ』

「他人から与えられた昼寝なんて興味ないね。俺はしたいときに、  
自分で勝手にやるしね」

『……………ならば、汝を地獄に落とすとしよっ』

「……………」

やべえな。完璧に怒らせたぞ。てか、やっぱり地獄行きは嫌だな。

「……………はあ。やるしかないのか」

『やっと行く気になったか』

「ああ。その代わりに、俺の願いを叶えるっての、忘れんなよ」

『契約は守ろう。では、行け』

俺の視界が、どんどん白く染まっていく。

絶対に生き残って、自分の人生を掴み取る。

んで、絶対に願いを叶えてやる。

あのクソみたいな神様を、ぶん殴るっつう願いをよ。

「おぎやあつ……おぎやあつ……」

赤ん坊の声が聞こえた。

「やった！生まれましたよっ！」

「よかった……本当に……」

新しい人生で、初めて目に映ったのは、泣きながら嬉しそうに笑う女の人だった。

『ああ、面倒くせえ……』

それが生まれて初めて思ったことだった。



## プロローグ2

俺が生を受けてから、十一年の時が過ぎた。

あれから七人のうちの一人の封印に成功し、一人は失敗した。残り五人とは未だにあっていない。どうやら奴らは、互いのことを認識していないらしい。

俺の両親は、管理局の局員だった。だが俺が五歳の頃に死に、それから四年後、今から二年前に入局した。

階級は三等陸士。魔導師ランクはDランク。魔力量はEとなっている。まあ要するに、落ちこぼれて奴だ。

実際は、リミッターを自分でかけて、力を極端に制御しているだけだが。

理由その1。奴らに俺の存在がばれると面倒だから。向こうにばれたら、一気に攻め来る可能性がある。それに、俺の力がばれたら対策を練られる可能性がある。

あつ、先にはらしとくと、俺の力は伝勇伝の魔法全部と複写眼だ。こんな化け物の眼の適性者が俺だけってのは、本当に運がない。暴走はしないから安心しろと言われたが、それでもやっぱり不安ではある。

理由その2。階級あがると仕事が増えて面倒だから。管理局に入ったのは、あくまで奴らの情報を手に入れるためであって、昇進とかには興味ないのだ。



まあ、そんな感じで十一年の時を過ごした。

時間経過が早すぎることに突っ込まないで欲しい。

因みに俺のプロフィールを紹介しておこう。

名前はカイト・クロサキ。両親の先祖が地球出身らしく、こんな名前になった。

髪と瞳の色は黒。

以下略。

適當すぎとの突っ込みは受けない。だってまだ十一歳だよ？これから身長とか体重とかいろいろ変わるじゃん？その時に説明するよ。

で、回想はここまでにして、今現在俺の目の前には、同僚の人達が、並んで指揮官の話聞いていた。

何でも、ロストログアの回収任務で、未確認が確認されているらしい。

あゝ、面倒くせえ。今すぐ自室に戻って昼寝してえ。

《もう夜ですよマスター》

今念話で話してきたのは神から与えられたインテリジェントデータベースのアイリス。

因みに何故念話かと言うと、落ちこぼれ（ということになってる）の俺が、熟練者向けのインテリジェントデバイスを持っているなんておかしいので、ばれないように所持しているからだ。

《はあ全くマスターは相変わらずダメですねえ。もうちょっと周りを見習ったらどうですか？》

このように口が悪いのが欠点だ。

《うるさいなあ。どうせ今回はあのエースオブエースが来るんだろ？ だったら適当にやっとけばいいじゃん》

そう。今回の任務には、この世界の主人公こと高町なのはと、メインキャラの一人のヴィータがいるのだ。問題なんてないだろ。

そんな風に思いながら、指揮官の話を聞いていた。

「ふあゝあ。終わった終わった」

未確認の機械兵も、エースオブエースの前には鉄クズ同然だったな。

俺はそう思いながら、撤収作業をしていた。

そして、何気なく空を見上げた。

その瞬間だ。

異変が起こったのは。

複写眼が勝手に発動したのだ。

「あれ？おかしいな……」

そう思つて更に上に注意を向けると、背中から何かに刺され、血を流して気絶しているエースオブエースの姿があった。

「っ！？」

《マスター、今周りに人はいませんっ！やるなら一瞬ですっ！》

《俺が助けるってか？冗談じゃ……》

《……本当にそう思ってますか？》

《だぁぁぁもっ！》

俺は高速で空間に文字を走らせる。

「我・契約文を捧げ・天空を踊る光の魔獣を放つっ！！」

俺の前に、体が光る猛獣が現れ、そのままエースオブエースの後ろにいる何かを食らい、破壊する。

ドガアアアアアアアアアアアンツッ！！！！

爆発と同時に落ちてくるエースオブエース。

《アイリス、アクティブガードッ！》

流石にあの高さから落ちたら、ただでさえ重傷なのだから死んでしまっただろう。

俺は着地地点に走り、受け止める準備をする。

後は、事後処理をしていたら、血だらけのエースオブエースを見つけたとか言い繕って、医療班に預けて終了だ。

そう思っていた。

ザシュッ

自分の腹を激痛が襲うまでは。

「な……に……」

激痛が襲う場所が熱くなり、血がとめどなく流れていく。

俺は後ろを向く。見ると、今回の未確認の機械兵がいやがった。

俺は急いで魔法陣を描き、詠唱した。

「求めるは雷鳴>>>・稲光いしひくっ!!」

ドガアアアアアアアアアアアアンッ!!

雷鳴が轟き、機械兵を撃ち抜く。

衝撃で吹っ飛ばされそうになるのをかるうじてこらえ、アクティブガードで落下の衝撃をなくしたエースオブエース受け止める。

《マスターッ!!》

アイリスが心配そうに叫ぶ。よし、まだ念話で話すことを忘れない程度の冷静さはあるな。

しかし困った。これでは、自分も戦闘に巻き込まれたことが明白だ。

急いで離れ……ない……と……

俺の意識がもったのはそこまでだった。

### プロローグ3

目が覚めると、白い天井が目に入った。どうやら病院らしい。

《目が覚めましたか？》

俺の右手首のブレスレット、アイリスが念話で話してきた。

《あの後どうなった？》

《周りの見回りをしていたヴィータさんに拾われ、なのはさん共々集中治療をうけ、一命をとりとめた次第です》

《ふーん》

まあ、体のあちこちにチューブとかあるからな。ブレスレットが外されてないのは、まわりからはステルス機能によって見えなくしているからだ。

その後、病室に入ってきた担当の医師から聞いた話によると、もう歩けないかもしれないと言われた。

最悪だ。

これじゃあの神様を殴れねえじゃねえか。

はあ。人生二回目の大失態だ。一回目はもちろん奴らの一人を逃がしたことだ。正確には、俺が逃げただけだな。化け物みたいに強かったから仕方ない。

担当の医師が出ていった後、今度は俺の上司が来た。

何々。俺を庇ってエースオブエースが墜ちたのだから、お前は三年の謹慎処分だ、だと？

……まあ、あの状況なら仕方ないか。事実がどうであれ、管理局としては、未来あるエースオブエースの経歴に傷をつけたくないだろうしな。その為なら、落ちこぼれに責任を押し付けて処分したほうがいいだろう。

まあ、正直仕事サボれるから速攻で了承したけど。

向こうはあまりの潔さに驚いていたが気にしない。

その潔さに感服でもしたのか、最後の情けなのか、三年間どこにいるか決めていいと言われた。

どうせなら、戦いと縁のない場所がいいな。

なら地球でいいか。

その答えに、また驚く上司。そりゃ、あのエースオブエースのいるところだもんねえ。

まあ、退院次第、そこに行くよう言われた。

さあて、のんびりリハビリでもするかなあ。

〓〓二年後〓〓

リハビリを終え、退院した俺は、とある地球のマンションにいた。

何でも三年の間、地球の中学校に通わないといけなくなったらしい。

まあ面倒くせえ……

えっと、学校名は……

『私立聖祥大附属中学校』



### プロローグ3（後書き）

どうでしたでしょうか？

感想待ってますっ！！

あっ、後七人の敵についてですが、全く能力については決まってい  
ません。

何か使って欲しいキャラクターの能力があったら、感想のリクエスト  
の欄に書いてくださいっ！！

それでは、また次回っ！！

## その1 学生生活の始まり

カイトside

只今入学式の最中。皆が皆、新たな出会いに期待と不安を織り交ぜながら校長の話を聞いている中、俺は熟睡していた。

あ、因みに今の俺の名前は黒崎海斗となっている。地球ならこっちのがいいだろ、という理由から。

校長の説明が終わり、今日から一年間過ごす教室に入った途端、俺は机に突っ伏した。

担任が何か前で話しているが、一切聞かない。

「それでは次、出席番号十五番の黒崎くん」

「ぐー」

担任が呼んでも一切反応しない俺。当たり前だ。今夢の中を漂っているんだからな。

「黒崎くんっ、起きなさいっ!」

担任が何度も注意した。どうやら今は自己紹介をやっているらしい。

仕方なく俺は起き上がり、教壇にあがった。

「黒崎海斗。趣味昼寝」

そう言った後、再び席につき、机に突っ伏した。

その光景に、クラスの奴らは啞然としていたが無視した。

学校初日、つまり入学式が終わり、俺は帰路に――ついてなどいなかった。

あの後も熟睡し続け、今教室に残っているのは俺だけとなっていた。

《マスターマスターマスターッ！！早く起きてくださいよおっ！！》

目覚まし時計がうるさいが気にしない。

《目覚ましっ！？今日覚ましっって言いましたかっ！？》

うるさいなあ。じゃあがらくたで。

《いやそれもゴミ扱いですよねっ！？》

はいはい。なら目覚ましでいいな。じゃあおやすみ。



《また目覚ましって言いましたかっ!?!》

あー、うるさーいうるさーい。

キーンコーンカーンコーン。

四限目終了のチャイムが鳴った。

俺は起き上がり、この1週間で見つけたお気に入りの場所に向かった。

俺は今、屋上にある給水タンクの階段を登っていた。

給水タンクの上は当たり前だが立ち入りつつーか登るのは禁止されているが、そんなものは無視だ無視。

この上から見る景色は絶景で、俺はここで昼食をとるようにしている。

因みに弁当だ。俺が作ったな。

一人暮らしをしていると嫌でも覚えるさ。

「はあ。やっぱり昼寝とこの昼食の時間は至福だなあ」

そんなことを考えながら昼飯をパクついていると、屋上の扉が開いた。

取り敢えず、上半身を屈ませる。

こうすれば下からは見えない。誰が来たかを確認すると、この世界の主要人物達だった。

名前を一々あげるのは面倒なので、察してくれ。

まあ教師でもないし、見つかったても問題ないと判断した俺は、姿勢を戻して昼食をとることにした。

うん。やっぱりこつから見る景色は最高だな。空飛んでる時とはまた別の景色が見える。

「はあ。もう勇者とかどうでもよくなってきたかも……」

「その人ーっ！そんなとこ登ったら危ないでーっ！」

ああ。せつかくの至福の一時が……

注意してきたのは八神はやて。確か四年くらい前に中規模次元未遂どうたらこうたらとかいう元犯罪者らしい。まあそんなことはどうでもいいが。興味もない。

俺が問題としてるのは、こいつらに関わってしまうことだ。

関わる。目立つ。俺、注目される。奴らに存在されるかもしれない。

うん。いいことないな。取り敢えずこいつらに関わるのはよそう。

俺は弁当を直し、大人しく降りた。

「あんな所に登ったら危ないよ」

金髪の女、フェイトがそう言ってきた。確かこっちも四年くらい前にロストロギアを集めていた元犯罪者。まあこっちもどうでもいいが。

「もう登っちゃダメだよ？」

そして、前二件の事件を解決に導いた管理局エースオブエースかつ、俺がここにいる元凶となった張本人こと高町なのは。まあ別に気にしてないけど。顔も見られてないはずだし。

「わかった。もう登らないよ。それじゃ」

そう言って、屋上を去ろうとする。

「あ、良かったら一緒に食べない？ 食事の邪魔しちゃったみたいだし」

……はあっ！？ 何言ってるのっ！？

《マスター。フラグ立てるチャンスですよっ！！》

《立てるかあっ！！てか、何でこうなの？》

「いや、これから用があるからちょっと……」

まるっきりの嘘だ。この後は中庭のベンチで昼食をとり、午後はそのままそこで昼寝をする予定。

「ホンマかあ？」

はやてが疑わしそくに俺を見てくる。こらこら。初対面なのに失礼だろ？

取り敢えず、俺は軽く「それじゃ」と言うと、急いで屋上を後にした。

せめてもの救いは、名前を聞かれなかったことだ。ここで聞かれて名前を覚えられたら赤の他人から知り合いに関係がランクアップしてしまう。

そんな事態はごめんだ。

俺はこの三年間は、平穩無事に過すって心に誓ったからな。

そんなことを思いながら、中庭目指して歩いたとさ。



海斗 side out

## その1 学生生活の始まり（後書き）

### 次回予告

海斗が中学生になってから、早くも半年の時が過ぎた。

毎日毎日昼寝をし、平和を満喫している海斗。

しかし、そんな海斗に最悪の魔の手が……

次回、魔法少女リリカルなのは〜面倒くさがり屋の勇者〜その2  
中間テスト

Take Off

## その2 中間テスト(前書き)

感想待ってますっ!!

## その2 中間テスト

海斗 side

入学してから、半年ほど経った。

え？省きすぎだろって？

だって別に特に何かがあった訳でもないもん。

あれから主役達にも会わないよう気をつけたしね。

まあ、この半年の間にあつたビックイイベントといえば、俺に悪友、もとい腰巾着ができたことだ。

「誰が腰巾着だっ！」

俺の目の前で、つり目で黒髪の男、相良祐介さがらゆうすけがそう叫んだ。因みに場所は図書室。

「図書室では静かに」

何故俺みたいな健康低能児がこんなところにいるのかというと、昼寝のためだ。図書室ってのは静かでいいね、うん。

んで、相良は図書委員。図書室常連となった俺は、寝るなど毎回注意されてるうちに、こつして話すような間柄になった次第だ。

「ふあゝあ。じゃ、俺寝るから。一時間後に起こして」

「おい黒崎。毎回聞くがここがどこだかわかってるか？」

「図書室しよしょだろ？」

「読みが違っツー！漢字はあってるけど読みがツー！」

「図書室では静かに。じゃあ、おやすみ」

そんなわけで、机に突っ伏した。

ああ、幸せ。

何か叫んで周りに迷惑かけてる馬鹿は無視しよう。うん。

「……………んんん」

俺は、今自室のベッドに座り、悩んでいた。

何故？

管理局から通達が来たのだ。

内容はこうだ。

俺のテストの結果があまりにもひどい（テスト中すら寝てるから当たり前）すぎるので、今度の中間テストで、平均点を出さなければ、生活支援金を送らないというのだ。

ひつつじょお〜〜につ、まずいつ！！

え？前世じゃもう習ってただろって？

プロローグ0読めっ！授業中に寝てたって描写があるよっ！！それに何年前と思ってるんじゃないあっ！！

しかし不味いなホント。

理数系は全く問題ないとして（満点の自信すらある。魔法って理数系だもんね）、問題は英語と文系だ。

相良にでも勉強教えてもらおうか？

あいつって学年トップ5に入る秀才だからなあ。

あ、でもそうしたらもう図書室で寝るなって言われるかも。

それは勘弁。只でさえ、主役達と接触しないために、俺のベストップレイス（給水タンクの上）に行く頻度が減ったってのに、冗談じゃない。

「こうなりゃカンニングを……」

「普通に勉強するって選択肢はないんですか？」

「そんなことをして何が楽しい」

「駄目人間ここに極めり、ですね」

目覚ましはもう無視しよう。それより、どうやってカンニングするか……

「真面目に勉強しようよっ！ー！」

うん。やっぱりシャーペンの中に単語や漢字の書いてある紙を……

「勉強しましょうよっ！ー！」

「うるせえっ！ー！今更やっても遅いだろうがっ！ー！」

中間テストまで、残り三日。はつきり言おう。時間がなすすぎる。

普通なら十分な時間だろうが、俺は普段一切授業を聞いてないのだ。つまり、どこがポイントだとか、範囲がどこかすらわからん。

マジでどうしよう？

このままじゃ飢え死にしちまう。

そんなことを考えていると、気が付けば寝ていた。

勉強の時間は更に狭まったぞ。

「あゝ、面倒くせえ」

図書室で、シャープペンをクルクル回しながらそう呟く。

今回は、珍しくも勉強をしている俺。

今日、教師から範囲だけ教えてもらい、放課後に残って勉強している次第だ。

今日の委員の担当は、相良ではないらしい。

肝心な時にいない奴め。

てか、やっぱりカンニングしようかな？

……いや駄目だ。

カンニングであげられる点数なんざ限られてる。



この中学校、面倒なことにレベルが普通より高いのだ。よって平均点も高い訳で……

「あゝくそ。英語は中学入ってから習い始めるから、そんなにレベル高くないな。国語は……漢字を覚えれば何とか。残る問題は……」

社会だ。これははっきり言って、暗記すれば終わりなんだが……  
…範囲がとてつもなく広い。

ポイントを抑えて覚えないと、点数なんざとれっこなし。

どうしよう？

「あれ？君は確か……」

げっ！！

俺がウンウン悩んでいると、俺の後ろから声がかかり、振り返ると、そこには夜天の主がいた。

「えつと……」

「覚えてないかな？半年くらい前に、君が給水タンクの上に登ったん注意してんけど」

「あ、ああ。あの時のー」

くそっ！いいから早くどっか行ってくれっ！こっちとしては早く忘

れられたいつてのにつ!!

「何しとるん？」

八神がそう言いながら、俺の手元を覗き込む。

「……………テスト勉強」

「成る程。それで、校内で有名な『昼寝王』は、ポイントが分からなくて困ってたと」

……………最悪だ。

昼寝王とは、この学校における俺のあだ名だ。まあ、授業中にあまりにも寝すぎるために、そんなあだ名が流通してしまったのだ。

そして、こいつにそれを知られた。

つまり、主役達に知られた。

最悪じゃん、ホント……………

「じゃあ、私が勉強教えたるか？」

訂正。最高だよあんた。

「お願いします」

一秒で心変えした俺は、頭を下げてお願いした。

「あつ、まだ名前言うてなかったな。私は……」

「八神だろ？」

「え？何で知つとるん？」

「高町とハラウンとあんたは、可愛いつて有名だからな」

コレホント。クラスでも話題にしてる奴がいるし、ファンクラブつてのもあるから、三人のことを知らないのは、この学校にはいないだろう。何か毎日ラブレターもらってるって噂もあるし。

「いやあ／＼／＼」

対して八神は、可愛いと言われて照れていた。

噂は本当なのか疑問に思ってきた。

まあどうでもいいや。

「んじゃ、早速教えてよ」

ここでポイントなのは、自分は名乗らないことだ。いくら噂で有名になっても、本名までは知られてないはず。本名知られてるかどうかというのは結構大きい。

「あ、そついや君の名前って何なん？」

「昼寝王」

「本名のほつや」

ちいっ！案外目ざといっ！さすがはチビ狸だけはある……

「何か言った？」

「イエナニモ」

取り敢えず、本名乗っとくか。ここで偽名使っても、すぐにばれるだろうし。

「黒崎海斗だ」

「よろしくな。黒崎くん」

……はぁ。もうこれ知り合いにランクアップしたよなあ。面倒くせえ。

～～～一時間後～～～

俺は打ちのめされていた。何に？八神の鬼コーチっぷりにだよっ！！

ちよっと話聞かなかったり、寝ようとするたびに制裁加えやがって

……

え？何？当たり前？そんなの知らないなあ。少なくとも俺の常識から見れば、な。

「ほらほら。次の問題いくで」

しかも、こいつの教え方は的確な上に分かりやすく、無駄がない。学力の差を見せつけられた気分だ。

「えっと白村江の戦いは……663年？」

「正解や。次いくで」

因みに、社会は歴史だ。普通一年は地理のはずだが、そこは流石私立というべきか、進むのが早い早い。地理なんて小学校で終わってるよみたいな感じで一瞬で終わったさ。

それから更に二時間程勉強し、お開きとなった。

俺、グロッキー状態。

「も、もう勉強なんてしたくない……」

「何言ってるの。これくらいで」

対して八神はピンピンしてる。どうという体の構造だ？

「にしても、勿体ないで黒崎くん」

「何が？」

「理解力も記憶力もあんなから、真面目にやったらもつと上狙えるやろ」

「あいにくそんなのに興味ないんでね。俺にとっては昼寝のほうが重要だ」

「ははつ。えらい大層な価値観やな」

「昼寝王だからな」

「成る程。噂に偽りなしな男やな。悪いほうで」

「ほつとけ。じゃあ、これで。今日はありがとな」

「気にせんでええよ。テスト、お互いに頑張るな」

「まあ、ほどほどにはな」

そう言つて、八神と別れる。

さて、帰ったら即効寝るかな。

勉強？バツカお前知らないのか？睡眠つてのは、脳の中の記憶を整理するんだぜ。だからこういう時は寝たほうがいいの。と、言い訳しておく。

試験しゅくりよ。

ぶつちやけ楽勝だった。

理数英は簡単だったし、国語は山があたり、社会に関しては八神に言われたところがどんぴしゃでたのだ。

こりゃ、平均は軽く超えるだろうな。ただ、そのせいで教師どもが真面目に授業を受けるよう言ってくるかもしれないと思うと、面倒で仕方なかった。

ま、無視すりゃいいか。

俺はテストが終わって即効、机に突っ伏して寝た。

「うそーん」

自分のテスト結果を見て、思わずそう呟く。

何故？

そんなもん決まってる。

あ、一応言つが悪いからではないぞ。

じゃあ何だつて？

良すぎるんだよっ！！

学年4位だぞっ！？

一体俺の身に何が起こったっ！！

「黒崎イツ！どういうことだあっ！！」

「こつちが聞きたいわあっ！！」

いきなり怒鳴りながら教室に入ってきた相良に、どうして来たか瞬時に理解した俺は、怒鳴り返した。

「何で……何で俺がお前につ」

因みに今回こいつは6位。御愁傷様。



まあ、こいつの相手すんのも面倒だし、さっさと退散するか。

俺は空っぽのカバンを手に持ち、教室を後にした。教科書はどこだつて？もらった日からずつと机の中だけど何か？

さあて。テストも終わったし、結果も万々歳。これからゆ～～～つくり昼寝でもし～～～よおっと。

遠くで相良の叫び声が聞こえたが、気にしな～い気にしない。

「……………」ついつのつてあり？」

俺は再び管理局から来た通告に、絶望を味わっていた。

内容を簡潔に話そう。

今回の中間テストは素晴らしいものであった。『これから』も、勉強に励め。

まあつまり、次は期末テストで同じことしろってことだ。また平均点以下だと、生活支援金はなしになる。

「こつこつオチってありなんだな……」

そう呟いた後、全て夢であってくれと願ってふて寝した。

夢なんかにはなりやしなかったがなっ！！

海斗 side out

## その2 中間テスト（後書き）

### 次回予告

テストも無事終わり、再び平和な昼寝ライフを送る海斗。

そんな海斗に、またしても別の魔の手が……

果たして、海斗は一体どうするのだろうか？

次回、魔法少女リリカルなのは〜面倒くさがり屋の勇者〜その3 猫

Take Off

### その3 猫(前書き)

感想待ってますっ！

### その3 猫

海斗 side

「……………」

「じゃあ」

今のだけで、俺の状況がわかった人。あなたは天才です。

まあそんなことは置いといて、俺は何だか今一訳が分からない状況下にあった。

今、俺の足元には一匹の三毛猫がいる。場所は通学路。

試しに前に歩いてみる。

ついてきた。

後ろに歩いてみる。

ついてきた。

右に寄る。

ついてくる。

左に寄る。

ついてくる。

ジャンプする。

同じくジャンプする。

クルクル回ってみる。

自分のしっぽを追いかける。

走る。

ついてくる。

止まる。

止まる。

「どういつ状況なんだこれは？」

《いやどう考えても懐かれたんでしょ》

「ボクニハキコエナイ」

《現実逃避しないでください》

《だっておかしいだろっ！猫って人に中々懐かないよ？なのにいきなりこの懐きっぷりっ！！》

《確かに変わった猫ですね。元は飼い猫なんじゃないでしょうか？》

《つまり捨て猫ってことか》

確か前世で聞いた話だと、飼い猫ってのが、野良として一週間生きていられる可能性は、三匹中一匹だとか。

……うわぁ。関係ないとはいえ、ちょっと鬱になっちまった。

《拾わないんですか？》

《何で俺が……他にも、猫好きな人間なんていくらでもいるんだ。この猫の懐きっぷりからして、すぐに新しい飼い主が見つかるだろうさ》

そうそう。そういうのは心の優しい人間に任せて、俺は学校に行くでしょう。

スタスタスタ。

てくてくてく。

スタスタスタスタスタスタスタスタ。

てくてくてくてくてくてくてくてくてくてく。

《………気のせいかな？何かついてくるような音が聞こえるのは？》

《いえ、気のせいではありません》

《そっかぁ………って》

「何でついてくんだよ……………」

うんざりしたように猫をみる。

「にゃあ」

可愛らしく鳴く猫。うん。それを他の人にやってもらん。直ぐに餌が貰えるよ。

「悪いけど、こっちはお前にかまう気はねえんだ。他あたれ」

「にゃあ?」

首を傾げる猫を無視して、再び歩きだす。

てか、このままじゃ遅刻しそうだな。

まあどうでもいいけど。

期末テスト前だけ真面目に受けてりゃ、後は何とかなるだろ。

「にゃあ〜」

……………まだついてくるか。

さて、どうしたもんかな……………

《マスターが飼えばいいですよ》



ペットショップに預けるか？でも最近つてそういうのはやってないだろなあ。ペットショップの前に捨てとけば大丈夫だって奴がいるせいだね。

《無視ですかー？》

しかしこのまま学校に行けば校内までついてきて、ますます俺は悪い意味で有名になってしまう。それは避けたい。只でさえこの間の中間で目立ってるのに……

《反応するまで、私は諦めませんよっ！》

じゃあ適当に食事でも与えて、それ食ってる間に逃げるか。後のことは知らん。

《流石にここまで無視されるとショックです》

《アイリス。近くにキャットフード売ってる店ない？》

《やっと話してくれたと思ったら、いきなり何ですか？》

《うるさい黙れさっさとしろ》

《ひどっ！？》

アイリスに調べさせ、近くのペットフードでキャットフードを買い、それを猫に与える。

猫は腹が減っていたのか、すごい勢いでキャットフードを食べる。

「んじゃ、後は他の人に頼れよ」

そう言い捨て、学校に向かう。

《いいんですか？放っておいて》

《だから俺にどうしろと？》

《飼いましょっつー！！》

《お前が飼いたいただけなんじゃ……》

《はいっ！猫可愛いですっー！！》

《……………》

《マスター？》

《ああごめん目覚まし。あまりに鬱陶しい言葉だったから、耳が雑音をシャットアウトしていたよ》

《それは酷すぎませんかっ！？》

何か騒いでるアイリスを無視し、俺は通学路を歩き続けた。

「ああ。授業の後のこの一杯がうまい」

《何サラリーマンみたいなこと言ってるんですか。後、授業をオールで寝ていた人のセリフじゃないですよね?》

《何か言ったか? 目覚まし》

《また目覚ましって言いましたね?!? 何度も言いますが私は……》

俺は今、屋上のフェンスに寄りかかり、コーヒーを飲みながら、夕日によってオレンジに染まる町を見ていた。

うーん。朝はろくな目に会わなかったけど、もうどうでもいいや。

「おらあつー!」

俺が、コーヒーをのんびり堪能した後家に帰って寝るといふ素晴らしきプランを考えていると、何やら下のほうから怒鳴り声が聞こえてきた。

下を見るな。下を見るな。見たら絶対ろくなことにならないぞ。

《マスター、見ないんですか?》

《ああ。見ない》

《あつ、あんな所に期末考査に出るテストの答えが》

《そんな嘘に騙される馬鹿はいない》

《いますよ。ほらあそこに》

《えっ？嘘だろっ!?!》

気になりその方向を見た。下の方向だ。つまりは……

《……………アホだ俺は》

もの見事にはめられた。まさかの二段構えでくるとは……………

《成長したな、アイリス》

《いえいえ。それほどでも》

しかし一度見てしまったからには、もう一回見ても変わらないだろう。

俺はもう一回下を見た。すると、この学校の生徒が、他校の生徒数名から暴力をつけていた。

何で他校生ってわかるかって？制服違うもん。この学校は紺のブレザー、奴らは学ラン。すぐにわかる。

確かこの近くで、学ランの中学校は……………腐るほどあるからわかんねえや。

まあともかく、状況としては、町一番の進学校であるこの中学校のことを気に入らない頭の悪い連中が、気の弱そうな生徒をターゲットにしてカツアゲしてるって感じかな。わざわざこの校舎でやるのは、どうせスリルを味わうためとか、無駄な心意気からだろう。

俺はそう推理した後、もう一度町の風景に視線を戻し、コーヒーを一口すすった。

「あー、うまい」

《いや助けないんですかつ!?!?》

《何で俺が?》

《いやマスターなら助けられるでしょ?》

確かに、実戦用の格闘技を習得している俺からしたら、あの程度の連中をやるのは、赤子の手をひねるようなもんだが………

《やだよ。あの手の連中はしつこいんだ。もし助けた時、顔でも見られたら面倒なことになる》

それに、俺は学校では運動音痴で通ってるんだ。体育のドッジボールでは真っ先に当たり、バスケットではフリーの時に何発もシュートをはずし、サッカーではキーパーなのに寝転がってシュートを何発も決められる始末。まあ全部面倒くさくて適当にやった結果だけど。最近じゃ体育はさぼってるくらいだぜ。

そんな俺が、正義の味方よろしく華麗に助けたらどうなると思っ

るんだ全く。

《姿を見られず助ける方法ならあるでしょう?》

……… ったくこいつは。

《あのな。はっきり言ってやるよ。面倒だからやだっつつってるの。  
ドウユウアンダスタンド?》

《あなたが本当にそんな性格なら、二年前になのはさんを救わなかつたはずです》

《命と金じゃ重みが違う。わざわざこの程度のことですでしゃばるよ  
うな真似、するつもりはないぜ》

《……… 本当に?》

《ああ》

《絶対?》

《だから………》

《間違いなく?》

《しつこいぞ》

《確実に………》

「だああああああああっ!!!!うぜえっ! わかったよっ! 助け

りやいいんだろ助けりやつつ!!」

《全く素直じゃないですね》

《今から海の底に沈めに行こうか?》

《冗談です。すみませんでしたマジで》

俺は、今後アイリスのことを目覚まし以外の呼称で呼ばないことを心に誓った後、早速行動を実行した。

内容は至ってシンプル。

不良目がけて、缶の中の残りのコーヒーを落とすだけ。このとき、魔法をばれないよう使い、コーヒーを必ず不良の顔面に落とすのがポイントだ。

コーヒーはものの見事に不良の顔面にクリーンヒットした。そして笑えるぐらいこちらの予想通りの動きをとってくれた。

「誰だゴラアツ!!」

そう、いじめの手を止め、こちらに向かって叫んだのだ。

俺は顔を見られない程度後退り、その声に裏声で答えた。

「すいませーん。誰かいましたかー?」

この時、わざとじゃないと言いながら、明らかに声音からわざとであることをアピールするのがポイント。

「ざけんなあつ！ぶち殺されたいかあつ！！」

わお。今時こんな不良っているんだな。ここまでこてこてだと、逆に恐くなくね？

「えー？何ですかー？馬鹿の言葉は聞き取りにくいんでー、近くに来て言ってもらえませんかー？」

俺がそう言つと、不良はいじめられてた奴には目もくれず、我先にこちらに向かうために校舎の中に消えた。

さて、後は隠れるだけだな。

俺は屋上の扉のすぐ横についてる階段を登り、上にあつた給水タンクの後ろに隠れる。

後は馬鹿な不良どもが来て、いないとわかり校舎の中を探していると教師に見つかり、そのまま警察に連絡され、連行されるといっプランだ。全く馬鹿で助かるよ。

俺は残り少なくなったコーヒーをすすりながら、そんなことを思う。今日は寝覚めが良さそうだ。

悪は負け、卑怯者は勝つ。

正義は勝つじゃないのかつて？知らないのか？勝者しか正義にはなれないんだ。だから敢えてアレンジを加えてみた。実際、俺って正義ってより卑怯者のほうがあつてるだろ？





《……こつなりや最終手段だ》

この手だけは使いたくなかったがな……

「何だよ。誰もいねえぞっ！」

上で不良の音がする。

え？お前どこにいるんだよって？

それは……屋上の中の階の窓枠に足を置いて、壁に体をへばりつけてる状態だ。

まあつまり、足滑らしたら死ぬ。

だからこの手は使いたくなかったのにつ！

《まあまあ。見つかって三年間ケンカに明け暮れるよりはいいですよ？》

《誰のせいでこつなつたと思ってたんだっ！！》

《えっ？私のせいなんですか？》

《よし目覚まし。この件が終わったらお前を海に沈めるから覚悟しろよー》

《すみませんでしたホントツッ!》

さて。奴さんはまだ上にいんのか。さっさと自爆コースに行ってくんないかねえ？

「このクソ猫があっ!紛らわしい声出してんじゃねえっ!」

ドカッ

「にゃっ」

鈍い音と、猫の悲鳴が聞こえた。

あゝ、蹴られたなありゃ。

《……助けないんですか?》

《もうこれ以上の面倒はごめんだ》

そもそも、こんな状況になったのは、あの猫が原因なんだ。そんな猫を何故助ける必要がある?

そうだ。寧ろ清々しいじゃないか。なら放っておけばいいんだ。

「ぺっ。クソ猫が」

「もう殺してよくな？」

「おー、いいねー。ストレス発散にはちょうどいいわー」

おっ、いいぞ。やれやれ。

《………何故そんな顔をしているのですか？》

《は？そんな顔？》

《ものすごいイラついてる顔ですよ》

………はあ？んなわけねえよ。

大体、あんな猫が死んだところで……

「おらあっ」

「ぎんぎん」

「ははっ！すぐには殺すなよ」

「そつだぜ。俺達の方もとっついてくれないと」

「へいへい。わかってるよっつっ」

「じゃあっ」

………なのになんでだろうなあ。こんなにむかつくのはなあ。

……ああそっか。わかったぞこんなにイラついてる原因が。

俺はその考えに至った瞬間、窓枠の上の部分を両手で掴み、そのままそれを軸に回転して、上に登り、そこからジャンプし、一気に屋上に着地する。

ブウンッ

バキィッ

「ぐええっ」

いきなりの俺の登場に驚いた三人を無視し、猫をいじめていた奴の顔を殴って吹っ飛ばした。

感觸的に鼻折れてるかもな。

まあそんなの関係なしに、残りの二人に、一人は溝江に膝蹴り、もう一人にはこめかみに肘うちして昏倒させた。

《……マスター？何故このような危険な倒し方を？》

アイリスの言うとおり、俺のやったことはかなり危険なことだ。始めの奴は鼻が折れてひどいことになってるかもしれないし、二人目は肋骨折れて内臓に刺さったかもしれないし、最後の奴も頭蓋骨にひびがいったかもしれない。

普段の俺ならもっとスマートに倒しただろう。それこそ外傷を一切なしにして昏倒させるのなんてわけないのだ。

つまりはそれだけ今の俺はイラついてるのだ。

《………大丈夫だ。危険はないよう手加減はした》

それでも結構ヤバいけどな。まあ骨は折れないよう注意したから問題ないだろ。

《マスター………そこまでの猫のこと………》

《はぁ？何勘違いしてんだお前》

《え？》

《俺が猫のために戦ったと思ってるの？》

《違ってますか？》

《違いよ》

《なら何故？》

《………俺さあ。あることに気付いたんだよね》

《あること？》

《そう》

《何ですかそれは？》

《いやさあ。そもそも、こいつらさえないなきゃ、俺ってこんなめん

どいことしなくてよかったわけじゃん？そう考えたらこいつらのこと滅茶苦茶ムカついてきてさあ。ボコらずにはいられなかった。それだけ》

《……………ふふふつ。相変わらず素直じゃないですね》

《……………何訳わかんないこと言ってんだか》

《ならどうしてさっきから猫の方をチラチラ見てるんですか？》

《そりゃあお前……………》

《それより、病院に連れていったほうがいいかもしれませんよ。かなりいたぶられたようですし》

《だから何で俺が……………》

《マスター？》

《……………はあ。ホント面倒くせえ》

俺は仕方なく猫を拾い、動物病院に連れて行った。

屋上に転がってる不良は、まあほっとけばそのうち通報されんだろ。実際、被害者（カツアゲされてた子ね）もいるわけだし、言い逃れは苦しいだろうしな。

検査の結果、特に異常はなく、大丈夫らしい。

「そうですか」

取り敢えず適当に返事しておく。

「でも、この猫捨て猫だろう？君、飼う気はないのかい？」

「はあ？冗談じゃない。俺のマンションは、ペットオーケーだが、面倒を見る気なんて更々ない。」

「そうかあ。しかし参ったなあ。それじゃこの猫そのうち死ぬよ？」

「なら飼い主を探せばいいですよ」

「じゃあせめてその間だけでも預かってくれないかな？」

「……………まあそれなら」

仕方なく渋々了承した。

「はあ。また面倒なことになったなあ。」



俺は腕の中で気持ちよさそうに眠る猫を見て、染々そんなことを思った。

余談だが、あの不良達は、カツアゲされた子が勇気を振り絞って力ツアゲされたことを教師に報告したおかげで（その他にも被害者は多数いた）、不良どもは言い逃れができず、そのまま少年院行きとなったとき。めでたしめでたし。

「にゃあ」

俺は全然めでたくないけどな。

海斗 side out

### その3 猫（後書き）

#### 次回予告

海斗「地球に来てから早一年。

面倒なことがそこそこあったけど、それなりに平和に過ごせ、このまま残りの二年を終えたいと思っていた俺を、絶望が襲った。

次回、魔法少女リリカルなのは〜面倒くさがり屋の勇者〜その4  
新しい学年

Take Off

## その4 新しい学年(前書き)

感想待ってますっ!!

## その4 新しい学年

海斗 side

秋が終わり、冬が来て、それも終わり……

地球に来て、二度目の春が来たのだった。

「……………おお。何というフィット感」

そして俺は、桜の木の上の枝で寝ていた。

てか、これが凄いんだよ。

何と、肘、尻、背中、足が見事に枝にフィットしているのだ。また新たなベストプレイスができたぜえ。

見つかったらまた教師に叱られるだろうけどな。

周りは桜の花吹雪。綺麗な上にこの寛ぎっぷり。

うん。ホントにサイコーだな。

「あゝあ。ずっとここにいられたらなあ」

《何馬鹿なこと言ってるんですか。もうすぐ始業式ですよ。新しいクラスの確認もしないといけないのに》

そう、今日は始業式。指定された教室への集合時間までには、まだ

余裕があるが。その証拠に、クラス発表の書かれているボードの前には、未だに人だかりが出来ている。

《もうちょっとくらいいいだろう》

《駄目ですよ。早くしないと、マスター寝てしまうでしょ？》

《へいへい》

俺は、仕方なしに起き上がった。

「じゃ〜」

俺の腹の上で寝ていた猫が、迷惑そうに鳴く。迷惑なのはこっちだ全く。

半年前に、新しい飼い主が見つかるまで預かるだけのはずだった猫が見つかったには見つかったのだが、この猫、俺の元から離れやがらなかったのだ。その後、様々な手段を用いたが、結局俺から離れることはなかった。

なので仕方なく、仕方なくっ、仕方なあ〜っくっ、俺が飼うことになった。

はあ〜。ホント面倒くせえ。

俺は猫を脇に抱えると、そのまま枝から飛び降りた。もちろん周りに人がいないのを確認してから。

俺は運動音痴と認識されているんだ。そんな俺が、数メートルの高

さを誇る場所から飛び降り、華麗に着地などできるわけないのだ。

だからばれないようにやらないといけない。

ホント、面倒くせえよな。

俺はそう思った後、猫を帰らせ（この半年で、ある程度しつけることができた）、人だかりのある場所まで歩く。

えっと、俺のクラスは……………

因みに人の群れの外からでも、俺の視力なら見ることができる。

んで、俺のクラスは…………… 2組か。

あつ、そーいや八神達って何組なんだろう？なるべくそのクラスには近づかないようにしないと。

え〜とと……………は？

《なあアイリス。俺の目はおかしくなったのかな？》

《言いたいことがよく……………成る程。残念ながら正常ですよ》

《……………そうか。なら、夢だな。うん、そーに違いない》

俺は目を擦って、もう一度よく見る。

場所は2組の名前の欄。

その中には、こんな名前があつた。

高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやて、月村すずか、アリサ・バングニス……

あ、因みに相良は五組ね。え？どうでもいい？そいつはすまない。

って、

《何この不幸ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウッ  
！！！！？？》

《今年は何かが起こりそうですねえ》

《本当に起こりそうだからやめてくれっ！！》

くそっ！これはマジでヤバいっ！！あの五人に関わるのはひっつじ  
よお~~~~につ、不味いっ！！

《なら関わらなければよいのでは？》

《……………あ、そっか》

よくよく考えたらそうだ。俺がまともに関わる人間なんて、この一  
年通しても相良だけだったしな！。

授業中は寝てて、休み時間も寝てて、お昼は屋上か別の場所で食べ  
て、放課後は教室か図書館で寝てる。半年前の中間の影響で、勉強  
を教えてくれと言った奴らもいたが、全て無視して昼寝にあてた（  
あれ以降俺がトップテンに入るような天変地異は起こらなかった）。

こんな奴に友達ができるかアッ!!

あ、一人いるか。

本人の前じゃ絶対言わないけど。

取り敢えず、いくら同じクラスになったからって、別にどうこうなる訳でもないだろ。

俺はそう思い、教室に向かうことにした。

……………おかしい。

「へえ。黒崎くんは一人暮らしなんだあ」

何でこうなった？

「じゃあ家事とか一人でやってるんだ。大変じゃない？」



誰か説明してくれ。

「うーん。でもこいつが料理してるところとか想像できないわね」  
取り敢えず俺が言えることは一つだ。

「アリサちゃん。失礼だよ」

そう、たった一つだ。

「まあまあ。あ、そついや黒崎くんってどこ住んどるん？」

へルプミイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ  
ッ!!!!!!!!!!

現在俺は、関わらないと誓った五人組に囲まれた。

何故こうなったのか、取り敢えず回想をいれてみよう。

\*

「ふあゝあ、ねむ……」

《十時間寝た人のセリフじゃないですよ、それ》

《うるせえなあ。眠いもんは眠いんだから仕方ねえだろ?》

まあ、始業式と連絡事項の話の時にでも、寝ればいいや。

そして教室に行き、目立たないように即行で席につき、机に突っ伏した。

んでその後、体育館での退屈な校長の話の時間を全て睡眠にあて、皆揃って教室に戻ってる時、事件は起きた。

「にゃあ」

なんと、俺が（一応）飼っている猫が、俺の足元まで走ってきやがったのだ。

え？しつ前はどうしたって？だからさっき言っただろ？『ある程度』、って。まあ、そういう訳だ。うん。

そして当然俺は注目的。俺は急いで猫を抱え、後者裏まで走って逃げた。

「はあ、はあ、はあ……………おい。何でここにいるんだ?」

「にゃあ」

「いやにゃあじゃなくて……………いいから家戻ってる。飯ならそんな時やるから」

「じゃあ〜」

「だああっ！肩に乗るなっ！いいから帰れっ！」

《猫に言葉が通じるとでも？》

《じゃあどつすりゃいいんだ？》

《さあ？》

《目覚ましはもう喋らなくていいぞ》

《ひびっ！》

「てか、あ〜〜。どつしよ〜〜」

「何が？」

「何がってそりゃあ……………誰だ？」

いきなり背後から声をかけられた。人の気配はあったが、まさか自分に話しかけてくるとは思わなんだな。

「にははは。私は高町なのは。君は？」

……………泣いてもいい？

てか何でいんのっ！？

「……………黒崎海斗」

取り敢えず名乗っとく。てか、これ以上関わらないで。

「なのはー」

「さっきの猫いたー?」

最悪な声が聞こえてきた。まさかとは思うけど、全員は来ないよね?

「……じゃあ俺はこの辺で。あ、猫ならここにおいてくから。それじゃ」

俺は猫をおき、さっさとその場を去る。

「にゃあ」

ついてくんじゃねえコノヤロウ。てめえのせいでこんなやつかいな  
ことになったんだぞコラ。

「懐かれてるね。君の猫?」

「只今飼い主絶賛募集中だ。どうだ?いるか?」

「にゃあっ」

引っ掛かれた。この恩知らずめ。

その後また肩に乗ってくる。その辺の木に一旦縛り付けてやるうか?

「本当に懐かれてるね。猫にそこまで懐かれるのって、中々ないよ

「？」

「三日会わなかったら、主人の顔すら忘れるさ」

猫ってそういうもんだろ？いつも自由気ままに行動する。次俺が生まれ変わるなら、猫になりたい。

「そんなことないと思うけどなあ……………」

確かに。この猫なら地球の裏側に捨てても戻ってきそうで怖い。

てか、後二年の間に新しい飼い主見つけられないとなあ。

「あ、なのは……………誰？」

しまった。逃げるの忘れてた。

因みに今はアリサ・バングニスね。

「あつ、やっぱりさっきの黒崎くんなんや」

「……………誰？」

「うわっ。半年前に世話したのにその態度って……………」

「冗談だ」

出来ればマジならよかったけどな。てか、三人来たってことは……………」

「なのはちゃん。いたー？」

「あつ、見つかったんだ」

＼H A H A H A H A /

もう笑うことしかできねえよ。

その後、はやてが猫好きで、全員で猫を探していたと聞かされ、そのまま猫を抱いたまま教室まで連行され、教師を説得して猫を机にのせた状態で連絡事項を聞き、自己紹介をし、終わった途端五人が机にやってきたのだ。

回想終了。

……………てか、何なのこの不幸っぷりは？

そりゃあ、世界を救う勇者だとかに選ばれるくらい不幸なのはわかってたけどさあ、これじゃ某とるの主人公並に不幸よ？

不幸だあゝって叫んでいい？

《美少女五人に囲まれて不幸だなんて……………この男の敵っ！！》

《てめえは女だろっがっ!!》

まあ確かに、周りの男どもからは殺意のこもったあっつっっい視線がこちらに向けられている。

気にしないがな。

「にゃあゝあ  
」

諸悪の根源は只今机でお昼寝中。こいつが机にいるせいで俺は寝ることができない。教師がオーケーした最大の理由が、俺の睡眠防止のためだったりするのは、言うまでもないことだ。ンで、その諸悪の根源を目を輝かせながらつついたり写メとったり眺めたりしている五人。

俺はそっつと立ち上がろうとしてみる。

「どこ行くの?」

高町がいち早く気付き、そう聞いてくる。

「ちょっとトイレに……」

「カバンを持って?」

「もう帰宅しようかと……」

「まだ猫寝てるじゃない」

「起きるまで待つてあげようよ」

「…………お前、もうこいつらに飼ってもらえよ。そのほうが絶対幸せだぜ？」

「ほつといても勝手に帰ってくるんだけどなあ……………」

「あかんで。飼い主やねんからその辺はちゃんと責任もたな」

《《そうですねっ！これを期に今後この猫を可愛がりましょうっ！！》》

《《てめえはどっちの味方だ》》

《《女の味方です》》

ああ。成る程。確かに男が一人の状況では、そういう返しもありなのか。

「そついえば、この猫何て名前なの？」

「名前？」

……………………そついやまだつけてなかった。

「その猫はな、夏目漱石の小説から出てきた猫なんだ」

「…………要するに名前をつけてないっちゆうこつちやな」

「紛らわしい言い方してんじゃないわよ」



「さーせん」

てか、よく今まで気付かなかったな俺。何だかんだでもう半年だぞ？

「じゃあ、今名前をつけようよ」

「誰が？」

「……」黒崎く以外に誰がいるの（よ）（んや）「」「」「」

「え〜〜。俺エ〜？」

《マスターツ！頑張って素晴らしい名前をつけてくださいっ！》

《毎回思うが、お前って何でそんなにこいつが好きなの？》

《こいつじゃありませんっ！タマですっ！》

《てめえが既につけてんじゃねえかっ！！しかも超ベタな名前っ！

！》

「ほら、早くつけなさいよ」

「ゆっくりでいいからいい名前をつけてあげてね」

正反対のことを言ってくるバングニスと月村。

う〜む。よし、決めた。

「アーノルドシュワルツェネッガーで」

「「「「「《却下》」」」」」

「即行っ!?!」

「当たり前でしょうがっ!もうちょっと真面目に考えなさいよっ!  
!」

「じゃあタマで」

「うわっ。絶対めんどいからこれって感じで決めたやる」

「そうだが?」

「いや何で威張るの?」

「てか、お前らが決めろよ」

「「「「「ダメッ!!」」」」」

「うええ……………」

何で俺、こんなめんどくさいことしなきゃいけないんだろう……………

《マスター。私の時みたいに何か意味を考えてつけねばどうでしょう?》

《意味ねえ……………》

アイリスとは俺がつけた名前で、一応意味を考えてつけてみた。

《ん〜。じゃあ……》

「ソラ、でいいか？」

「そらっ？」

「ああ。空みたいな澄んだ心を持ってってくれって意味でつけてみた」

実際は、空が好きだからつけてみただけだが……

さあて、また却下かな？

「何よっ！ちゃんとした名前つけれんじゃないっ！」

「うん。いい名前だと思うよー」

「澄んだ心かあ……いい名前をもらってよかったね、ソラ」

予想に反して大絶賛。

《……なあ。いい名前なのか？》

《自覚ないんですか？》

《……まあいいや》

「ソラ、いい加減起きろ」

俺はソラの体を揺する。

「じゃあ〜」

呑気な声とともに起きる。

「これからお前の名前はソラだ。わかったな？」

「じゃあ」

「……………凄いわね」

「言葉が通じとる？」

外野の言葉は無視だ。

「んじゃ、帰るか。じゃあなあ」

俺は五人に軽く手を振って、教室を後にした。

「はあ〜。疲れたあ」

俺は帰った途端、机にダイブした。

今日はホントろくなことなかった。

関わらないと誓った初日に関わることになるなんて……

「ホント最悪」

「じゃあ」

今日一日の俺の不幸の原因が、ベッドの下の猫専用の寝床で鳴いている。

ああ、そついやこいつにとってはいいことあったな。

「ん〜。ま、名前決まってよかったな、ソラ」

「じゃあっ」

ソラの元気な鳴き声を聞いた後、俺は眠りに落ちた。



## その4 新しい学年（後書き）

### 次回予告

二回目の始業式。海斗にとっては最悪な、ソラにとっては最高の形で終わった。

翌日、憂鬱な気分で行った海斗に、全て夢であってくれと願わずにはいられないことが……

次回、魔法少女リリカルなのは〜面倒くさがり屋の勇者 その5  
隣の悪魔

Take Off

その5 隣の悪魔(前書き)

感想待ってますっ!!



## その5 隣の悪魔

海斗 side

「あゝあ。今日はもう学校さぼってよくね?」

《もう学校の敷地内にいるのに何言ってるんですか……》

今俺がいるのは、昨日見つけた桜の枝のベッドだ。

いやあ、このフィット感。たまりませんなあ。

「このまま今日は一日寝て過ごそう。ソラもきつとそのほうがいいに違いない。な?」

「こやあ〜」

俺の腹の上で寝返りをしながら、ソラが鳴く。てか器用だなオイ。

《こんなときだけソラに頼るなんて……漢として情けないと思わないのですか?!?》

《俺は漢じゃなくて男だから別にいいんだよ》

《雄つてことには変わりないですよ。それよりもつすぐ予鈴が鳴るので、早く教室に行ってください》

「もうンな時間かよ……おいソラ。起きろ」

俺はソラを揺すって起こした後、脇に抱えて地面に降りた。

「んじゃ、今度こそちゃんと家で待ってるよ。今日は午前で終わりだからな」

「じゃあっ」

そう言ってどこかに走り去るソラ。頼むから行き先は家であってくれ。

《何だかマスター、いきなりソラに優しくなりましたね》

《え？そうか？》

《はい。自覚ないんですか？》

《ん〜。名前つけちまったせいで愛着でできたとか？》

《そうかもしれないねえ。いい傾向です》

《俺にとってはよくない傾向だな》

教室に向かいながら、そんなことを話していた。時々、ソラがついてきていないか確認するために、度々後ろを振り返ったが、今回はちゃんと戻ってくれたらしい。

俺は、ホッとしながら教室のドアを開ける。

「じゃあ」

なっ・んっ・でっ・いるんじゃあああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああっっ！！！！！！

さっき校舎と逆の方に走っていったらろっがあっ！！！！

「あっ、黒崎くんおはよー」

俺の席の上で寝転がっているソラの周りには、人だかり（主に女子）  
ができていて、そこに近づいた俺に気付いた高町が挨拶してきた。

「ああおはよ。それより状況を説明してくれ」

ソラと別れてまだ5分も経ってないぞ？

「私が校舎に入ろうとしたら、ソラを見つけたから、そのまま連れて  
きたんだ。そしたら人だかりができて……」

「お前のせいだよっ！！」

はぁ~~~~~。今日はゆっくり寝れると思ったのに……

このまま行くと、ソラってこの学校のマスコットみたいにならない  
か？

「こゃあ〜」

「かわいいい~~~~っ！！」（B Yクラスの女子一同）

いや、既にマスコットか。

「てか、何普通に校舎に動物持ち込んでんだよ」

「昨日良かったし、今日もいいかなって」

「……………はあ。もうどうでもいいや」

俺は盛大にため息をついた後、高町に向き直った。

「今回こいつを連れてきたのはお前なんだから、責任持って今日はお前が面倒みるよ」

「う〜ん……………まあ、しょうがないかな」

うっしっ！これで思う存分昼寝ができるうっしっ！！

き〜んこ〜んか〜んこ〜ん

予鈴が鳴り、全員が自分の席に戻る。

さあて、早速寝るか。

俺は自分の席につき、早速机に突っ伏した。

「ぐ〜」

ああ、幸せ……………

ゆさゆさ

誰かに肩を揺すられるが気にしない。

ツンツン

頬をつつかれるが気にしない。

「じゃあ〜」

ザクツ (何かが俺の頬に刺さる音)

ピュー (俺、出血)

「いってええええええええええええええええっっ!!!!」

あまりの痛さに飛び上がる俺。

「じゃあ」

鳴き声のしたほうを見ると、爪を俺のほうに向けたソラと、それを両手で持って、笑顔でこつちを向いている高町がいた。

.....ん？高町？

「.....とりあえず、俺を起こしたことについては後にして、何でお前がそこに？」

高町が座っている席は、俺の隣だった。

「昨日気付かなかった？ここ、私の席だよ」

「.....」

そついや昨日、五人に囲まれてたとき、こいつが一番早くに來たけど……………

まさか隣だったとは。

気付けよ俺。

「……………おやすみ」

全て忘れて、夢の中で幸せを勝ち取るつ。

ザクツ（さっきと同じ）

ピュー（さっきと同じ）

「ぎゃああああああああああっ！！！！？」

「今度こそ起きた？」

「起きたよっ！あまりの痛さに眠気もどこかにぶっ飛んだよっ！もうお目眼パツチリだよっ！！」

「HRの最中に寝ちゃ駄目だよ」

「じゃあ」

くっ、ソラの奴……………いついつ時だけ敵にまわりやがって……………

「別に俺は困らない。という訳でおやすみ」

俺はまた寝る。

コンコン

今度は教科書の角で叩いてくる。

痛い痛い。

「……………何の嫌がらせ？」

「嫌がらせじゃないよ。友達が不真面目だから正そうとしてるだけだもん」

……………  
は？

「友達？」

「うん、友達」

「誰と、誰が？」

「私達と黒崎くんが」

「……………おやすみ」

これは悪い夢に違いない。

ザクッ

「ぎゃあああああああああああつっ！！！？」

「黒崎うるさいっ！！」

担任に怒られました。てか、この悪魔の暴行を止めてくれ。

カツーンッ（教科書の角が俺のこめかみにクリーンヒットする音）

「……………高町さん？」

「何か失礼なと言われた気がして」

心を読んだっ！？

「じゃあ〜ん」

そして元凶はお昼寝中……………

《もつやだ》

《ドンマイ、マイマスター》



「ぐ〜」

今は授業中。そして俺は熟睡中。

コンコン（教科書の角で叩かれる音）

ふっ。もうその程度じゃ起きないぜ。ソラももう家に帰ったしな。

コンコンコンコン（叩き続ける音）

無駄無駄。

コンコンコンコンコンコンコンコンコンコンコンコンコンコンコンコン  
コン（同じ場所を叩き続ける音）

あれ？だんだんめっさ痛くなってきたよ？

「よおし。今止めをー！……」

「さしちや駄目だろっ！！」

俺は高町に向かって叫ぶ。

「よつやく起きたね」

「頼むから寝かせてくれ……」

「授業中は寝ちゃ駄目だよ」

「そんなの知らない。じゃあおやすみ」

今度こそ夢の中に……

ゴツ（辞書の角で叩かれる音）

「~~~~~っ！！！？」

あまりの痛さに悶絶する俺。

「た、高町……それはシャレにならない……」

いつてえ〜。まだ頭ずきずきする。

「シャレのつもりなんてないよ？」

「お願いだからやめてくれ」

そしてまた机に突っ伏し、高町に起こされる。

んで、何故か周りの男どもから殺気を感じる。

教師のほうは、最初はうるさいと注意していたが、結局は諦めた。頼むからもっと注意して高町を止めて欲しいが、「お前が寝なければいいだろうが」という返答が返ってくるのは火を見るより明らかなのでしない。

他の4人に関しては、俺には呆れたような視線を、高町には同情の

視線を送っていた。くっ、これが女尊男卑ってやつかっ!!

《いえ、マスターの人徳のなさと行動の結果ですよ》

目覚ましが何か戯言を宣ってるが気にしない。

《だから何度も言いましたが私は……………》

《目覚ましだろ?》

《違いますよっ!!》

まあ目覚ましは置いといて……

《何度でもやめてくれるまで私は……………》

参ったなあ……………これじゃ昼寝できないじゃん。

そんなこんなで、頭にたんこぶをいくつも作り、放課後をむかえた。

「ふあゝあ。さゝって、帰ってゆっくり昼寝でも……………」

「よっしやあっ!今日は黒崎くん家におじゃまするでーっ!」

「……………おおーっ!……………」

バツ(ダッシュで逃げる音)

ガシッ(運動神経抜群の月村に掴まる音)

「離せエツ!! 離すんだアツ!!」

「離れたら逃げるから駄目」

「てか、何で俺の家に来んだよっ!?!」

「ソラに会いたいから」

「……もうお前らが飼えよ、ホント」

そんな訳で、俺の最悪な一日が始まった。

海斗 side

## その5 隣の悪魔（後書き）

### 次回予告

五人を家に招く事になってしまった海斗。

いやいやながらも仕方なく家にあげる海斗。

果たして海斗はどんな応対をするのか……

次回、魔法少女リリカルなのは〜面倒くさがり屋の勇者〜その6  
始まりは突然

Take Off

その6 始まりは突然(前書き)

感想待ってますっ!!

## その6 始まりは突然

海斗 side

はあ〜あ……

ホント、何でこんなことになったんだろ？

目の前の光景を見てそう思う。

「へえ。結構片付いてるね」

「片付いてるっていうより、何も無いわね」

「趣味とかないの？」

「ソラ、寝てるんやなあ……」

「まあまあ。そのうち起きるよ」

場所は俺の住んでるマンション。

あの後こいつらマジでついてきやがって、そのまま家にあがりこみやがったのだ。

住居不法侵入で訴えられるかな？

《人徳の差でマスターが負けるほうに一票》

うるさいガラクタ。

《またゴミ扱いつ!?!?》

因みに俺の住んでるマンションは3LDKで、一人暮らしにはちょっと贅沢な物件だったりする。

まあ別に1LDKで良かったんだけどね。掃除めんどいし。

「てか、お前ら人の部屋勝手に漁るなよ」

「まあまあ」

「気にしない気にしない」

「いや気にするよ。いやんな事より、俺今から寝るから帰ってく  
ね?」

「そついやもうお昼の時間やね」

「あつ、黒崎くんの料理食べてみたいかも」

「そうね。本当に料理ができるのか、私が直々に確かめてやるわ」

「「さんせい」」

「人の話を聞けエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ  
エエエエエエエエエエエツツ!?!?!?!?!」

てか、お願いだからもう帰ってホント。



こっちとしては、管理局に関わるものが何時見つかるかとヒヤヒヤしてんだからさあ。まあ、絶対に見つからない場所に隠してるけどな。

「じゃあ〜あ  
「

最悪のタイミングで起きやがったなコノヤロウ。

「……………」

ソラの奴が昼飯をよこせと目で語ってくる。ここで無視して昼寝をすると、爪による制裁が加えられてしまう。

ホントに恩知らずな猫だなオイ。

「……………はあ。しゃあないか」

俺は台所に向けて歩きだす。

「どこ行くの？」

「台所。ソラの飯用意しないといけないんでな」

つつても、ただ単にキャットフードと猫用のミルクをあげるだけだが。

「じゃあついでに私達のも」

「お前ら遠慮って言葉知ってるか？」

「知ってるけどそれが？」

「友達なんだから遠慮はなしてことで」

「……………俺って何時の間にかいつらの友達になったんだろ？」

昨日関わらないって誓って、今は家にあげてる。

おかしい。できれば昨日の朝から人生やり直したい。

「自分で言うセリフじゃねえだろそれ。後、お前らの分は作らな…」

「……………お願い……………」

上目遣いで頼んでくる五人。だが残念ながら、そんな程度では俺は下らない。

「明日はゆっくり昼寝していいから」

「何がいい？」

即効で下った俺だった。

「で、味の感想は？」

「「「「「.....おいしい」「」「」「」

心底意外そうに呟く五人。

「そりゃよかった。じゃあさっさと食べてさっさと帰ってくれや」

「あんたもうちょい仲よおしようと思わんの？」

「思うよ。だから中の良いお前らはきつと俺に睡眠の時間を与えてくれると信じてる」

「なら私らソラと遊んでるからどっぞどっぞ自由に」

「.....はあ。もうどっどこでもしてくれ」

「そつする」

泣いてもいいですか？

《不幸だと叫んでもいいです》

《明日は生ゴミの日かな》

《超すいませんでした》

その後、八神達は部屋を我が物顔で使い、ソラと遊ぶだけ遊び、気が付けば夕方になっていた。

てかエース3人。仕事はいいのか仕事は。

「じゃあ、そろそろ帰ろっか」

「そうだね」

「もうちょっとソラと遊びたかったなあ」

「あげようか?」

「じゃあっ」

ザクッ

「いっきゃああああああああああっ!!?!?」

「じゃあまた明後日」

「………は?」

明後日?

「今日は土曜だよ」

ああそっか………っつっ!!

「てめえまさかさっきの昼寝していいってのは

「じゃあねー」

ボタン

ドアは閉じられた。

「ふざけんなああああああっ!!!!」

俺の叫びは、誰にも聞き入れられることはなかった。

「はあ~~~~」

俺は今、盛大にため息をつきながら、夜の町を歩いている。

別に卑猥な意味ではなく、ただあの後ふて寝して、気が付くと深夜だったのだ。んで、腹が減って何か食べようと思ったのだが、冷蔵

庫に何もなかったので、適当に吉野家の牛丼でも食べに行こうと思  
った次第だ。

そして俺がため息をついている理由は、言うまでもなくあの迷惑娘  
五人組のことだ。

もうぜつてえあいつら家にあげねえ。

《でもマスターのことだから、何だかんだで結局またあげる予感が  
……》

《言うな。悲しくなるから……》

俺は今日の不幸を忘れるために、牛丼をやけ食いした。特盛りを四  
杯も食べた。三杯目に入ったあたりから味はわからなくなったがな。  
食い終わってすぐにトイレに籠もったことは、言うまでもないか？

「うう……不幸だ」

《自業自得でしょう……》

トイレから出て、もう後は帰って明後日まで寝るだけだ。

《いや何十時間寝るつもりですか……》

《三十時間と二十五分》

《正確に答えたっ！？てかどんだけ寝るつもりだアンタッ！！》

《敬語敬語。まあ昼寝が座右の銘の男だから、俺》

《全く……あなたはどれだけ寝れば満足するんですか？》

《揺りかごから墓場まで》

《まさかここでその言葉を使うとは思いませんでしたよ。てか、もうそれ死人と変わりませんよね》

うるせーなあ。俺から昼寝とったら何が残ると思ってんだよ。

俺はそう思った後、空を見上げた。

綺麗な満月が浮かぶ空は、何だか自分が幻の中にいるんじゃないかと錯覚させる。

いや……俺の存在自体が、幻みたいなもんか。

勝手に選ばれ、勝手に殺され、勝手に生き返らせられて……

俺って一体何なんだろうな？ホント……

……やめよ。

んなこと考えてるくらいなら、さっさと帰って寝たほうが有意義だな。

そう思い顔を前に向けた瞬間だった。

異変が起こったのは。

周りの景色から色が失われていく。

「っ!？」

これは……………結界っ!？」

対象は俺か？

一体誰が……………

ゾクッ

「っ!？」

殺気っ!!

俺は急いで後ろを振り向く。

すると、そこには一人の男がいた。

背は俺と同じ160cmくらい。サラサラの金髪を肩まで伸ばし、たれ目に水色の瞳、整った顔立ちはどこか浮世離れしていた。



……どう考えても日本人じゃないよな。

って、当たり前か。

「お前……何者だ？」

後ろに後退りながらそう聞く。

「何者……か。そんなのこっちが聞きたいくらいさ」

「？」

どういうことだ？

「君は知ってるんだろう？この力のことを」

この力？

……まさかっ！！

男が右手を前に向けてくる。

まずっ！！

俺は急いで複写眼を発動し、相手がどういつ攻撃を放とうとして  
いるか、瞬時に解析する。

「鉄」  
「くろがね」

男がそう呟いた瞬間、右腕に男の数倍はある大きな大砲が現れた。

俺は力一杯地面を蹴り、横に跳び、倒れるように地面に着地する。

ドオンッ！！

ドガガアアアアアンツッ！！！！

瞬間、さっきまで俺のいた所を、黒い砲弾が横切った。

あつぶねえっ！！

俺はすぐに起き上がり、男と対峙する。

こりゃあ……………間違いないな。

《アイリス。一応聞くけど、あいつって…………》

《……………はい》

アイリスが、重々しく頷く。

「そういえば、自己紹介がまだだったね」

男が口元に笑みを浮かべながら、そう言ってくる。

「ボクの名前はアルセイド。アルセイド・シファーだよ」

《奴らの……………一人です》

はあ~~~~。ろくな一日じゃないな、ホント。

海斗 side out

## その6 始まりは突然（後書き）

### 次回予告

突如現れた七人のうちの一人、アルセイド・シファア！。

面倒くさがりながらも仕方なく戦うことにする海斗。

誰もいない夜の町での戦い。

果たして勝つのは一体……

次回、魔法少女リリカルなのは～面倒くさがり屋の勇者～その7  
神器

T a k e O f f

## その7 神器(前書き)

やっとバトル展開?.....

感想待ってますっ!!

## その7 神器

海斗side

ん~~~~ん？

おっかしいなあ。

確か俺は、今日一日の不幸を忘れるために、家で三十時間二十五分寝る予定だったはずなのに……

「君の名前は何て言うんだい？」

何でこうなった？

目の前の男、アルセイドを見てそう思う。

てか、さっきの大砲ってやっぱり……

うえきの法則の神器？

てか、勝ち目なくね？

おっと。そーいや七人についての情報をあまり話してなかったな。

いい機会だから話しておこう。

この七人ってのは、自分が何であんな力を持っているか知らないんだ。

理由としては、あのクソ神が、間違えて力を与えてしまったからだ。そして、子供達はその異質の力が何かわからず、苦しみ、歪み、そして壊れる。

もちろん全員がそうという訳ではない。だが、さっきのこいつの口振りから、どうもそんな感じがする。

多分、子供の頃に迫害をうけてた可能性があるな。

え？何でそんなすぐにわかるんだって？

それはまた別の話になるから置いておこう。

まあつまり、この七人ってのは、クソ神の被害者みたいなもんな訳だ。

で、俺は世界を救うとか言われたけど、実際はただのクソ神の尻拭いなわけだなこれが。

ならどうして世界が滅ぼされるとわかるかというところ、神の持つ予言書に、その七人が世界を滅ぼす旨が現れたらしく、止めるためには適性者を探すしかなかったらしい。

それが俺になる。

そして、力つてのは、全てどこかのパラレルワールドの力らしい。

俺の複写眼だってそうだ。伝勇伝の世界に酷似したパラレルワールド

ドの世界の力を、俺に移植した形になる。

今俺が対峙している相手は、うえきの法則に酷似したパラレルワールドの力を持っているんだろう。

奴らがお互いのことを知らないのも、当たり前だ。

だが、ここで一つ問題になることがある。

何で俺が力を知っていることを、あいつは知っているのか、だ。

その事を知っているのは……

“あいつ”か。

《最悪の奴からの刺客だな》

《やはりそう見ますか？》

《そりゃ、それしかあり得ねえだろ。後可能性があるとしたら、三年前のあれだな》

《例の未確認ですか？》

《そう。あれに俺の力が録画か何かされて、それで同じ穴のムジナとして、俺の所に来たか》

《できれば後者であることを願います》

《俺も出来れば、そうあって欲しいと願わずにはいられないよ》



俺は、アイリスのステルスモードを解除した。

「それが君のデバイスかい？」

「そうだ。アイリス、セットアップ」

「Stand By Ready」

俺の周りが一瞬白く光り、光が収まった時、俺の服装はだらけた私服からバリアジャケットに変わっていた。

まあぶっちゃけ、ライナの服丸パクリだけどね。

「変わったバリアジャケット」

「自覚してるよ」

「ふうん。で、君の名前は？」

「黒崎海斗。別に覚えなくていいぜ」

俺は一步前に踏み出す。

「もう、会うこともないだろうからなっ！..!」

俺は半瞬で魔法陣を描く。

「求めるは雷鳴>>>・稲光いしひかりっ！..!」

魔法陣から、稲妻が放たれる。

ドガガアアアアアンツツ！！

アルセイドを、轟音を轟かせながら稲妻が襲う。

アルセイドの周りを、稲光の衝撃によって舞い上がった土煙が覆い、  
どうなったのか確認できない。

「あゝあ。傷くらいついてもいいと思うんだけどなあゝ」

「何寝呆けたこと言ってるんですか」

土煙が晴れていく。

「あの程度で傷がつくようなら、わざわざあなたをこの世界に派遣  
したりしません」

そこには、巨大な腕みたいなものがあった。

「威風堂堂フェードか……………やっぱり頑丈だな」

「鉄くわがね」

威風堂堂が消えた瞬間、大砲がこっちに向かって飛んできた。

「やばっ」

俺はそれを横に跳んでよける。

「唯我独尊」

すると、今度は俺の着地した地面がひび割れ始めた。

「ちいつ！」

俺は急いで空間に文字を走らせる。

「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿すつ！！」

俺の体が一瞬光った後、俺の移動速度が一気に加速される。

脳のリミッターを無理矢理はずし、一時的に肉体の限界速度で移動を可能にする魔法だ。

ドガアアツ！！

後ろでは恐らく、立方体の顔みたいな奴が、地面ごと俺のいた場所を噛み砕いているのだろう。

俺は魔法によって加速したまま、アルセイドに突っ込む。

そして、右手を上下左右に動かし、光の格子を描く。

「西、無、陣、陽の向きから……」

それに気付いたアルセイドが、対抗するように右手をこちらに向ける。

「五ツ星神器……」

右手がうつすら光りだす。

「光輝を生み出すっ！」

「百鬼ヒツク夜行ッ！！」

光の槍と、ばかでかいドリルがぶつかりあう。

ドガガアアアアアンツ！！！！

爆発の衝撃の中を突っ込む。

神器の弱点は接近戦では使いにくいことっ！

このまま接近戦に持ち込むっ！

俺は更に速度をあげ、アルセイドに突っ込む。

そして、カー杯拳を握り、アルセイドの顔面めがけて放つ。

「電光ライカ石火」

だが、アルセイドがいきなり俺の目の前から消えた。

高速移動の神器っ！？

まずっ……

俺は体を屈めて地面を転がるように横にとんだ。

ドゴアッ！

一瞬前まで俺のいた場所に、ドリルが突き刺さっていた。

もし避けるのが遅れたら死んでいたかもしれない。

俺はすぐに起き上がり、二回バク転して、一旦距離をとる。

「やるね」

アルセイドが笑みを浮かべてそう言うてくる。その笑みは、どこか狂気に満ちたものだった。

「誉められても、全く嬉しくないぜ？」

実際そうだ。現状でいえば、向こうのほうが力は上っぽい。

そんなに差はないだろうが、勝ち目はあんまりなかったりする。

そんな奴に誉められても、皮肉にしか聞こえない。

……………本気でやるか？

いやいや。何でんなめんどいことを……………

「じゃあ、おしゃべりはこの辺にして、続きと行こうよ」

アルセイドの右手が光り出す。

「六ツ星神器……」

また電光石火<sup>ライカ</sup>か。

ならこっちは、

俺は半瞬で魔法陣で描く。

「電光石火<sup>ライカ</sup>っ！」

「倒地<sup>ちがしり</sup>っ！！」

アルセイドが消えたのと同時に、俺は自分の目の前に大きな穴を穿つ。

その後すぐに一步横に移動する。

瞬間。

「っ！？」

穴のせいで、電光石火<sup>ライカ</sup>を引っかけて豪快にアルセイドがこける。

電光石火<sup>ライカ</sup>の弱点はジャンプできないこと。

だから穴とかでこぼこの地面を走ることはできない。

俺はこけたアルセイドに向けて、描き終えた魔法陣を向ける。

「チエックメイトだ」

俺がそう言つと、アルセイドはさっきよりも笑みを深くした。

「……………何がおかしい」

「フフフツ……………あの人の言つ通りだと思つたのさ」

「……………」

しまつたな。いくら余裕がなかつたとはいえ、失念していた。

「君は初めてボクの能力を見るはずなのに、まるで始めから知つていたかのように的確に弱点をついてきた。やっぱり君は知ってるんだね」

「……………お前の言つあの人つてのは……………」

「おしゃべりはここまでにしよう」

アルセイドがそう言つた瞬間、目の前からいきなり消えた。

「なっ……………」

「今日はただの様子見さ」

後ろから声が聞こえてきた。

……………まさか、

「『理想を現実に変える力』、か？」

「正解。やはり君はこの力を知っているんだね。しかも正確に」

目の前から消えたように見えたのは、消えるほど速く動く電光石火ライカを理想したってところか？

「今日のところは退かせてもらおうよ」

「逃がすと思うか？」

「ええ。君だってわかってるだろう？あまり長くここで戦うのが、得策ではないことに」

「……………ちっ」

俺はバリアジャケットを解く。

こいつの言う通りだ。いくら結界をはっているとはいえ、管理局、主に高町達に気付かれるのは、時間の問題だ。

「フフフ。また会おうよ」

そう言って、背中から羽根を生やし、アルセイドはどこかへと飛び去った。

「……………なあアイリス」

「何ですか？」



「昨日お前の言った通りになったぞ」

「……………そうですね」

これが何かの始まりなのか……………

それとも、何時の間にか始まっていたのか……………

まだ始まってもいないのか……………

今の俺には、分からなかった。

ただ一つ分かっているのは、今回のことを裏で手を引いている奴が、最悪の奴だということだけだった。



## その7 神器（後書き）

### 次回予告

アルセイドが去った翌日。

いつものように昼寝だけで一日を過ごすつもりだった海斗だが……

そして、意外な相良の一面がっ！

次回、魔法少女リリカルなのは〜面倒くさがり屋の勇者〜その8  
付き合い

Take Off

その8 付き合い(前書き)

感想待ってますっ！

## その8 付き合い

海斗 side

「……………はあ。眠い」

《あれだけ熟睡していた人の言葉じゃないですね》

《ほっとけ》

時刻はすでに昼。俺は今、学校に向かって歩いていた。

昨日のアルセイドとかいう奴との戦いの後、相良から電話があったのだ。

内容はこうだ。

『練習に付き合え』

あのがり勉。実は部活は総合武術格闘競技選手育成部とかいう訳のわからない体育会系だったりする。

まあ内容はまんま、いろんな実戦用武術を訓練するといったものだ。

これがまた結構本格的で、戦いの最中に柔術から空手、空手から中国拳法に変えたりと、その辺の不良程度なら軽くひねれるくらい強かったりする。

部員数は五名と首の皮一枚繋がった状態の部活だがな。

で、何故俺がこんなことに巻き込まれるかというところ、稀に他の四人が、たまたま用事があったり来られないことがあるらしい。まあまだ青春真っ盛りな年頃だ。一人二人休むのはよくあるらしい。相良だってたまに休むしな。

まあそんなわけで、今日は相良一人で練習相手がいないので、俺に呼び出しがかかった次第だ。

因みに相良は俺の身体能力のことは知っている。あ、魔法については知らないよもちろん。

何故知っているのかと言われれば、答えは簡単だ。

半年前に、八神にテスト勉強を教わった後、次のテストからは相良に教わっていたのだが、教えて欲しければ部活に付き合えとか言いだしたのだ。

その時の俺は、そんな訳分かんない部活とは知らなかったんで、適当にやって終わるつもりだったんだ。

だが、学校の道場についていたら相良以外いない。気になって聞いてみたら、その日相良以外の部員は休みとのこと。んで、どんな部活か聞いてみりゃあれだ。

そんでしかたなくくっ、適当に相手してやろうと思ったら、相良の奴が予想以上に強い何のって……

で、反射的にほんの少しだけ本気をだしてしまっただけだ。結果、相良にばれる。

それから一人の時は毎回付き合うと言われたのだ。バラすぞと脅されたしな。

ちきしょう。あの外面いい子ちゃんがあ……

今日“も”徹底的に痛めつけてやらあ。

「フッフッフッフ……」

《不気味ですよマスター》

うるせえっ！

「ん？来たか」

学校の道場の真ん中で、中国拳法の突きの練習をしていた相良が、こちらが来たことに気付く。

ああ来たともさ。昼寝の邪魔された恨みを全てお前にぶつけるためにな。

「じゃあ早速……」

「死ねやあつ！」

相良の言葉を待たず、いきなりドロップキックをかます俺。

「どわあつ!?!」

チツ。間一髪で避けやがった。

「よし。始めるか」

「つて、今のをスルーするとも思ってるのか?!」

「ん?何かあつたけ?」

「お前つー」

「隙ありつ!」

「ごちゃごちゃうるさい相良に、ノーモーションで右正拳突きを放つ。

「だあつ!?!」

しかしそれも体を反らし避ける。

くそつ!この半年で反射神経かなり上がったな……

不意打ちしすぎたか?

「お、お前……」



「前に言わなかったか？この世に卑怯なんて言葉、あつてないようなもんだつて。不意討ちなんかでやられたら、油断してるそいつが悪いんだよ」

実戦ではそうだ。敵がばか正直に真正面からばかり向かってくるわけがない。いつも後ろを警戒し、神経を張り詰める。まあ、ここまですんのはあんまないだろうけど……

実際めつたに役に立たないしな。サーチャー使つて後ろ見ろつて話だよ。

「お前は一体どこの傭兵かぶれだ」

管理局のだよ、とは口が裂けても言えない。

「何言つてんだ。一般常識よ？」

「うそつけえっ！」

「はいもういっちょー」

相良が突っ込んでできた隙に、間の抜けた声をあげながら、容赦のない蹴りを放つ。先ほどの不意討ちとは比べものにならない速度で。

「がはっ」

流石に今度は避け切れず、まともにくらい、吹っ飛ばされる相良。

ぞまあ。

「お、お前という奴は……」

「ふっ。ちよろいな」

「……………もうぶちギレたぞ」

「こっちはとっくにぶちギレてるっての」

昼寝の邪魔しやがってっ！

さっさと再起不能にして、家に帰ってゆっくり寝る。

お互いに少し距離をとり、構える。俺はポーツと突っ立てるだけだが。

相良の構えは……中国拳法の、八極拳か。

「いくぞっ！」

そう叫んで、突っ込んでくる相良。わざわざ突っ込むこと相手に言うな馬鹿。

俺の目の前に来たところで、水月に掌底を放ってくる。

それを体を半回転して受け流し、足を引っかけ首に手をかけ、頭からこかせる。

「くっ……………」

顔面からこけたが、すぐに立ち上がって踵回し蹴りを顔面に放つてくる。

それを一步後ろに下がって避ける。

次にジャブを二発放ってきたので、顔を左右に動かし避ける。

今度はムエタイか。

「ふっ」

「っつ」

と思つたら、今度は顔面と水月に同時に突きを放つ空手の山突きを放つてきやがったので、それを両手で受けとめる。

しかしそれは罠だった。受けとめた両手の袖を掴んできて、そのまま背負い投げで投げようとしてくる。

今度は柔術かよ……

俺は力に逆らわず、ジャンプし、逆に相良の投げようとする力を利用し、一回転して着地する。

「なっ……」

「だから甘いつての」

俺は驚愕している相良の頭に、アチヨーと言いながら、チョップを

かます（一切手加減していない上、力の配分をしっかりしているのでものすごい痛い）。

「~~~~っ！」

痛がっているのを無視して、さっき失敗したドロップキックをかましてやる。

「ぎゃあっ!?!」

吹っ飛ばされた相良のもとに駆け寄り、最後にサブミッションを決めてやる。

「ぎゃああああっ! タップッ! タアアアアアアアアップッ  
!?!?!」

「だ~~~~め」

「ぎゃあああああああああああああああっ!?!?!」

あの後、一時間ほど相良を一方的にぼこり、今は昼食を食べるために街を歩いている。もちろん私服で。

「練習に付き合ったんだから、昼食奢れよ」

「あんだだけぼこした相手によくそんなこと言えるな」

「何のことやら。それより奢れよ」

「……………はあ。今月はまだ余裕あるし、いいか」

余裕がなくても無理矢理出させたがな。

「んじゃ、適当にマックでも行くか？」

「あ、それなら最近いい喫茶店を見つけたんだが、行かないか？」

「喫茶店か……………まあ奢りならなんでもいいや」

「……………いつか絶対負かす」

やれるもんならやってみろ。

「へ〜。中々内装結構いいじゃん」

喫茶店を見渡して、そう呟く。

「だろ？味も中々だぞ」

「ふうん。じゃあ……」

適当に高そうなのを頼み（相良への嫌がらせ）、相良と適当にダベる。適当ばっかだな……まあいいや。

そして料理を食べ終わった。

「……うまかった。相良の紹介なのに」

「どっという意味だコラ」

「気にしない気にしない」

「てめえ……ぐっ」

「相良？」

「は、腹が……」

「……はあ。行ってこい」

食べ過ぎで腹を壊した相良は、トイレへと駆けていった。

「あいつって頭いいのに馬鹿だよなあ」

《マスターとは真逆ですね》

頭悪くて卑怯って言いたいのかコラ。否定は一切しないがな。戦場で生きていくのには、必要なスキルだ。

《にしてもマスター……いいんですか？》

《何が？》

《昨日の……アルセイドと言いましたか？対策を取らなくて》

《ああそれね。別に、弱点ならわかってるからいんじゃない？》

《弱点……ですか？》

《そ。まず、神器は、威力はあるけど、その大きさ故に、近距離での戦闘を苦手にしてるから、格闘戦にもっていけば勝てると思う》

《では、あの『理想を現実に変える力』については？》

《あれにも弱点はある。まず、力の『限定条件』だ》

《限定条件？》

《そ。能力を使う際に、その条件を満たさないと、能力は使えないんだ。能力が大きくなればなるほど、限定条件も厳しくなる》

《では、あの能力の限定条件とは一体……》

《一度使用する度に、寿命を一年削ること、だ》

《なっ……それでは》

《ああ。多用はできない代物だ。それに、理想を現実に変えるなんて聞こえはいいが、実際は強い思念イメージが必要だから、精々一度に理想できる数は、一つか二つだろうから、その理想の穴をつけばいいだけの話だ》

《…… ホント、普段からこれくらいしっかりしてくれればいいんですけどぬえ》

うるせえよ。

《それより今の問題は、次に闘う時、どうやって高町達に気付かれないようにするかだ。今回の、多少とはいえ、この辺りは警戒されてるはずだ。決着がつく前に、確実に乱入される》

《“奴”については？》

《“あいつ”が自ら前線にでるとでも？》

《……そうでしたね》

《でるとしたら、もつしばらく先だろうな》

はあ……そんな日が来ないことを、切に願う。



《んー。やっぱり無人世界とかに問答無用で転送させて、そこではこぼこにしようか?》

《でもその場合だと、転送する際に、管理局側にはれると思いますか?》

《ならその魔力を消すステルスタイプの結界を転送と並列で行ったら、決着がつくまでの時間稼ぎ程度にはなんだろう》

《なら、その策でいきますか》

《向こうがそれを許してくれるくらいの実力だったら、けどな》

《“奥の手”は?》

《……出すかもしれない》

《そうですね……》

“あれ”を使わないといけないのかあ……できれば使いたくないなあ。

……まあ、いつか。

俺はそう軽く考え、食後のコーヒーをすすった。

うん、うまい。

こんな平和がいつまでも続けばなあ。

「なんじゃこりゃあああああつ!!」

いきなり店内に怒声が響き渡った。

《なあアイリス。俺の平和ってのは、何で一秒も保たないんだろうな?》

《マスターですから》

それで納得できる自分が憎い。

一応声のした方を見ると、そこにはガラの悪そうな三人の男が、メガネをかけたウェイトレスの一人に向かって、

「この店は、こんなもんを客にだすのかよっ!? ああっ!?!」

と、虫のようなものを見せつけて言う。

はっきり言おう。言いがかりに違いない。

この店は隅々まで掃除が行き渡り、食器やテーブルの一つ一つも綺麗だ。

料理に虫なんか入るはずない。

てか、あの三人の見た目から考えたらそうとしか思えない。

「ありがちなことやってんなあ」

そう眩き、コーヒーを一口。

うん、うまい。

「平和だねえ」

《つて、あんた鬼かつ!?!》

《え?何が?》

《だからあのチンピラ三人から、ウェイトレスさんを助けられないんですかつ!?!》

《うん》

《即答つ!?!》

《あのなあアイリス。こういうゴタゴタは、あんまり大きくすると、店の評判に影響がでるだろ?だから俺は温かく見守ろうと……》

《本音は?》

《めんどいかったるい億劫だ》

《やっぱり最低だよあんたつ!》

あーもつづるさいなあ。

大体、暴力を振るってるわけでもないんだから別に……

「謝ってすむ問題じゃねえんだよっ！てめえは痛い目見ないとわか  
らねえよつだなっ！」

そう言つて、ガラの悪い男の一人が、拳を振り上げた。

ヒュッ

刹那、男の頭に飛んでいったコップが直撃する。

「なにしゃがるっ！？誰だこんなもん投げたのはっ！！」

そう叫んだ男の視線の先には、俺がいた。

「はぁ……何やってんだ俺は」

思わず頭を抱えてしまう。こうなるのはわかってたつてのに……

相良の馬鹿はまだ便所だし……

「聞いてんのかコラァッ！」

「あー聞いている聞いている。それと、さっきのはたまたまコップが手  
から滑っただけで……」

「嘘つくんじゃねえよっ！！てめえよくもナメたまねを……」

なんてベタなセリフを言いながら、チンピラ三人が詰め寄ってくる。

あー、面倒くさ。

「何でこうなっただらなあ……」

《それもマスターのいいところ》

《明日は粗大ゴミの日か》

《ナメタ口聞いて誠にすいませんでした》

「俺らをナメルとどうなるか……思い知らせやるっ！」

そう叫んで拳を振るう。

店内から悲鳴があがったが、気にしないでおこう。

俺は男の拳をボーツと見た後、拳を横に受け流し、男の足を引っかけこかし、男の右肩に右手をおき、右手首を左手で掴み、肩胛骨の上に膝をおいて、男の背中にのった。

「なっ……」

チンピラ三人が驚きの声をあげる。

特に、俺に関節を決められている奴に至っては、自分の状況が理解できていないようだった。

取り敢えず、首筋に手刀をうつて気絶させた。

「よっこらしよっと……」

そう言って立ち上がり、残りの二人を見る。

「これ以上やったら怪我するかもしれないけど……まだやる？」

「ヒッ、ヒイイイイイイイイイッ……」

気絶した仲間をかかえ、脱兎のごとく逃げるチンピラ。

思った以上の腰抜けで助かった。

俺はそう思った後、席に戻って、再びコーヒーをすすった。

「ふあゝあ。眠い……」

いくらコーヒーを飲んだところで、俺の睡魔は全くおさまらないらしい。

「あ、あの……」

「ん？」

さっきからまれてたウェイトレスの人が、目の前にいた。

あつ、やっぱりやりすぎた？

お咎めは覚悟しないとな……

俺は、取り敢えずいざという時のために、逃げる準備だけする。

いちいち何か言われるのもめんどいな。

「ちつきは、ありがとうございましたっ！」

「……………はっ。」

「へえ。君まだ中学生なんだ」

あの後、ウエイトレスさんがさっきのことのお礼だと、ケーキとかをたらふくおごってくれ、今はそれを食べながら雑談をしている。

てか、仕事はいいのかウエイトレス。

「あっ、そういえば自己紹介はまだだったね。私、高町美由紀」

「っ！？ゴフッゴフッ」

ウエイトレスの爆弾発言に、飲んでいたコーヒーを喉につまらせてしまった。

た、高町っ！？

「あ、あの……一つ聞いていいですか？」

「何？」

「妹がいたりします？」

「うん、いるよ。今ちょうど君と同じ年の……」

「ケーキごちそうさまでしたっ！！会計はこの席に戻ってきたつり目の奴にお願いしますっ！！！」

そう叫んで、一気に出口まで向かう。

後ろで高町さんが何か言っているが気にしない。

よしっ、出口まで後一歩……

「ただいまー」

と思ったら、いきなりドアが開いちゃいましたよ。

えーっと、このままいくとぶつかるわけで、しかもさっきただいまって言ったことは……

「不幸だ……」

そう呟いた後、ドアを開けた主と、正面衝突しましたとさ



海斗  
side  
out

## その8 付き合い(後書き)

### 次回予告

せっかくの休日。

相良との組み手の後、家でゆっくり寝る予定だった海斗はずの海斗。

そんな海斗の休日は、いともたやすく潰されて……

次回、魔法少女リリカルなのは〜面倒くさがり屋の勇者〜その9  
二人の溺愛者<sup>バカ</sup>

Take Off



今日の前にいるのは、高町の姉である高町美由紀と、その母親の高町桃子。

あの時ぶつかったのが、高町本人じゃなくて助かったのだが、さつきから何か二人から質問攻めを受けている。

相良の奴は、あれから既に20分近く経っているにも関わらず、未だに戻って来ない。

……逃げたか？

ふっ、ふふふ……

さあて、明日はどんな血の雨を降らせてくれようか？

「ふう〜。ようやくおさまったぜ」

何だ逃げてなかったのか。折角明日に向けてホームセンターで色々購入しようと思ったのに。

《いやアンタ何するつもりだった！？》

アイリ………ガラクタから鋭い突っ込みがあつたような気がしたが、気にしないでおう。

《何で言い直したんですかっ！？いやそれより、ホントに何するつもりだったっ！？》

いやいや、そんなR15指定でもないこの小説ではとても言えない

内容だったり決してないよ？

《したんだっ！？そんな内容だったりしたんだっ！！》

ああ、もし相良が戻って来なければ、明日からはこの小説がR15指定になっただろうに。

《残念がつてんじゃねエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエツッ！！！！》

最近敬語じゃないときが多いぞアイリス。

《誰のせいですかっ！！》

え？俺？

《アンタしかないよっ！！》

うん知ってる。

《ぐあああああああああっ！！腹立つっ！！めっっちゃ腹立つっ！！！！》

まあこんなポンコツはほっといて、相良も戻って来たことだし、さっさとこの場を去るか。

「んじゃあ連れも戻って来たんで、俺はこの辺――誰この美人さん？はっ、まさかお前の彼女っ！？しかも二人っ！？」――

話ややこしくしてんじゃねえっ!!

こいつマジぶっ殺してやるうかつ!?

「あらまあ。照れるわねえ」

桃子さんが何か嬉しそうにしている。

おいおい何ですか何ですかこのパターン!!

ひょっとしてあれですかっ!?

このまま話が長くなって高町が帰って来るとか……

「「貴様あつ!!俺の嫁(妹)を口説くとはいい度胸だなあつ!!」」

高町が帰って来るほうが百倍マシでした。

そしてそのまま、俺と相良は襟首を掴まれ、新婚気分の抜けない親バカと、彼女がいるのに妹離れ出来ないシスコンに、連行されたのでした

マジでやってらんねえ……

「で、何でこうなるわけ？」

今俺は、何故か剣道場において、何故か木刀を持っていて、何故か親馬鹿と対峙していた。

因みに隣では相良が、同じようにシスコンと対峙していた。

マジで何でこうなのか、誰か教えてくんね？

「桃子が欲しければ、俺の屍を越えて行けえっ！！」

いや別に欲しくないし……

「美由紀が欲しければ、俺の屍を越えて行けえっ！！」

ああ、何か隣では似たようなこと、てかほとんど同じセリフ言うてるし……

「越えてやるぜっ！！」

あれ？相良くん？君は何でやる気になってるのかな？まさか……いやいや流石にそれはないよね？ないよね！？

「行くぞあっ！！」

俺が相良に対して距離を置いたほうがいいんじゃないかと半ば本気で考えていたら、親馬鹿が木刀を構えて向かって来た。

おおっ、一般人にはすげえ動きだな。

そう思いながら、振るってくる木刀の全てを、最小限でかわす。

「やるなっ！なら、これでどうだっ！！」

親馬鹿がそう叫ぶと同時に、剣速が更に上がった。

って、やばっ……

カーンッ

余りの速さに避けきれないと判断した俺は、相手の剣の勢いを利用して、相手の剣を弾き飛ばした。

「なっ……」

流石に向こうも驚いているようだ。

でも、それが一瞬の間になる。

俺はその隙を逃さず、すかさず面を決めた。

「……………で、俺の勝ちってことでもいいの？」

俺がニヤリと笑ってそう聞くと、どこか清々しい顔で親馬鹿が頷いた。



ふう。何とか終わったな。

隣を見ると、相良は普通に負けていた。

はあ………情けなさすぎるぞ、相良。

そう思っていると、道場の扉が開かれた。

「お父さん。お母さん。お店誰もいないけどどうしたのー？」

………泣いてもいいですか？

《いやあ、マスターってホントに不幸ですね（笑）》

《コンクリートの底に沈めてやるつか？》

《超すいやせんしたあっ！！》

そんなわけで、俺のめんどくさい休日は、まだ終わんないらしい。

取り敢えず、倒れている相良の腹を腹いせに蹴った。



その9 二人の溺愛者（バカ）（後書き）

いやあ、誠に申し訳ないんですが、今回から次回予告はなしです？

もし次回予告があつたほうがいい方は、感想の欄に書いておいてください。

要望が多ければ、次回からは書きますんで。

てなわけで、感想待ってますっ！！

その10 休日のラスボス(前書き)

久々の投稿です(笑)

……不定期投稿ですいません)。・。・。  
(

## その10 休日のラスボス

海斗Side

めんどくせえ……

マジめんどくせえ……

今の俺の心情は、面倒で、面倒で、面倒で、何もかもをほっぽりだして昏寝したかった。

目の前には、高町親子と楽しそうに談笑している相良と対戦した高町家長男の……名前なんだっけ？

まあどうでもいい。とにかくそいつが、次は俺とやるとか言い出して……

ホント、嫌になってくる。

他の奴らもギャラリィと化している。

「黒崎ーっ！僕の敵を頼んだーっ！」

「死んでねえだろってめえっ！てか黙らないとマジぶっ殺すぞっ！」

ああもう突っ込むのもめんどくさい。

もう帰っていいですか？ホント……

「覚悟はいいか？」

はい駄目ですね。まあいいや。こいつ瞬殺してとっとと帰ろう。

「いつでもどどどぞ」

「ふっ、あまり舐めてると痛い目見るぞ」

完全にやられ役の台詞だな。

「はいはい。御託はいいからさっさとかかってきて下さい」

「このっ……舐めるなあああああああっ！……」

「じゃ、俺達はこれで」

「また明日ねー」

高町一家に適当な挨拶をして、帰路につく。

あの後は結構大変だったりした。

士郎さんと違ってシスコンは諦めが悪く、どう考えても俺の勝ちだろこれってほど有効打を打ち込んでも負けを認めなかったので、最

終的には気絶させるといふ形で幕を閉じた。

これが素人相手なら楽だったんだろっけど、向こうだってかなりの使い手だ。

結構危なかったいやホント。

しかもその後すぐ帰ろうとしたら高町一家に学校での高町との話を根掘り葉掘り話さされて……

気が付けば、もう既に日が沈む時間帯となっていた。

……高町一家に夕飯に誘われたが、速攻で全力拒否してやったぜ。

さて、今日もう飯作るのめんどいし、吉野家の牛丼でも食うか。

……あれ？昨日と同じじゃね？

ま、いつか。

その後相良とも別れ、牛丼を買って再び帰路につこうとした時、突然思い出してしまった。

……ソラに餌やんの忘れてた。

やばい……マジでやばい……今日マジって何回使ったろう？

《まだ結構余裕ありますね》

《うるさいぞ目覚まし時計。コンクリ詰めにして東京湾に沈めてほ

しなくてはしはしの間口を閉じよ《

《謝る前に突っ込ませていただきますが、何ですかその口調》

《いや、前世の何かのドラマでやってた口調真似たんだけど……格好よくね?》

《台無しですね》

《……燃やすぞ?》

《すみませんでしたあっ!!》

分かれればいいんだよってあれ?何か忘れてるような……

《ソラの餌》

《……今日はちょっと高いネコ缶買って帰るか》

《そっしましゅっ》

俺は歩く先を、家からスーパーへと変えた。



「え、えつとねソラ君。出来ればその爪をこっちに向けなくて欲しいなあなんて言ってみたりしてつてわあっ危ねえっ!!」

家のドアを開けた途端、そこには人間の言うところの仁王立ちとでもいうべき凜々しき姿勢で待ち構えていたソラがあり、その姿を見た瞬間に色々と言いついてみたがそんなものはお構い無しにいきなりその鋭利な爪をたてて俺の顔面目がけて飛んできたので、咄嗟にそれを避けた次第だ。

狭い玄関で避け続けるのには限界がある。

俺は靴を一瞬で脱ぎ、急いでリビングまで駆け込んだ。

後ろからは殺気むき出しのソラ。

くっ、まさか今日のラスボスがソラだったとはっ!

だが甘いぜっ!既に必須アイテムは我が手にっ!

俺は片手に持っていたビニールの中からネコ缶を取り出し、

「これあげるから許して下さいっ!」

と、三毛猫相手に半泣きの上に本気で懇願した。

情けない?ンなもん知るかあっ!

だがソラの奴はそれを見た途端、

「にゃあーっ！」

グサツ（爪が額にささる音）

ピュー（何かが飛び出る音）

「ぎゃあああああああああああああっ!?!」

何で!?!?

そう思ってソラの方を見ると、おかしなことに気が付いた。

ソラの額に、何か紋様のようなものが浮かんでいるのだ。

それに気付いた俺は、一度目を閉じる。

そして、もう一度開いて、アルファ・ステイグマ複写眼を発動する。

この呪われた朱の紋様が浮かんだ瞳は、一瞬でその紋様の効果、術式、構成などを解析する。

……生物を操る紋様か。

俺はソラに近づいて、その額に触れた。

そしてその紋様を打ち消す術式を瞬時に組み上げ、それを破壊した。

パキン

そんな音と共にソラの額に浮き上がっていた紋様は消え去り、ソラはその場に倒れた。

床に倒れたソラをそっと抱き上げ、ソファーに寝かせた後、アイリスが俺に話しかけてきた。

「どう思いますか？」

「ただの人間の仕業だよ」

さて、と。

「寝るか」

「……は？」

間抜けな声をあげるアイリスを無視して、俺は寝室へと足を運んだ。

### 三人称 Side

海斗が寝室へと足を運んだ頃、海斗達がいるマンションの隣のマンションの屋上では、三人の男たちが話し合っていた。

「バカな……一瞬であの術式を解いただと？」

男の一人が呟く。

「自爆用術式も解かれてるな……クソッ、どうする?」

もう一人の男が、リーダーと思しき人物に聞く。

するとリーダーは、

「……任務遂行は絶対だ」

「なら……」

「ああ。今夜、殺るぞ」

そして男達は、海斗が完全に寝込むのを待った。

あれから五時間ほど経ち、男たちは、海斗が寝入ったことを確認する。

もう既に時刻は深夜。情報で海斗がよく寝ることと、警戒ということとをあまりしないことを知っていた男たちは、マンションの海斗の部屋の明かりが、既に消えていることから完全に海斗が寝たと判断

したのだ。

彼らは、そのまま各々の非殺傷設定のされていないデバイスを取り出し、魔力を隠蔽して、海斗の住んでいる部屋の前まで移動し、音もなくカギのかかったドアをピッキングし、中へと侵入した。

警戒態勢をしいたまま、暗がりにもかかわらず、音をたてず、気配を消し、慎重に、少しずつ海斗の寝ている部屋へと向かう。

彼らは暗殺のプロなのである。夜目はよくきくのだろう。

そして、海斗の部屋の扉を音をたてず、空気の振動すら起こさないよう注意して開け、海斗がベッドで寝ているのを、確認した。

《トラップは？》

《ありません》

念話でトラップの有無の確認を終え、ついに海斗の部屋へと足を踏み入れた。

そのまま、海斗の寝ているところまで行く。

すると、

「うーん」

「「「っ！」「」」

海斗のいきなりの声に、警戒する三人。

そしてっ、

「もう眠れねえよぉ」

と幸せそうに言った。

「「「……………」」」

それに三人は呆れて海斗の顔を見た。

その顔はいかにも幸せ者だということがわかるほど幸福観に浸っていた。

その顔を見た三人は、特に何のリアクションもとらず、一人が懐からナイフを取出した。

後はこれで海斗の首を切り裂けば終わりだ。

そのままそのナイフを海斗の首もとへと持っていき……

「うわぁ…………痛そうだなぁ、それ」

瞬間、そんな間の抜けた声が、部屋の静寂を打ち破った。

「っー」

三人が驚く。

それも無理はない。

海斗が、起きてしまったのだ。

馬鹿な……

暗殺者達はそう思う。

自分の命が狙われているのだから、寝たフリくらいはするだろうが、暗殺者達はそれを予想して、わざわざ気配を消し、ここまで来て、目を開けないと確認出来ないようにしたのだ。

そして、部屋に入って海斗の寝息を確認し、確実に寝ていると確信したのだ。

にもかかわらず、彼は起きた。

あっけらかんと、何でもないかのように、

「人の部屋には勝手に入んなよー。母ちゃんに習わなかったのかー？」

と間延びした声でいう。

それに対する暗殺者達の次の行動は速かった。

既にこの部屋限定の封鎖結界を張り、それぞれ非殺傷設定のされていないデバイスを取出し、海斗から距離を取り臨戦態勢をとっていた。

だが、それでも遅すぎた。

臨戦態勢をとり終わったときにはすでに海斗は暗殺者達の目の前にいたのだ。

「なっ……」

驚く暗殺者を無視して、まず初めに一番前にいた暗殺者の顎に拳の甲を当てて、脳を揺らして気絶させた。

気絶し、倒れていく暗殺者を尻目に、次の二人を確認する。

二人は倒れていく仲間を無視し、左右に展開して海斗を挟み撃ちにしようとする。

だが、それは海斗の思い通りの展開だった。

何故ならその対策は、既に彼の目の前にあったから。

彼の目の前には、先ほど暗殺者達に近づく際に描いた魔方陣。

そして、彼は呪文を唱えた。

「求めるは光輝>>>・闇砕」

海斗が唱えた瞬間、魔方陣の中心から光の玉が生まれ、暗闇を照らす。

「っ……!」

暗闇の中にいきなり現れた光に一瞬目を閉じてしまふ暗殺者達。



だが、その一瞬が命取りだった。

海斗はその瞬間、左右にいる暗殺者のみぞおちに、左足を軸に、右足と左手でそれぞれに蹴りと拳をいれて、気絶させた。

暗殺者達は、あっさりと一人の眠そうに目蓋をこする少年に敗れたのだった。

海斗 Side

「はあ……めんどくせえなあホントに……」

俺は目の前の暗殺者達を見て、盛大にため息をついた。

とりあえず、気絶しているこいつらから隠し持っていた武器やデバイスなどを全て取り上げた後、ライト・キャンサーで縛った。

さて、どうするか……

一瞬だけそう考えた後、もう一度俺は盛大にため息をついた。

「アイリス。盗聴妨害」

「既にやっています。繋げるのはミゼット提督直通でよろしいですね？」

「ああ」

「はあ……ホント、めんどくせえなあ……」

その10 休日のラスボス(後書き)

感想待ってますっ!!

その11 新キャラ続々登場っ！（前書き）

タイトルの通り、新キャラが出てくるだけの話といっても過言ではありませんっ（馬鹿）

これからの話の重要なキーマンになる可能性は……今のところは特には（阿呆）

それではその11どうぞっ

その11 新キャラ続々登場っ！

海斗Side

月曜日。

この日の朝はいつも思う。

「学校行きたくねー……」

「馬鹿なこと言っていないでさっさと行きますよ」

「はあ、一生をベッドで過ごしたい」

今日も何も変わらない学園生活。

朝ソラを校門まで連れてきた後自由にさせ、授業中に寝ては高町に起こされ、図書室に行って相良に寝るなど注意される。

そう、何も変わらない、普通の学園生活。

前世でもあったことと何も変わらない。

そう、変わらないと思っていた。

なのに俺は殺されて、世界を救うなんてめんどくさいことを背負わ  
せている。

だからだろうか？

こんな風に、普通の生活を送っていると、たまに怖くなることであ  
る。

……………なんて、少し悲壮感漂う主人公の物真似を試みたが、ど  
うだろうか？

え？似合わない？

さーせん。

《誰に話してるんですか？》

《地文に突っ込むな》

と、そんないつも通り馬鹿なやり取りをしている俺達がいる場所は、いつもと違う、非日常の世界だった。

目の前には転送ポートがあり、そこに乗ればすぐに今回お呼ばれした人のところまですぐに行けるだろう。

「……ホントに行かなきゃ駄目？」

「駄目ですよ。ミゼット提督には、お世話になっているんですから」  
そう。今日俺を呼び出したのは、かの伝説の三提督が一人、ミゼット提督なのだ。

何故そんな人物と繋がりがあるかといえば、俺の両親の上司であり、俺の身元受取人であるからだ。

俺の両親と、ミゼット提督は深い繋がりがあり、その縁で小さい頃何度もミゼット提督と遊んでもらったりしていて、それで両親を失った俺を心配して、身元受取人を買ってでたわけであるのだ。

ただ、この事機密極秘事項である。

理由は簡単だ。

一つ目は、この事がばれればお互いに危ないからだ。

ミゼット提督は、先ほども言ったように伝説の三提督と呼ばれるほどの権力者だ。

つまり、それに取り入ろうとしたり、気に食わない奴ってのは、腐る程いるわけだ。

そんなミゼット提督が、身元受取人を買ってでる奴。こんなおいしいカモはいないだろう。

人質として使えるし、また嫉妬の対象にもなり、お互いに危なくなるので、この事を知ってるのは同じ三提督であるキール元帥とクルス相談役、後……めんどいので後ほど。

まあそんな訳で、俺達の間接関係を部外者が知っているのはあり得ないのだ。

それなのに、先ほどミゼット提督から送られたメールには、こんな事が書いてあった。

『さっきあなたが送ってきた暗殺者達が全部話してくれたわ。どうやら私との関係を知っていたみたい。これからのことについて話したいから、学校が終わったら来てちょうだい』

とまあ、簡単に説明するとこんな感じだ。

学校をさぼってって言わないあたりが、ミゼット提督らしいな。

さて、まあ長い地文もこの辺にして、行くか。



俺は、転送ポートへと足を踏み入れた。

その瞬間、周りが光りだし、その光が収まった時には、先ほど見ていた景色とまるで違う景色が目に入ってきた。

ここから少し歩いたところで、ミゼット提督は待っているはずだ。

会うのも久しぶりだし、少し急ぐか。

俺は早足で歩きだした。

ふう、着いた着いた。

さて、まずはノックだな。

コンコン

「はい、どなたですか？」

中から穏やかな女性の声。

ミゼット提督の声だ。

「ミゼット提督。カイト・クロサキ二等陸士、ただいま到着致しました」

「ああ。はい、どうぞ」

そう言われたので、扉を開ける。

横に両開きになる機械の扉で、その扉が開いた瞬間、

「死ねやああああああああああつー!!」

と、叫びながらいきなりドロップキックをかましてきやがる奴がいた。

「どわあつー!?!」

俺でもギリギリ避けれるってレベルの速さで、慌ててしゃがみ転がりそれを避けた。

だが、そいつはドロップキックを途中で中断し、扉のすぐ横の壁を蹴った。

するとそいつが着地する先にはちょうど転がって移動している俺の腹があつて……

ドンッ

「ぎゃああああああああああああああつー!?!」

「10点……」



「わかればよろしい」

と満足気に笑ってどいてくれた。

この傍若無人の我が儘女の名前は、アキナ・フリービア。

一言で言うなら幼なじみみたいな関係。

昔からこんな感じで理不尽なことで怒っては、俺を殴ってくる……  
なんてことはなく、普段は元気で快活なやつで、あんな風に暴力ふるうのは、単なる気まぐれか、本気で怒ってるときだけだ。

今回は後者のようだが。

因みにこいつは体術は僕より上だ。

だから攻撃をうける際はいつも全力で逃げる。

勝ち目がないからな……

「相変わらず仲がいいねえ」

そう言いながら、赤瞳赤髪のバカ面が近づいてきた。

「……どの辺が？」

「男女が密着してんだぜ？それ以外考えられるかつ！」

「「黙れ」」

アキナとともにそう突っ込む。

この軟派な男の名はユキト・クロウエル。

ただの馬鹿だ……といたいところだが、こいつも天才って呼ばれる部類の人間だ。

……死ぬほど認めたくないが。

「……お前、何か失礼なこと考えてねえか？」

「気のせいだ」

こいつ勘も鋭いからな。

「ユキト、アキナ。いくらカイトに久しぶりに会えたのが嬉しいからとはいえ、ミゼット提督の御前だぞ。あまり騒がしいのは……」

「相つ変わらず堅苦しいな、カノンは……」

今注意してきた黒髪の男の名はカノン・アスタール。

あだ名は唐変木、朴念仁、天然、鈍感、等々がある。

生真面目で馬鹿正直、人の言うことはすぐ信じる世間知らず。

義理がたくて受けた恩は何がなんでも返す奴だ。

こいつはまだまだ。

まともだからな。

……多分。

「あ、あはは……。みんなはしゃいでるね」

最後に控えめにそう言った桃色の髪をした少女はメイ・リンシェン。

さっきはカノンが一番まともって言ったけど、やっぱりこいつが一番まともです。はい。

こいつらは、え〜っと……結構前からの知り合いで（どれくらい前か忘れた）、全員が同じ施設で訓練を受けていて、全員がSランク以上の魔導師か騎士だ。

……俺は違うけどね。実力隠してるから。

因みに全員同い年。

にしても……

「全員揃うなんて珍しいな」

さっきも言ったように、こいつら四人はオーバーSなわけで、かなり忙しい身のはずなんだが……

「おいおい、親友がせっかく珍しくこっちに来たんだぜ？会いにくいわけないだろ」

ユキトがウィンクしながら言ってくる。

「……やばい。寒気が」

「私も……」

「何でだよっ！」

アキナとともに身を震わしたら、見事な突っ込みが返ってきた。

それを見ていたカノンは、

「む？風邪か？」

などと言ってきて、それにメイが、

「いやいや、違うから」

と突っ込む。

相変わらず冗談が通じないカノンは。

「ふふふ。みんな相変わらず元気ねえ」

そんな俺達を、ミゼット提督は暖かい瞳で見守っていた。

正直、こいつらと会うのも一年ぶりくらいなので、嬉しかったりするの内緒だ。

アキナとユキトにぜってーからかわれるからな。

「んまつ、冗談はこの辺にすつか」

「む、冗談だったのか……」

「気付こうよカノン」

「そうそうっ。カノンは堅っ苦しすぎるよーっ。ほら、もう少し柔らかく構えて構えて」

「う、うむ……努力する」

「いやそれがもう堅いだろ……」

「……てか、カノンって笑わないよねー」

「そういえばそうだな。いつも仏頂面だし」

「そうなのか？」

「気付いてなかったのかよ……」

「よし、今度は笑顔に挑戦だっ！」

「ほら、ニッコリ笑ってー」

「……」

「……何で目つぶって眉寄せてんだ？」



「……笑おうとしたのだが」

「「「今のが!?!?!」」」

「……てか、そろそろ話始めねえーか?」

そう俺が言ったのも虚しく、結局話が始まったのはそれから一時間後だった。

その11 新キャラ続々登場っ！（後書き）

感想待ってますっ！

その12 来てしまった……

カイトSide

「……とまあ、こんな感じ」

俺は取り敢えず、最近あった重要な案件を話した。

あ、先に言っておくと、こいつらは俺の正体を全部知っている。

それまでには熱い友情の物語が……なんてことは特になく、普通に話した。

まあそんなわけで、俺は数日前に現れた、アルセイドについて話したわけだ。

神器の力についても話しておいた。

そして、おそらくはその黒幕である“奴”のことも……

俺が話終えた後、部屋は静寂に包まれてい……

「ふえー。スツゴい奴がいるんだねー。勝てるかな？」

「まあ、俺達ならいけんじゃね？ “あの野郎” だって無敵ってわけでもないだろうし」

「あまり楽観的に考えるものではない。油断していると、足元を救われるぞ」

「カノン？ユツキーは、少しでも場を明るくしようとしてるんだよ？」

「なっ……そ、そうだったのか」

いやだから気付けよっ！

因みにユツキーはユキトのあだ名だ。女子にはそう呼ぶように言っているのだ。正直微妙だと思うが、まああだ名なんてそんなものだな。

てかお前らは静寂という言葉を知らんのかっ！？

もうちょい話に浸るとかしようぜっ！俺はしないけどっ！

「それよか今の問題は“こっち”だろ」

そう言っつて、ユキトがこちらに向かって束ねた書類を投げてよこしてきた。

それを流し読みしてみる。

……成る程。こいつが今回暗殺者を送ってきた奴ね。

「で？こいつから話は？」

「既に聞いたわ。どうやら、“何者”かが、彼に私達の情報をリンクしたみたい」

「“何者”か、ねえ……」

「ん〜、取り敢えず俺のほうで調べてみるわ」

ユキトはこう見えても捜査官。

そっち方面は任せたほうがいいな。

「じゃあ取り敢えず、今はこんなんもんでいつか」

そう言っつて、俺は部屋を出ようとする。

「あー、待って待って」

すると、アキナが服の裾を引っ張ってきた。

「ん？何だ？」

「せつかく久しぶりに皆で集まったんだし、これから晩ご飯でも食べに行こうよっ」

「おっ、さんせーっ！カノンもメイもいいよなっ」

「うむ。明日は休みだし、問題ないぞ」

「私もいいよー。もっと皆と話したいしね。カイトもいいよな？」

「いや俺眠いからパ……いでででででっ！？痛い！アキナ痛いから関節決めんなっ！！」

「もう一回聞くよ？一緒に行くよね？ハイかYESでお答えください」

「それどつちも同じじゃねーかっていやいや嘘です嘘です行きますから関節決めんのやめてえええええええええええええええええつー！」

「い〜や」

「てめえ後でぶつ殺……ぎゃあああああああああああああつー！？」

――翌日

あれからは酷かった。

料理という名の殺人兵器しか作れないアキナが料理を作ろうとしたのを俺とカノンで全力で阻止し、料理の出来るメイとユキトが料理を作ったんだが……

それまで暴れるアキナを抑えるためにカノンと二人でポコポコにされた。

うまい料理が傷に染みたまさ……

そんなわけで、顔中を腫らして学校に行ったら……

「どうしたのそれ!？」

とか、

「ケンカでもしたのか？」

とか、

「ぶはははっ!いい様だな黒さKぶるあっ!？」

とか騒がれて本当に面倒だったな。

そんな事を思い出しながら、帰り道を歩いていると、ふと、昨日ユキトが別れ際に言っていたことを思い出した。

『あ、そうそう。その内、お前がびっくりすることが起こると思っ  
ぜ』

……あれ、どついう意味だ？

そんなことを考えながら歩いていると、俺の住んでるマンションが見えてきた。

すると、マンションの前にトラックが止まっているのが見えた。

誰か引越して来たのか？

まあ俺には関係ないや。

そのままトラックの横を通りすぎる。

「お疲れさまです」

「あ、どうもー」

通りすぎ様に適当にそんな挨拶をして、俺はマンションの中に入った。

ピンポーン

………んあ？

俺が学校から帰って速攻で眠っていると、インターホンの鳴る音が聞こえて来た。

………眠いから無視するか。

ピンポーン



また鳴った。けど眠いから無視。

ピンポーン

また……ピンポーンピンポーンピンポーン

「しつけええええええええええええ『ピンポーン』って、まだ鳴るのかよっ！？」

俺は慌ててベッドから飛び起き、玄関まで駆け出す。

その間にも当然のように鳴り続き……

「うるせえつつってんだろっがっ！」

そう叫んで玄関の戸を開けた先にいたのは……

「『よっ』」

「『昨日ぶりっ』」

「『今日からよろしく頼む』」

「『よろしく〜』」

「『……………』」

バタン



「やかましいっ!!」

ドアを開けた先に待っていたのは夢でも何でもなく、紛れもない事実ということがわかる現実があり、つまりアキナ、ユキト、カノン、メイがいて……

「てか、何でお前らが……」

いるんだ、と続けようとしたところで、昨日のユキトのセリフが走馬灯のように頭の中に思い出されて……

『あ、そうそう。その内、びっくりすることが起こると思っぜ』

「この事かあああああああああっ!!」

「あ、因みに来週の月曜からお前の中学校に編入することになってっから」

「はあっ!?!冗談だろっ!?!」

「マジ」

「……………は、ははは。もう勘弁して」

ここ数日。色んなことがありますけどもう俺の情報処理能力超えました。

そんな俺を無視して、ユキト達ははずかしく俺の部屋へ入っていた。

「こいつら、気遣いって言葉知ってるかな？」

「……………んん」

目を開けると、見慣れた天上が目に入った。

「え？嘘？まさかの夢オチ？」

や……………

「やったああああああああああっ！…！」

ピンポーンピンポーンピンポピンポピンポピンポピンポピンポピン  
ピンポーン

「どちくしょっ！…！」

思わず枕を叩きつけた今日この頃であった。





その12 来てしまった……（後書き）

感想待ってますっ！

### その13 新しい日常（前書き）

え、こんな駄作を読んでくださる皆様にご報告したいことがありますまして……

お気に入り件数が信じられないことに100件もいった記念に、これと同時にこの小説の外伝小説のようなものを掲載するので、よろしければそちらも拝見いただけると、作者の私としてはこれ以上の喜びはありません。

それでは、その13、どうぞっ！



### その13 新しい日常

カイトSide

あいつらが転校してきて、一週間が経った。

凄いもので、あいつら初日の時点でクラスに溶け込みやがって、しかも四人ともが俺と幼なじみだと暴露しやがった！

おかげで滅茶苦茶話聞かれたよ……

ああ、俺の学校での冴えないどうでもいいやつという立場が音を立って崩れていく……

それもこれも全部あいつらのせいだっ！！

――二週間前

「……で、何でお前ら来たわけ？」

俺は部屋を勝手に物色しているアキナとユキトを無視して、姿勢よくテーブルを挟んで向かい合っているカノンとメイに聞いた。

するとカノンが、

「護衛の為だ」

それに俺は、

「……………は？」

と啞然とするしかなかった。

「話はしよりすぎだよカノン！」

そこにメイの突っ込みが入る。それに俺は救いを求めるようにメイを見た。

「え、えつとね。ほら、数日前に“七人の一人”がカイトを襲撃したって言ったたでしょ？」

「それに心配になったミゼット提督が、護衛に俺達を派遣したってわけだ」

物色をいつの間にかやめたユキトが、メイの言葉を引き継ぎ言う。

その片手にはしっかりとソラ用の人間も食べれるおかしが握られていて……………

「あつ、お前馬鹿……………」

俺が慌てて注意しようとしたが、それは時既に遅く、ユキトの後ろには悪魔が控えていて……………

「にゃーっ!!」

「ぎゃああああああああああああっ!?!」

……だから言ったのに。

ソラの餌に手を出す!!死。

これはこの空間の絶対条件である。

「ソラってペットですよね?」

「言っな……悲しくなるから」

「にゃ〜あん」

餌を取り返し(ユキト瀕死)、ご満悦の様子ソラ。

そんなソラを見て、メイが、

「うわ〜。かわいいね〜」

「今の見てそう言えるお前を心の底から尊敬する」

「ちゃんとしつけているのか?」

「……もちろん」

「何故目を反らす」

もちろん、しつけなんて意味がなかったからさ……

「アキナ〜。かわいいよ〜」

「ん〜？何々〜？」

両腕には今晚のおかずに使う予定のキャベツが抱えられており、そのキャベツにはかじったような後が……

「って、何してんだよお前っ！？」

「あっ、本当だ！かわいい〜」

「でしょ〜」

「無視かこらっ！..!」

「名前は？」

「ソラっていうんだって」

「そっか、いい名前だね。よろしくね、ソラ」

「話を聞けええええええええええええええええっ！..!」

ドカバキゴキュッ

今の音が何かは想像に任せます（ガクガクブルブル）

「…………よく生きてたな、俺」

その時のことを思い出し、思わず身震いする。

「大丈夫？震えてるけど……………」

隣の席の高町がそんなことを聞いてくる。

ああ、この部分だけとれば天使なんだけど、魔王なんだよなあ、この人…………

「何か言った（ニコツ）」

「イエナニモ（ガクガクガクガク）」

あ、危ない…………

只でさえ最強暴力娘アキナがいるんだ。

これ以上は俺でも死ぬ。確実に…………

さて、それでは回想もこの辺にして、そろそろ今の話をするか。

月曜学校の朝のHR。

以上。

《短っ!!》

だから地の文に突っ込むなっの。

さて、それでは俺は夢の世界へ……

コンコン（辞書の角で叩かれる音）

いけるわけないか。

キンコンカンコーン

昼休み〜昼休み〜

……あ、もちろん鳴ったのはチャイムだけデスヨ？

そんなアホなやり取りはともかく、俺の席を中心に机がどんどん並んで行き……

「……なあ、毎回思うんだが、何でお前ら俺のここ来んだ？」

するとそいつらは、

「かわいい女の子がついてくるからっ！」

「カイトのおかず掠め取るためっ！」

「友と共に昼食にありつくのに理由が必要か？」

「皆で食べたほうがおいしいよー」

「……」

よくもまあこれだけ個性豊かな面々が集まったなと心底感心する（自分のこと棚にあげてるとかいう突っ込み禁止）。

んで、隣のグループには高町達五人が集まっていて、

「おおなのは。今日もかわいいぜっ！」

とユキトが声をかけ、

「ナンパお断わり（ニコッ）」

と一蹴された。

するとユキトは、

「フエイト、綺麗だよ」

と懲りもせず言い、

「えつ、えつと…… / / / /」

それにフェイトはマジで照れだして、

「くたばれ変態」

アキナが全力ラリアットをかましてユキトをぶっ飛ばした。

おいおい。一般人いるんだから手加減しろよ。

「一応こいつらに俺が学校でどういう立ち位置か説明してんの……」

「はあ」

思わずため息をこぼしてしまう。

それにいち早く気が付いたカノンが、

「何だ？悩みか？」

「……まあそんなとこ」

お前ら（主にユキトとアキナ）が原因なんだけどな。

「俺でよければ相談にのるぞ」

「いや、んな大げさなもんじゃないよ」

大元に相談する馬鹿はいないだろう。



「そうか。ならいいんだが……」

少し腑に落ちない感じだが、大人しくひいてくれたカノン。

良い奴だよなあホントに。

これでもう少し空気の読める奴だったらなあ……

そう思って、弁当のおかずに箸をのばして……

カチン

「ん？」

箸をのばすと、箸同士がぶつかる無機質な音がした。

見ると、いつの間にか弁当の中身が全て無くなっていた。

ギギギ、と壊れたブリキの人形などのような軋む音をあげながら首を動かし、半眼で睨み付ける。

そこには、満腹とでもいうかのように腹を二回叩いて満足しているアキナがいて……

「じゅっちー」

「ふざけんなああああああああああっ！ー！」

結局今日の昼は、げんなりしたり叫んだりするだけで終わってしま

った。

ググッ

は……腹へっ……た……

「やれやれ。なっさけないなあ」

「ぶっ殺すぞてめえ……」

「ん？やるの？」

「……すみませんでした」

うっっ……女尊男卑なんて嫌いだった！

《いや意味違うでしょ》

《黙れ》

デバイスにはめっちゃ強気なオレッ！！

《最低ですね》

ほっとけ!!

とまあこんな感じで、同じマンションに住んでる俺達は一緒に帰ってるわけだが……

マンションにつき、階段をのぼり、自分の部屋のドアの前へいき、そのまま中に入って、大きく深呼吸をして、

「何でお前らがいんだよっ！」

と突っ込んだ。

そう、一緒に帰るところまでは普通だろうが、何故か毎回こいつらはそのまま俺の部屋に来るのだ。

いやまあ掃除してもらったり、料理作ってもらったり、ダベったりして退屈じゃなかったりと迷惑じゃないんだけど……いやごめんやっぱ迷惑ですハイ。

だって毎日だよ？

そう思っても無理はないよね？ないよね？

「メイ。今日はどうする？」

「今日はカレーにしようかなって」

「じゃあ俺は野菜切るよ」

「うん、お願い」

台所では、夕食を楽しそうに作ってるメイとユキト。

「漫画って面白いなー」

「こらアキナ。寝転がりながら本を読むな。行儀が悪いぞ」

「はいはい」

リビングではくつろいでるアキナとカノン。

そして俺は、

「ぐがー」

ソファで寝ていた。

ああ、やっぱり俺はこつでないとね。

「昼寝最高」

「もう夕方ですけどね」

細かい突っ込みありがとうゴミ虫。

「いやあんた本当に酷いですねっ！ー！ー」

なんていつも通りのやり取りをしながら、俺の意識は闇におち……

「どーんっ!」

ドスッ（アキナが俺の腹の上にのしかかる音）

「ぎゃあああああああああああっ!?!」

……闇におちるわけもなく、結局寝ることもないまま、夕食までアキナの話に付き合っことになった。

もうホント寝かせて……

「でさあ、今日ユキトの奴三人の女子に告白して振られちゃったんだよねー」

「ちよっ、おまつ……」「ユツキー……」

「やめてっ。そんな目で俺を見ないでっ!」

「懲りないよなあ、お前も」

「馬鹿野郎お！男だったら、あたって砕けるの精神で女に告るつきやねえだろっ！」

「そうなのか？」

「いや信じるなって……ユキトもカノンがマジになるからやめろっ  
ての」

「てか、ユキトって編入してから何人の女の子に告ったの？」

「18人」

「「「「「……「「「「」

「何で皆黙るんだよっ!？」

「うるさい喋るな野獣」

「「「めんなさい」

アキナの一睨みで、一気に黙ってしまうユキト。

ソラもアキナに対してだけは大人しい。動物の野生の勘って奴が働いたんだろっな。

今、俺達は、長方形の机を挟んで、皆でカレーを食べている。

まあただの夕食だ。

そうただの……

「メイおかわりっ」

「あっ、私も私もっ」

「はいはい」

「メイ、私を先にお願いつ」

「何でだよっ！俺のが早かつたろっ！」

「どちらが先でも変わらないのではないか？」

「「変わるのっ！」」

「む……そうなのか」

「あ、あはは。じゃあ、じゃんけんして勝ったほうにしようか」

「おっつ。望むところだっ！」

「ふん。変態なんかには負けないよっ」

……てか、その時間が既に無駄じゃね？

ああ、成る程。その間にメイがおかわりをよそうのね。

カノンはどっちが勝つかに注目してるし……

てか、飯くらい静かに食べ……

俺は静かにカレーをぱくついた。

途中に何度もため息を吐きながら。

「んじゃ、おやすみー」

「また明日なー」

「また明日会おう」

「おやすみなさい」

四人がそれぞれの挨拶をする。

それに俺も、

「んー。また明日」

と、苦笑しながら答えた。

そして、四人はそれぞれの部屋へと戻って行く。



その四人の背中を見ながら、ふと思った。

ほとんどここにいたら、それぞれに部屋とったのって、意味なくね？

ん〜……まあ、いつか。

俺はその後適当にシャワーを浴び、ベッドにダイブした。

その13 新しい日常（後書き）

感想待ってますっ！

## その14 恥ずかしいからやめてくれ

カイトSide

「ふあゝあ……眠っ」

学校からの帰り道。

俺は人目も憚らずに両手を天に向けて突き出し、大あくびしていた。ユキト達が編入してから、早いものでもう二週間という時間が流れていて、今は皆それぞれに学校の立ち位置みたいなのが決まり、思いの行動をとっているの、俺は一人で下校していた。

まあ、実際のところ、俺の護衛っていうのは、単なる口実なわけだ。あいつらは、俺も含めてだけど、ちょっと特殊な幼少期を送ってきたから、何っーかこういう“普通の学生生活”ってのを、全く体験したことがないわけだ。

いや全くは言い過ぎかもしれないけど……

ともかく、そういう経緯もあるので、これをいい機会だと見たミゼット提督が、ユキト達にも少し……っつっても期間が分からんが送って欲しいと思い、今回のような処置をとったのだろう。

まあ、俺としてもいい機会だとは思っ。

思うんだけど……

俺の怠惰な生活邪魔しないでくれないかなー……

最近の俺は、どうもキャラを忘れて頑張りすぎてると思う。

だから今日は、帰って即行朝まで熟睡コースだっ！

「ああ、なんて“壮大な”スケジュール」

《“しょぼい”の間違いでは？》

《ふっ。今日のところは見逃してやるっ》

《？えらく機嫌がいいですね》

《つたりめえだっ！あいつら来てから一回も昼寝出来てねえんだぞ！？しかも学校では席替えがあるまで寝れねえし！世の間違ってる！》

《あなたの頭が間違ってる》

そんないつも通りの会話をアイリスと繰り広げていると、ふとよお  
くくくくつく見知った顔が目に入った。

赤眼赤髪の馬鹿……ユキトだ。

何してんだ？

そう思って、立ち止まってユキトを観察することにする。

この選択を、後で死ぬほど後悔するとも知らず。

ユキトが今いるのは商店街の入り口。

そして、いきなり見知らぬ女性に近づき、

「Hey! 彼女おー良かったら俺と一緒に午後のティータイムへと  
しゅれこまなーい?」

「ナンパかよっ! しかもその誘い方うげえええええええええええ  
ええええっ!!」

「ん?おーカイトじゃん」

「っってしまったあっ!!」

思わず突っ込んでしまった。

そしてそのまま、こっちに来るユキト。

逃げたら確実に今日の夕食の席で愚痴られるに決まってる。

かといってこのままここにいれば確実に面倒なことに……

「うう、最悪だ……」

結局俺は、その場に留まることを選んだのだった。

「……で、俺達何でこんなことしてるわけ？」

「ん？何か言ったか？」

「いや……もういいんだけどね……」

俺はもはや諦めるようにそう呟くのがやっとだった。

え？何をしてるかって？

だいたい察しがつくだろうが、まあ一応言っておくと、やはりい  
うか何というか、ナンパだった。

あの後、まあ言わずもがななことなわけだが、ナンパに“無理矢理  
”誘われたのだ。

ここ、重要だよ。あくまで俺の意思ではないからね？いやマジで……

で、あれから小一時間ばかりだったわけだが……

「一人もひっかからなかったな」

「くっ、なんのっ！これからだよっ、これからっ！」

悔しそうに地団駄踏みながら言うユキト。

てか、あのうざったい時代錯誤な誘い方はやめれないのか？

お前見てくれはいいいんだから、もうちょいましな結果が得られると思っただけどなあ。

まあそのことを言わないのは、結果が得られたら得られたらでまた余計な面倒が降り掛かるだろうから言わないが。

てかもう帰らせる。

「くっそお〜〜〜。おいカイト。次はお前が行けっ！」

「嫌だっ！」

「即答っ!？」

当たり前だろうが。何で俺がそんなことしないといけないんだよ。

てか、そもそも中学生のナンパに応じてくれる人なんていんのか？

……いたら詐欺か何かだと思っつのは、俺だけだろうか？

「お前男だろっ!？男なら男らしくナンパくらいしようぜっ!」

「それはオスらしい行為だろ……そもそも、どんな風に声かけりゃいいかが分からん」

よし、我ながらナイス言い訳っ!これならユキトも諦めてー

「簡単だつて。俺みたいにやればいいんだよ」

ふざけんなっ！

思わずそう叫んでしまいそうだった。

危ない危ない。そんなことを言ったら、また面倒なことになんのは間違いはない。そんなのはごめんだ。

俺は必死に心の中で自尊心を働かせ、ユキトに心情を悟らせないために適当なことを言うことにした。

「あんな誘い方ありえねえっての」

「んなっ……」

しまったあああああああああああああああああああああ  
！！

何簡単に口走っちゃってるの！？

いやそりゃ突っ込みたくて突っ込みたくて仕方ないとは思ってたよ？

でもそれを言ったらいつものパターンのにまた面倒なことになるしさ、ユキトはこういうのはそれなりにプライドもあるから傷つくだろうしさ、だから俺は黙って適当に誤魔化そうとしたんだよ。本当に。

……で、思わず突っ込んでしまいましたとさ。

いや無理っ！あれを突っ込むなっるのがまず無理っ！



いやありえねえだろあれはっ！

何であんなチャラチャラしてる奴なのに、あんなださい誘い方すんだよっ！

ぶっちゃけドン引きだわっ！

誘われてた女の人も顔引きつってたもんねっ！

道行く人達も奇怪な目で見てたもんねっ！

「嘘だろ……そんな、馬鹿な……」

そんなこいつは落ち込んでるし……

俺が言いたいよっ！そんな馬鹿なっ！

「くっ……だ、だったらお前が見本を見せろ！」

「そう来たかっ！」

いや、よくよく考えれば、ユキトの誘い方を全面的に否定したわけだから、当たり前前っちゃ当たり前なんだろーけど……

くそっ！やるしかないのか？

後になって考えてみれば、この時の俺はどうかしていたんだと思っ。

「……わーっしたよ。やりやいいんだろやりやあ」

「うっし。やって振られてこいっ！」

それじゃ意味ないんじゃないか？

……まあ、いいか。

さっさとやって、さっさと帰ろっ。

俺は、適当に周りを見回す。

商店街には、夕食の食材を買いに来ているだろう人がたくさんおり、人に困ることは特にならない。

ーふむ。なるべくなら、年上の美人のほうがいいな。

あ、勘違いすんなよ？

別に俺の趣味とかじゃなくて、そういう人なら百パーセントの確率で無視されるか即行で断られるはずだと思ったからだ。

だって、ガキが戯言言ってるおしか思わないだろ？

そんなわけで、辺りを見回して、それらしい人に声をかけることにする。

えーつと……なかなかいないな。

いても高校生とかオバサンばかりで、ちょうど間がなかなか見つからない。

……もう面倒だし、その辺の人に声かけるか。

あ、あの制服同じ学校のだ。

もうあの子でいいや。

俺はその子のそばまで走りより、その背中に声をかけた。

「なあ、アンタ」

あれ？この声のかけかた違うかな？

どうもユキトのあれを見ているせいで、出来るだけあれから遠ざけようとしてしまったようだ。

ま、まあこれから挽回すれば……あれ？当初の目的忘れてね？オレ。

そんな風に考えていると、彼女は振り返って、

「あれ？黒崎くん？」

「月島かよっ！」

思わずそう叫ぶ。

きっ、く、気まずすぎてる……

考えてもみる。

知り合いの、クラスメイトの、女の子に……ナンパしようと声をかけたんだぞオレ？

あ、ありえねえ……

「？」

対して月島は悶絶している俺を不思議そうに見ている。

今ならまだ誤魔化せる！？

俺はこれ幸いにと適当な発言をした。

「いや偶然見かけたから声をかけたただけだようん月島は買い物？」

矢継ぎ早すぎたあつ！

相当焦ってんなオレ……

だが月島はその事には触れず、自然に返してきた。

「うん。夕食のお買い物」

ほっ……ふ、不信がってないよな？

取り敢えず、ここは可及的速やかにここから避難――

「あれえー？カイトじゃん。何してんの？」

ぎゃー――っ……！！

思わずそう叫びそうになるのを必死にこらえる。

俺の顔を今見たら、さぞかし誰もが不信がるだろう。

なぜなら、今俺は目をぱちくりさせながら、口をパクパクさせて冷や汗をたらたら流しているからだ。

ではなぜそんなことになったのか？

答えは簡単だ。

俺は恐る恐る背後を振り返る。

そこには、左手にはこちらに向けている携帯、右手には既に魂が抜けてるんじゃないかと疑いたくなるくらいに真っ白に燃え尽きたユキトの頭を抱えている、額に青筋が浮かんだアキナが立っていた。

「……ゴキゲンウルワシユウ、アキナサン」

「はいごきげんよう。同級生をナンパしてた送り狼さん」

「誰がだあっ！？てか勘違いすんなっ！ただちよつと見かけたから話しかけただけでー」

「ユキトが全部話したわ」

「……ど、どんな風に？」

「ユキトの誘い方が下手だとか言いがかりをつけて女の子がつれな

いのを全部ユキトのせいにして、俺が手本を見せてやると言ってる  
っそうとかけていったって」

「誤解だらけじゃねえかああああああああああああああああああ  
あああああああああつ！！！」

びしいっ！、という効果音が聞こえるんじゃないかというくらいの  
シャウトをかましてやる。

てかユキトてめえ後で殺すっ！

「はあ……あのな？よく聞け。俺はただ巻き込まれただけでー」

「ここに君が同級生にナンパしてる画像があるけどー」

「何でもお申し付けくださいご主人様」

コンマ一秒で態度を改めた。

対してアキナはニヤニヤしながらこっちを見てる。

くっ、さてはこいつ始めから全部わかってやがったなっ！？

だからユキトには制裁を加えて、俺には変わりにからかうためのネ  
タを……

なんて性格の悪い女なんだっ！

「あ、あの一……」

話についていけない月島が、声をかけてきた。

そういや忘れてた。

「ごめん月島。取り敢えず、今日のことは忘れて金輪際思い出さないでくれお願いします」

「え、えっと……う、うんわかった」

素直な子でホンツツト良かった！！

「じ、じゃあまた明日」

「うん。また明日」

そうやって、月島とわかれた後、再びアキナと向き合う。

そこには相変わらずニヤニヤ笑っているアキナがいて……

くっ、くそお~~~~。

いつかてめえの弱味握ってやるからなっ！

……ぼこぼこにされる映像しか頭に浮かばないな。

やっぱりやめよ。

「ふふん。さあ〜って、何をお願いしよおかなあ〜？」

くっ、そのイラツとする喋り方とポーズやめやがれっ！





そして俺は何でこうなってんだよッ！

「じゃあ、次のお願いは……」

「不幸だあああああああああああああああああああ  
……」

結局その後、いろいろやらされて耐えきれなくなった俺が、“一つだけ何でも言うことをきく”という約束という名の契約を何とか取り付けさせたとき。

うつ……… 一体どんなお願いをされるんだろう………

憂鬱通り越して泥沼にいる気分だ………

その14 恥ずかしいからやめてくれ(後書き)

感想待ってますっ！

## その15 ゴールデンウィーク?

カイトSide

「ーそれでは、今日はこれで終わります」

「起立っ、礼っ」

『さよーならっー!..!』

クラス委員長の号令とともに、一斉にクラス全員が元気よく、はつらつと、叫ぶように言った。

そしてその瞬間、クラスの中の空気が湧きだち、

「ひゃっほうっー!..!」

「ゴールデンウィークだあああああっ!..!」

「今からどっか行こうぜっ!」

「カラオケ?ゲーセン?」

「ねーねー。どっか遊びに行こうよー」

『さんせ~~~~』

あちこちから、はしゃいだ声が聞こえて来るのを、俺はボーッとしながら聞いていた。

《ずいぶん冷めてますね。明日からゴールデンウィークなのに》

アイリスが、せっかくのゴールデンウィークなのにまるで嬉しそうにしていない俺を、不思議に思って声をかけてきた。

いやさ？俺だってゴールデンウィークは嬉しいよ？

一日オールで睡眠を三日も出来るわけじゃん？

そんなの喜ぶに決まってんじゃない。

だったら何で全く喜べないかというところ……

時間を遡ること一週間前の放課後。

いつかのナンパ事件以降、トラブルにあうこともなく、ちゃんと即行で帰宅して昼寝したり、図書室で昼寝したり、屋上で昼寝したりできていて、今日は自宅で昼寝しようかなーと思い、帰っていたときだ。

「む？カイトではないか」

俺と同じで、マンションに向けて下校していたカノンと出くわした。まあ、カノンなら別に関わっても面倒事にはならないかと思ったので、俺は普通に應對する事にした。

「うーっす。お前も今帰り？」

「ああ。今日は部活も休みだったのでな」

「は？お前部活入ってたの？」

初耳だぞ。

「ああ。何でも人手不足らしくてな。せめてあと一人部員が欲しいとのことだったので、承諾した次第だ」

「あゝ、成る程……」

こいつはお人好しだから、そこをつかれたってことか。

まあ別に部活に入るとかだったらいいか。

……そのうち詐欺にあったりしないことを祈るぞ。

「どんな部に入ったんだ？」

「総合武術格闘競技選手育成部だ」

「何でだよっ！！」

アイツかつ！

アイツがコイツを誘ったのかっ！

てか何で寄りにもよってその部なんだよっ！！

いろいろ突っ込んでやりたい衝動を抑える俺に対して、カノンは首をかしげながら、

「何故と言われてもな……」

とか呟いてやがる。

そくだよな……コイツってそういう奴だもんなあ。

ああもうッ！

相良の奴、今度会ったら覚えてろよオ……

……そついや最近あいつの出番ないな。

いやまあいいんだけど。

「……はあ。もーどーでもいいや」

「結局何が言いたかったんだ？」

「あー気にすんな」

「?そうか」

ふむ、あまり追及しない奴で助かった。

ん?そういやあの部って確か……

「なあ、確かあの部って、ゴールデンウィークに合宿に行くと言  
つてなかったか?」

「よく知ってるな」

「ま、まあな」

相良のことは黙っておこう。

「いやそれより、ゴールデンウィークって、アキナとユキトが、ど  
つか行く計画立ててなかったか?」

「……………あ」

「忘れてたんだな……………」

まあ、俺も人のことは言えないが。

さてさて、困ったもんだぞこれは。

こいつは滅茶苦茶律儀な奴だから、絶対にその合宿を休むなんてこ  
とはしない。

かといって、それに行けば俺達と一緒に遊びに行くことは出来ない

わけで……

そうだったら、アキナもユキトもメイも、かなり落ち込むだろう。

いくら天才でも、中身は俺と違って、まだ13歳の子供なんだ。

こんな時くらい、楽しんで欲しいもんなんだが……

……はてさて、どうしよう？

「私に名案があるッ！」

開口一番、アキナがそう叫んだ。

場所は俺の部屋。

今は夕食を終えて、皆思い思いの行動をとっていたとき。

カノンと俺が、三人にそのことについて相談したのだ。

したら簡単にアキナからそんな返答が返ってきたもんだから、びっくりだ。



まあ、名案があるらしいし、聞いてみるか。

「して、どんな？」

「私達もその合宿に参加する」

「.....」

「どんな？」

「私達もその合宿に参加する」

「.....」

..... しつ、どんー」

「しつじい」

アキナから顔面に向けて拳が放たれる。

「つと」

それを右に顔を傾けて避けようとする。

「ぶんっ」

するとあら不思議、拳の軌道が俺の顔面に向けるよう変えられた上、速度が倍にはね上がった。

「しつそめぶへらっ」

結局拳は俺の顔面にめり込まれ、壁に向かって吹っ飛ばされたのだ

った。

「痛たた……」

顔を撫でながら、立ち上がる。

いくら何でも突っ込みしちや激しすぎね？

「はア……やっぱりか」

対してアキナは、悪びれるどころか呆れるようにこっちを見てるし。

これって怒ってもいいのかな？

「……つか、嫌だぞ俺は。んな面倒臭そうな合宿」

「何言ってるの。アンタの為に言ってるのよ？」

「は？俺の？」

「アンタ、訓練なんてここ数年やってないでしょ？」

「……」

思い返してみれば、確かにやってないな。

しかしそれが何なんだ？

「自分で気付いてない？動きが鈍ってるって。今程度なら、ここに  
いる全員簡単に避けられるよ」

「……………」

マジかよ……

確かに、昔に比べたら遅い気がしたけど……

確認をとる為に周りを見回すと、全員何だか呆れたようにため息をついていた。

くっ……訓練サボってて悪かったなあっ！

てか俺がやってたら逆にビックリだろっ！

そんな風に心の中で愚痴っていると、アキナは俺のびしっと指をさして、

「てなわけで、合宿よっ！合宿で徹底的に鍛えなおすのよ！」

「本音は？」

「合宿ってなんか面白そう」

「デスヨネ……」

とまあ、そんなわけで、俺のゴールデンウィークは合宿なんていう面倒臭そうなものによってつぶされたのだった。

今にして思えば、この間約束した何でも一つだけ言うこと聞くって、これで終わりなのか？

だったらラッキーって思うべきなんだけど……

「はあ？なわけないじゃん」

マンションに帰って早々、先ほど思ったことを聞くと、気持ちよいくらいの否定の言葉がかえってきた。

……ははは。バカじゃないのアンタみたいな顔で見てきやがる。

落ち込んでもいい？

「バカじゃないのアンタ」

おお、思ったこと一言一句違わぬ台詞。

こうなると逆に感動を覚えるな。

「あのね？これはアンタの為の……」

「どうせ遊ぶのが本当の目的なんだろ」

「そうよ」

「認めちゃったっ!?!」

「私はいつもカイトのことを考えているよ」

「やかましいっ!?!」

結局、俺の抗議は一切聞いてもらえず、明日からの二泊三日の楽しい楽しい旅行が、決定されたのだった。

……海でも山でも地獄だろうなあ。

行き先は両方だった。

最悪だ。



## その16 ゴールデンウィーク？

――海斗side

皆さん、私こと黒崎海斗は、もう駄目かもしれません。

今の私は、顔が真っ青になり、白目を剥いていて、全身が痙攣しております。

ああ辛い。

辛すぎるぞコンチクショー。

なのに周りからは呆れたような視線を受けるばかり。

ああ、何て薄情なんだろう。

てか、何故こんな拷問のようなものに、貴様等は耐えられるんだ。

何故平気な顔ができるんだ。

何故俺だけこんなに苦しんでるんだ。

理不尽ではなからうか。

《いや、それはあなたの体質が原因では？》

何か言ってるゴミは無視。

《ついにドストレートに言いやがったっ！！》

さて、そろそろ今俺達がおかれている世にも恐ろしい事態を教えてくださいろ。

それは……

新幹線に乗って合宿の場所に向かっているのだあつ！！

「はあはあ……うぶつ。……ま、まだつかないのか？」

今にも吐きそうなのを必死に耐えながら、今回の合宿のメンバーに、懇願するかのように聞いてみた。

「んー、あと一時間ちよいかな？」

隣に座っているアキナが教えてくれた。

一時間……余裕で死ぬな。

「相変わらずだな、その乗り物酔いのひどさ」

正面に座っているユキトが、からかうように言ってくる。



そうなのだ。

俺は前世から乗り物には非常に弱く、何故かそれは今世にも渡り継がれていて……

「うる……せ……うえっ……」

このように、ムカつく奴に言い返すことすらできないのであった。

は、早くついてくれ……

「も、もう二度と乗るもんか……」

瀕死の状態で這い出て、呻くように言っつ。

「帰りも乗るぞ？」

空気を読まないカノンの非常なる一言に、泣きそつになる俺であった。

ザザーン

波の音がする。

青い空、白い雲、そして眼前には……

「ほらほらあーっ！逃げないと死ぬよーっ！」

「ぎゃあああああああああああああああああっ！  
？」

地獄があつた。

今俺は、浜辺を全力疾走していた。

まだ五月の上旬と肌寒い気候のせいもあって、海にも浜辺にもほとんど人はいなかった。

後ろから、どこから調達してきたのか、釘バット片手に追い掛けてくるアキナに鉄球を掲げ持つユキトが、陸上選手の如くスピードで追い掛けてきていた。

「待て待てえっ！」

「待てるかあつ！」

「カイト、潔く散れやあつ！」

「てめえを後で散らしてやらあつ！」

先程から自分でも無駄な問答の繰り返しだとわかっているが、言い返さずにはられない。

つーか、これ特訓じゃなくていじめだろ！

「オラオラアツ！さっさと殴られろやあつ！」

「それが何の特訓に！？」

「えーと……防御力のだ」

「ぜってー今考えたるそれ！」

「あー、間違えて釘バットすっば抜けたー」

「ぎゃああああああああああああああああああああつ！  
「？」

「お、避けた。流石だな」

「てめえは止めるよ！」

「やだ」

「なんて友達がいない奴だ」

「あ、俺も手が滑った」

「ぎゃああああああああああああっ!?!」

この悪魔どもめっ!

結局、ついでに早々俺はボロボロになりました。

ちなみに相良達は、下宿する宿で呑気にくつろいでいた。

人を本気で呪い殺したいと思いました。

夕方。

朝からの特訓という名のいじめがようやく終わり、俺は部屋でくつろいで……いや、倒れて動けずにいた。

俺の体は、ピクピクと死んだ魚のように痙攣していた。

「し、死ぬ……」



白い悪魔がいた。

「何か言った？」

「イエナニモ。タカマチサンハナゼココニ？」

「え？……ち、ちょっと旅行に」

うん百パー仕事だね。

確かに微弱な魔力を感じるしな。

もう消えかけだけど。

「そ、そういう黒崎君達は？」

「似たようなモンだよ」

魔法関連ってところがね。

「へー、そうなんだ。私達、近くの宿に泊まってるんだけど……」  
……嫌な予感がする。

恐らく、仕事のついでに軽く遊ばつって思ってるんだろうけど……

「品川荘ってところなんだ」

ハイ当たり！！

魔王＋狂王＋おまけ達。

果たして俺はゴールデンウィークを生き残れるのか!?

続く。

《って、何勝手に終わらせてるんですかアンタ!?!》

《逃げだ!》

《堂々と言う事!?!》

《いやあゝ、だってさあ、もう現実逃避以外に俺に手は残されてなくね?てかもう帰ろっか》

《アキナ様に原形留めないくらいボコボコにされること間違いなし》

《この案は却下しよう》

《情けないですね》

《プライドより命だよアイリス君》

「黒崎君は、どこに泊まってるの?」

「……同じ所」

「え？うそっ！？」

「マジ」

「うわぁ………凄い偶然だね」

ホントにねー！！

「でも、何でこんなところにいるの？」

「魔王から逃げてきたのさ」

「へ？」

「いや、山頂からの景色は綺麗だな」

《その誤魔化し方、あからさますぎでしょ》

《黙れ》

ただでさえちょっとテンパってるだぞ？俺。

もうてめえの相手してる余裕ねえんだよっ！

ああ、もし高町を通して俺がここにいることがバレたら……

「ちよっ、大丈夫？いきなり震えだして」



「だ、だだだだいじょじょぶささささささ」

「どの辺が!?!」

「ち、ちょっとこの後のことを恐怖しただけだから」

「……えっと、頑張れ」

「……ありがとうございます」

優しい言葉をかけられたのは久しぶりすぎて、ちょっと感動してしまい、心の中で泣きながらお礼を言った。

その後、少し話をして、高町と別れた。

高町に、一緒に戻ろうと誘われたが、丁重にお断りした。

「……ま、仕方ないよな」

準備体操第二をしながら、呟く。

「流石にこの事態は予測していませんでしたからね」

アイリスが、念話ではなく、直接言葉を話す。

念話の必要が無くなったのだ。

そう、今ここにいるのは俺とアイリス、それに……

俺は、後ろの木々の中から出て来た、夕焼けの赤の中でも、金色に輝く髪を睨み付けた。

「……久しぶりだな。一ヶ月ぶりくらいか？」

「だいたいそれくらいだね。それよりさっきの子可愛いね。彼女？」

「だったらいいね」

「片想い？」

「見た目は天使だけど、中身は悪魔なんだ、あいつ」

「なんだ、出会いが欲しいだけか」

「健全な男子の発想だろ？」

「そうなのかな？僕は普通とは違う幼少期だったからなあ」

「俺もだ。何せ二回目の人生だからな」

「面白い冗談だね」

「だろ？ま、お喋りもこの辺にするか」

俺は、前回外さなかった魔力リミッターを、全て外した。

それと同時に、半径数百メートルに、探知不可の上、指定した人間以外は魔力を持っていても気付かない、予め開発しておいた特殊な封鎖結界を五重に張る。

これで管理局や高町達、アキナ達にすら気付かれずにすむ。

そして、アイリスをセットアップさせる。

「……相変わらずの変な格好」

「やかましい」

俺は指先に集中する。

「じゃあ、そろそろ始めようか。アルセイド・シファー」

「望むところだ。黒崎海斗」

俺は半瞬で魔方陣を描き終え、アルセイドも既に攻撃態勢入っている。

「求めるは……」「一つ星神器……」

お互いに呟く。次に、叫んだ時が開戦の合図になる。

前の探り合いとは違う、本気の殺し合い。

恐怖はない。

もう慣れたもんだからな。

向こうも同じだろう。

向こうは、俺よりも何倍も辛い体験をしているかもしれない。

両親からすら、愛されなかったのかもしれない。

友達も作れず、実験の事しか頭のない研究者達に体を毎日いじくられたのかもしれない。

最後の希望に賭けて、似たような力を持つ俺をたよって来たのかもしれない。

でも、それでも俺には負けられない理由がある。

すぐく身勝手な理由だ。

とてもじゃないが、誉められたものではないだろう。

その為に他人を蹴落とそうとしているのだから。

それでも、もう俺には、前に進むしか道は残されていないから。

だから、こいつを倒して前に進む。

でも、それじゃ俺の後味が悪いから……

「稲光いづち!!!」「鉄くろがね!!!」

だから、ついでにお前のことを助けてやるよ。



その16 ゴルデンウィーク？（後書き）

感想待ってます！

## その17 ゴールデンウィーク？

ドゴガアアアアアアアアアアアアアアン！！！！  
爆音が辺りにこだます。

鼓膜が破裂するんじゃないかと思うほどの振動を感じながら、その中心に突っ込みながら、新たな魔方阵を描き、叫んだ。

「求めるは焼原>>>・紅蓮くれない！！」

燃え盛る爆炎の固まりである球を、煙の向こうにいるであろうアルセイドに向かって放つ。

煙の向こうから爆音が再び響く。

しかし、それは人が爆発した音ではなかった。

それにすぐさま気付き、空間に目に見えない程のスピードで文字を走らせ、早口言葉などとは比べものにもならないほどの速度で呪文を唱える。

「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す！」

俺の体が一瞬だけ光る。

その光りが納まるのと同時に、力の限り地を蹴り、後ろに弾丸のような速度で下がる。

直後、先程までいたところに、鉄球がめり込んだ。

すぐさま鉄球が飛んできた上を仰ぎ見ると、そこには悪魔のような黒い翼を広げ、空中から俺を見下ろすアルセイドがいた。

「……………」

おかしい。

アルセイドから生えている一対の黒い翼を見て、心の中でそう呟く。

神器は、多数を同時に扱う事は、捕獲用の神器の旅人カリバー以外は出来な  
いはずだ。

なのに今、花鳥風月セイクを使いながら、鉄くろがねを撃ってきた。

つまり、これは……………」

「“ゴミを木に変える力”のアレンジか」

「本当に君は、何でも知ってるよね」

原作ばつちり読みましたから。

なんてことはどうでもよく、これは少し……………すいません、見栄を張  
りました。

ぶつちやけかなりまずい。

もし、“ゴミを木に変える力”と、“理想を現実に変える力”を併



用出来たとしたら……

絶対に当たる鉄球の弾丸と、どんなものも貫くドリル、目に見えない速度で振るわれる太さ一メートル近い鞭、鋼鉄すら簡単に切り裂く大刀……

そんなものを一斉に放たれたら終わりだ。

しかも、それよりもやばい可能性がある。

それは、前回戦った“七人の一人”の時もそうだったから、薄々は覚悟していたことだが……

「それじゃ、そろそろ少し、本気で行こうかな」

こっちの考えがわかっているかのようなタイミングで、アルセイドが呟いた。

ゾクッ

その言葉を聞いた瞬間、寒気がした。

やばい。

そう思ったのと同時に、右手で魔方阵、左手で空間に文字を半瞬で描き、刹那の如く呪文を叫ぶように唱えた。

「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す！！」

まずは一つの魔法を使い、体を光が包み、それが消えるのと同時に、

飛行魔法で一直線にアルセイドに向かって、弾丸のように飛んだ。

相手が何かをする暇もなく、一気に叩くつもりでいた。

だが、

「…………一秒を十秒に変える力」

そうアルセイドが呟いた瞬間、アルセイドの花鳥風月セイカーが無くなったと思つたら、アルセイドは地面に一直線に降り、地面を蹴って俺の目の前まで飛翔し、俺の顔面を蹴り、地面に叩き落とした。

「っつ」

地面に当たる寸前に、アクティブガードを発動して、落下の衝撃を無くして着地する。

だが、そのせいで一瞬隙ができてしまい、そこをすかさずアルセイドが百鬼ヒック夜行を放ってきた。

「どわぁっ!?!」

全力で身をひねって、ギリギリかわすことに成功した。

「遅い」

「っ!」

かわした矢先、いきなり後ろからアルセイドの声が聞こえてきて、慌てて振り向こうとしたら、重たい衝撃が何発も体を襲い、気付い

たらふつとばされていた。

「があっ」

今度はアクティブガードを発動する余裕もなく、背中から木にぶつかり、その衝撃で肺から空気が一瞬なくなった。

咳き込むよりも先に、俺は“疑問”を解決するために慌ててアルセイドの方を見た。

すると、そこには六本の腕を生やしたアルセイドがいた。

……やっぱりだ。

さっき、ふつとばされた時、何十発も鈍器で殴られたような衝撃に襲われた。

はっきり言って、どんなに鍛えたとしても一瞬でそれだけのことをするのは、どんなに身体能力を強化しても不可能だ。

つまり、特殊な能力を使ったということだ。

“複数の能力を同時に”。

「……やっぱり全部の力が使えんのか」

確か、原作に登場したのだけでも四十近くなかったか？

もしかしたら、続編の能力も使えたりして？

……絶望しかねえよ。

「あれ？もうダウン？」

アルセイドの顔を見ると、楽しそうに口の端を吊り上げていた。

……相変わらず腕は六本のまま。

恐らくさっきのは、“腕を六本に変える力”と、“一秒を十秒に変える力”を組み合わせ、更に“一秒を十秒に変える力”の“レベル2”である、身体能力倍増を使ったのだろう。

……滅茶苦茶痛え。

もうギブアップしていつスか？

「前回のカッコいい開戦が台無しですね」

「あ、やっぱり？」

そう言った後、よっという掛け声とともに起き上がった。

「……全然ダメージないの？」

「鍛え方が違うんで」

アキナのボコリヤーヤーのいじめに比べりゃ、へでもねえや。

「うーん。やっぱり倒すなら、神器で体ぶち抜いた方がいいのかな

あ

「さりとてグロい事言つなお前」

ちよつと寒気がした。

にしても、少し不味いなあ……

このままじゃ確実に勝てないぞ。

一つ一つが強力な能力が四十種類＋神器。

……勝ち目ねー。

さてさて、ここでの俺の選択肢は2つある。

一つは封鎖結界を解除して逃げる。

もう一つはこのまま戦う。

……戦う、しかないよなあ。

もし封鎖結界を解いたら、アルセイドの存在が管理局にバレる可能性が高い。

そうなつたら、管理局の目から逃れながら封印するのが難しくなる。

なら、ここで戦って気絶させるしかない。

でも、このままじゃ勝ち目はない。

……使うか？

じゃあ、タイミングを間違えないようにしないとな。

「……うっし、やるか」

バリーイイイイイイイイイン！！

気合い充分に立ち上がったところで、いきなり封鎖結界が割れた。

えええええええええええええええええっ！？

五重に張ったんだぞ！？

こんな真似誰が……

「カイトー？いるー？」

……できる奴、いたなあ。

感知能力がたけている奴も、こつこつ結界破壊が得意な奴も、すぐ近くにいたなあ。

俺は恐る恐る振り返り、か細く俺の結界を台無しにしてくれた張本人に、声をかけた。

「アキナサン、ゴキゲンヨウ」

「君はなあゝにをしているのかにやあ？」

可愛らしく小首を傾げながら、十人のうち十人が惚れ込んでしまっ  
そんな魅惑的な笑みを浮かべて聞いてくる。

……何故だろう？

物凄い可愛いはずなのに、見慣れた俺ですら一瞬ときめきそうにな  
るくらい可愛いのに、冷や汗しか流れない。

「……何だい？君」

俺が黙っていると、なんと命知らずな事が、アルセイドがアキナを  
見ながらそんな事を言った。

つてか、結界張り直さないと！！

慌てて張り直そうとすると、アキナの後ろからメイがでてきた。

「えつと……大丈夫？カイト」

「……まあ、この場所がわれたってことは、お前もいるよなあ」

メイの感知スキルは、管理局の中でも随一で、おそらくトップ3く  
らいは普通に入れると思う。

そんな事を考えてるうちに、いつの間にか結界が張り直されていた。

……今度は八重で。

アルファ・ステイグマ  
複写眼で視るとあら不思議、俺の開発した先程の結界より数段制度  
が上だった。

「……自信なくしそう」

「何が？」

これまた小動物系のメイが小首を傾げると、先程のアキナの数段可愛く、更に純粹に疑問に思ってるすんだ目を見ると、とても本当のことなど言えるはずもなく、

「……はは、何でもないサ」

と情けなく答えるしかなかった。

にしても、奇妙な状況だな。

俺の隣には今メイがいて、俺の視線は今アルセイドに注がれていて、そのアルセイドは今アキナを見ていて、そのアキナはアルセイドが  
ン無視で俺の方を見ている。

何この状況！？

「……で、君たちは何なんだ？」

「カイトが二股している女の子」

「何さらりと嘘言ってるスカねエアキナさん！？」

「へエ、そうなんだ。軽蔑するよカイトくん」

「てめえも信じんじゃねエ！！」



「大丈夫だよ、カイト。ミゼット提督ならきつと許してくれるから  
「お前だけは味方と思ってたのにii  
いっ!!」」

てか、何でこんなやり取りしてんだ俺達。

「まあ、冗談はおいとして……えっと、アンタ」

アキナがアルセイドを指差す。

「今回アタシ達はね、遊びに来てんの」

……ん？何だか嫌な予感が……

「ア、アキナ？」

「だからね、アタシとしてはそれを邪魔されるのは凄く遺憾なわけ  
スルーしやがったコイツ!!」

「マスター、諦めましょう」

「テメーはチャレンジしようとするらしてねえだろが」

「まだ死にたくありません」

「凄く納得できた」

でも、このままじゃ絶対ろくなことにならない気が……

「だからアンタ、今日は見逃してあげるから、帰って」

「はあっ!?!」「なっ!?!」

俺とアルセイドが同時に声をあげる。

いやいやアキナさん。

何言っちゃってんの？

ようやく二人目封印するチャンスなのに……

「……それを僕が大人しく聞くとでも？」

「思っていないわ。だから、明日のこの時間、この場所で再戦ってことにしない？」

「……目的がわからないな」

「知る必要ないわ」

「……」

「……」

二人が無言のプレッシャーをかけあっている間、俺は何故アキナがこんなことを言っているのかを考えていた。

だが、どれだけ考えてもその答えは出ず、情けないことに隣にいる

メイに目で訴えることしか出来なかった。

「……………」

しかし、メイはそれには答えず、かわりにアルセイドとアキナのやり取りを見ていた。

「…………話にならないな。それで僕に何のメリットがあるんだい？」

「メリットならあるわ。今、戦つと三対一になるけど、明日なら一対一でやらしてあげる」

「ホワッツ!？」

「いやいやいや!?!さっきからだけど何言ってるんすかアキナさん!

そりゃ確かにお前等なるべく巻き込みたくないけどさあ、ここまで来たたら普通手伝つたる!?!」

「…………五ツ星神器」

「っ!?!」

いきなりアルセイドが右手をアキナの方に向けた。

不味いっ!

そう思った時には、アルセイドは神器の名を告げていた。

「百鬼<sup>ヒック</sup>夜行」

アルセイドの腕から、馬鹿でかいドリルが、アキナに放たれる。

そのドリルは、アキナの胸目がけて一直線に弾丸のような速度で進み、そして……

「邪魔」

ドガアッ！

アキナが右手で軽く払ってしまった。

「……………」

男二人、啞然とアキナを見る。

今アキナは、迫り来る百鬼夜行ヒックの側面を叩いて、百鬼夜行ヒックの軌道をそらしたのだが……

無理っ！

普通なら絶対無理っ！

俺なら絶対無理っ！か不可能！

どんだけ強くなってるんだよコイツっ！

「でっ……」で三対一で戦うのと、明日一対一で戦うの、どっちがいい？」

見た目は天使のほほ笑みなのに、悪魔がゲラゲラ笑って見えてしまう笑みを浮かべながら、アキナが聞く。

アルセイドは、一瞬だけ考えるような素振りを見せた後、

「……………わかった」

と小さく答えた後、いつの間にか現れていた結界の穴から出ていってしまった。

「……………って、おかしいだろそれ!？」

慌てて追いかけてようとしたり、いきなり穴が塞がれ、それはかなわなかった。

「ぶへっ」

なので、俺はそのまま結界にぶち当たり、変な声を出してしまう。

「てて……………メイ？」

「ごめんね、カイト」

閉じた張本人を見ると、申し訳なさそうな顔のメイ。

どういうことだ？

さっきからわからないことばかりだ……………

「え〜っと……………アキナ、説明してくんない？」

「……こっち来て」

「？」

大人しく従うと、いきなりぶん殴られた。

「がっ」

数メートル……いや、十数メートル吹っ飛ばされる。

そして何度も地面をバウンドし、そして最後に木にぶつかって止まった。

……痛え。

さっきアルセイドに何十発ももらったけど、それより何倍も痛い。

流石としか言えないな。

「……帰る」

アキナがそう呟いたのと同時に、結界がなくなり、気付いたらアキナは消えていた。

おそらくは、宿に戻ったのだろう。

「……はあ」

本当に訳が分からん。

「あはは……お疲れさま」

目の前に差し出された手を握り、起き上がる。

「メイ、全部残らず説明してくれ。ちゃんと納得できるように」

「……まあ、仕方ないよね」

何が仕方ないんだ？

アキナから口止めされてんのか？

「……絶対に私が話した事言わないでね？」

やっぱりそうなのか……

「何があっても、どんな事があっても、話さないと誓おう」

「すぐく嘘っばい」

ガハッ。

俺にとって唯一のオアシスのメイから信用されてなかったってのは、何げに結構シヨックですたい。

「ま、冗談はおいといて」

冗談だよな？本当だよな？

まあ、これから真剣な話するみたいだし、その事はおいとくか。

「アキナね……この旅行、凄く楽しみにしてたんだよ」

「……まあ、流石にそれはわかってたよ」

昼間俺をいじめてる時も、何ていうか、普段見せるのとはまた違う笑顔を見せてたからな。

それに、五人揃って遊ぶのなんて、久しぶりだもんなあ。

いくら唐変木だの朴念人だの言われる俺でも、それくらいはわかるさ。

……何でそんなこと言われるんだろうな？

「でね、カイトが戦ってるってわかって、初めは放っておいても大丈夫だと思ったんだけど……もしかしたら、七人の一人かもしれなかって思っちゃって、アキナに話したんだ」

「……そこまではわかんだけど」

何で加勢じゃなくて邪魔したんだ？

「ほら、もし今日戦ったら、三人がかりでも絶対大怪我しちゃって、明日遊べなくなるでしょ？」

「……あ」

そうか。そういう事か。



「だからアキナ、急いでここに来ながら、相手を騙して一日時間かせぐ方法を考えたんだよ」

それがあれか。

でも、こっちにも奥の手があったから、何とかあったと思うんだが……

「それと、また一人で突っ走りそうになってる馬鹿を止めるんだ、って張り切ってたよ」

「……」

言い返す言葉もない。

馬鹿か俺は。

一人で何とかなるか分からないから、皆に隠し事して心配させたくないから話したってのに……

念話なり通信なり、助けを呼ぶ方法はいくらでもあったってのに……

また無駄に心配かけて、アキナにカツコ悪く止められて終わった。

情けねえ……

……でもさ。

「どうせなら、明日も加勢してくれたらなあ」

「大丈夫大丈夫。カイトなら勝てるよ、絶対。……ボロボロになるかもしれないけど」

「最後何か不吉な事言いませんでした!？」

「アハハツ。じゃあ戻ろっ!」

先に駆けていくメイを追って、俺も走りだした。

まず宿に帰ったら、アキナに死ぬほど謝って、明日は目一杯遊ぼうぜって誘うか。

……まあ、アイスでも買って帰れば、少しは機嫌直してくれるだろ。

その17 ゴルデンウィーク？（後書き）

感想待ってますっ！

その18 ゴールデンウィーク？（前書き）

若干キャラ崩壊あり？

前回のシリーズが残念になりますがどうぞっ！

## その18 ゴールデンウィーク？

「……」

どうも、黒崎海斗です。

ただ今俺の顔は、両頬が腫れていて無様です。

右は山で別れ際に、左はさっき謝った時の照れ隠しに。

両方腫れていてヒリヒリします。

「ったく……何で言わねーんだよ」

「全くだ」

先程から同室のユキトとカノンも、俺が何も言わず戦ってたことに憤慨していた。

普段はチャライユキトだが、人一倍これでも仲間想いな奴だからな。

カノンについても同じだ。

さて、なんと謝ったものか……

「……なあ、悪かったって、本当に」

「……本っ当に反省してんのか？」

お、くいついてきた。

こういう時のユキトは、頭が冷えた後で、何かきっかけが欲しい状態なんだ。

ここで進まない手はない。

「ああっ！もうこんな事絶対しないっ！だからこの通り！！」

最終手段の土下座ではなく、拝み倒しに挑戦。

無論、カノンにも。

「……………なら、許してやんよ」

「本当か「ただしっ！条件がある」……………？」

俺の言葉を遮って、ユキトが声を張り上げる。

……………嫌な予感がする。

「な、何だ？」

冷や汗を見えないところで流しながら、恐る恐る聞いてみる。

「一つだけ、何でも俺の言う事を聞け」

「……………まあ、俺に出来ることなら」

なんか前にアキナと同じ約束したような……………

ま、まあユキトだったら常識の範囲のことを……

「よっしゃー！じゃあ今から女風呂覗きに行くぞっ！！」

五秒前の俺の思考全部ブラックアウトしろ。

少しでもこいつにまともな思考を求めた俺が馬鹿だった。

「どうした！？さあ返事は！？」

「ノーに決まってるんだろが！！」

「なっ……ば、馬鹿な！？お前、覗きたくないのか！？」

何お前　　ついてないのかみたいに驚いてんだよっ！！

「男なら、男らしく覗きに行こうぜっ！！」

「それはオスらしいだろっ！！」

「秘密の花園だぞっ！？楽園だぞっ！？天国といっても過言じゃねえオアシスなんだぞっ！！」

「確かに天国に行けるだろうな物理的にっ！！お前今は我らが霸王ことアキナと管理局の悪魔高町がいるんだぞ！？死に行くようなもんじゃねーかっ！！」

「ふっ……パラダイスってのは、スリルの先に待ってるのさ」

意味わかんねえ。

「てか考えてみるっ！アキナにメイ、それになのは達を合わせて超一級品の美少女が6人（ロリ+2）もあられもない姿で露天風呂に入ってたぞ！？命賭ける価値くらい余裕であんだろーがっ！！」

「……………！！」

だ、駄目だコイツ！！

もう人としていろいろなんか終わってる！！

と、止めないとコイツの明日はないっ！！

「な〜カイト〜。さっきお前自分にできることなら何でもするって言ったよなあ？」

「っ！！」

しまったああああああああああああああああああああ！！

呪う！軽率な判断をした自分を呪うぞっ！！

はっ！

そ、そっだ！俺達の良心のカノンがいるじゃないかっ！！

カノンなら絶対止めるはずっ！

「む、こういうのはよくないのではないか？」



ほおら見た事か！

これで俺達は無事朝日を拝むことが……

「知らないのかカノン？……旅行で風呂を覗かないのは、紳士にあるまじき行為なんだぜ？女性に対して失礼にあたいますべき行為だ」

な・に・う・そ・ふ・き・こ・ん・で・や・が・る。

てか、いくらカノンでも信じるわけ……

「そ、そうだったのか……！！」

アハハ！。お前らを常識的に考えた僕が馬鹿でした！。

こうして俺達の、命賭けの覗きが始まった。

「……で、覗くって実際どうすんだ？」

覗くつもりはかけらもないが、できるだけバレにくい方法にして欲しい。



最悪の初対面になんじゃねえかつ！！

いつか会おうと思ってたけど、流石にこんな形で会うのは想定外すぎんぞっ！！

「レッツラゴー」

「あはは……もういいやあ」

今にも天国の階段が見えそうな心境です。

「さあ行く……むぐっ」

いきなり大声をあげようとした馬鹿の口を拳で黙らせた。

これ以上奇行起こすようなら流石にもう付き合ってられんぞ。

ただでさえ命懸けなんだからな。

(静かにしろっ。殺されたいのかっ?)

霸王&魔王コンビに。

(っと、悪い……カノンも、気配ちゃんと消せよ)

「む、了解した」

( (小声で喋れっ!) )

てか、よくよく考えたらもう俺って引き返せないところまで来たよなあ。

今俺達は、腰にバスタオル一枚だけの温泉スタイルで、男の方の露天風呂に、無駄にプロの暗殺者顔負けくらい完璧に気配を消して立っていた。

だがどうやらまだアキナ達は入っていないらしく、俺達はここで来るのを待っていた。

地文が新たに書かれる度に人として終わっていくような気がしてたまらない今日この頃。

アキナ達がまだいないとはいえ、いつ入ってくるかもわからないので、静かにするにこしたことはない。

どんどん変態になっていく気分です。

ガラガラ

「っ!」

き、来てしまった……

や、やべえ……あ、足が震えて……

(じゃ、逝くか)

それは覗きにか？それともあの世にか？

(って待て待て！そのまま行っても確実に見つかるだろっ！)

(む、言われてみれば)

(頼むから自重してくれ……まだ俺は死にたくないんだよ)

そんなわけで、俺達は変態よろしく、女湯を囲っている柵に張り付くように移動する。

軽く死にたくなってきた。

(よおし。梯子よおし)

(へいへい)

俺達は静かに、慎重に、そおと梯子を立て掛けようとする。

すると、隣から話し声が聞こえてきた。

……いわゆるガールズトークというものが。

「ああ……また叩いちゃった」

「まあまあ。カイトならきっとわかってくれてるって」

これはアキナとメイか。

「あの唐変木があ？」

失礼だなコノヤロウ。

「またまたあ、わかってるくせに」

「……ぶくぶく／＼／＼」

あれ？アキナ沈んでないか？

大丈夫か？

「……なあ、なのは」

「なに？ヴィータちゃん？」

「お前また胸でかくなってないか？」

「っ！？」

や、やべえ……

声出るとこだった。

(ぬおおお〜！パラダイスがあそこにいーーーーいーーーーいーーーーい)

いっ！)

梯子を急いで登ろうとするユキト。

それを何となく慌てて止める。

(何すんだっ！)

(いや何となく………てか、もっと慎重に行動しやがれっ！)

(っつと、そうだな。悪い悪い………って、何カノンはのんびり湯に浸かってんだよっ！)

(………いい湯だ)

カノンはここでリタイアだな。

温泉に魅せられていやがる。

何て羨ましい。

………俺もー

ガシィッ

(待てよ親友。どこへ行くんだい?)

ちいっ、鋭いっ！

(ちよっとトイレに………)

(さつきすませたる?)

(大きいほう)

(我慢しろ)

(嫌だ)

(じゃあ特別に一番最初の権利やるから、覗いてから行け)

ホワアアアアツツツツツツツツツツツツ!!??

安全圏から一気に崖っぷちに!!

(い、いやいやいやいや。や、やっぱ最初はユキトに譲るって)

てか、俺覗く気ねえし。

(いいから早くしろって。俺達共犯しんぼうだろ?)

確信犯かよっ!

だ、駄目だ……もう逃げれねえ。

もうこうなりややけだ。

そおっと覗いて後は逃げりやいや。

俺は慎重に梯子への第一歩を踏み出した。



「フェイトもかなりでかくなったよなあ」

「そ、そうかな？」

「そうだよっ！後その……えっと……」

「アキナよ」

「そうアキナッ！お前もかなりでかいよなあ……」

「……（胸にコンプレックスでもあるのかな？）別にそうでもないと思うけど？」

「だからあるんだよっ！」

「ヴィータちゃん落ち着いてくださいですう」

「そっだぞヴィータ。少し落ち着いたらどうだ？」

「一番巨乳の奴がうるせえんだよっ！」

「胸がでかくても、肩が凝るだけだぞ」

「一度でいいから言ってみたいねえそんな台詞っ！」

「ヴィータが壊れたっ！」

「だ、大丈夫なの？あれ……」

「た、多分……」

「凄い暴れっぷり……ひゃうっ!？」

「アキナ？」

「なっ、ななな何すんのよはやてっ!」

「ふっふっふ。何ってもちろん、胸を揉んだんやで」

「もちろんじゃないでしょっ!？」

「ええからみんな揉ませろやあーっ!！」

『きゃあああああああああああっ!？』

「……………」

マジで覗かないといけないですか？

後ろを向くと、鼻息を荒くしたユキトが早くしろと目で促してくる。

……………ごめんなさい。

柵の向こうにいる奴らに、心の中で一言だけ謝って、俺は梯子を登った。

一段一段、そおつとそおつと。

その間にも、俺の耳には八神襲われる女子どもの聞いてはいけないような悲鳴が入ってきて、一刻早く終わらせたいという思いが、ど

んどん強くなっていった。

そして、十秒も経っていないはずなのに、何日も経ったと思えるほどの苦悶の階段登りも、いよいよ後一段となった。

長かった。

後一段登れば、ちょうど俺の目線が柵を超えてくれる。

そこでチラッと見てさっさと降りれば、俺のミッションは完了だ。

それに湯気が思いの外濃く、バレる可能性も少ないだろう。

……その分、ユキトにとっては残念なことに、見えにくいかな。

さあ、苦悶の時間はここまでだ。

俺は、その天国への階段にも等しい一段を登った。

……そこでようやく気が付いた。

梯子がもたれかかっている柵がミシミシと悲鳴をあげていることに。

今まで女子どもの悲鳴を鳴るべく聞かないように集中していたせいで全く気がつかなかった。

しかもそれは俺が一段登ったことにより拍車をかけ、ついにはバキッという音とともに倒れた。

当然俺はそのまま女湯に向かってダイブした。

「うわぁああああああああああっ!?!」

ドバァァァァァァァンッ!!

激しい水しぶきがあがる。

辺りからは悲鳴。

そして俺の頭と手のひらは、

ムニユ

……何やら柔らかいものを揉んでいた。

しかも何故か視界は暗く、息もしづらい。

……何でだろう?

激しく嫌な予感がする。

恐る恐る顔を後ろにひいて、顔をあげると……

「  
%   ㊦   \*   % § &   ! ! ? ? ? / / / / / / / / / /  
/ / / / / 「

顔を真っ赤にして、完璧にパニックに陥っているアキナがいた。

……そして俺の右手はアキナの胸をしつかり掴んでいた。



そしてその拳を大きく振りかぶり、

「ド変態がああ  
あああああああああああああああああああああっ！！！！」

いつもの十倍以上速い速度で（亜音速の世界）、俺を容赦なくぶっ飛ばした。

ドグシヤアッ！！

「ぐぎいやあああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああっ！！！？」

そのまま俺は、先ほど山でくらった時とは比べものにならないほどぶっ飛ばされ、意識を手放した。

最後に思った事は、やらなきゃよかった、だった。

その18 ゴールデンウィーク？（後書き）

感想待ってますっ！！

その19 ゴルデンウィーク？（前書き）

その19、どぞっ！

あ、後久しぶりに次回予告しようと思います。



## その19 ゴールデンウィーク？

「……痛い」

目覚めて最初の一言がこれだった。

昨日は気の迷いでユキトの計画に付き合った結果、首とれてないよね？って思いたくなるほどのパンチをアキナからうけ、その後ユキトとカノンともども女子一同にボコボコにされ、全身打撲とともに気絶した。

その後、土下座とかジャンピング土下座とか逆立ち土下座とかを何時間もしてようやくお許しをもらうことに成功した。

その後、ヴォルケンリッターと自己紹介をしあった際に、ヴィータが俺の顔を見て「どっかで見たとかな……」って呟かれた時にはヒヤヒヤしたぜまったく。

三年前のことは話していないだから、こっちはバレるわけにはいかないんだぞコンチクショー。

にしても、一番対応に困ったのはアキナだった。

ボロカス言いながら顔を般若にして半殺しにされるのならまだよかったが、俺が顔を向けたり話そうとしたり近づこうとする度に、顔を真っ赤にさせて殴ったり蹴ったりして「その度どこか骨折れてない？って思うくらい痛かった」「逃げてしまい、アキナとまともに話せるようになるまで五時間くらいかかり」「その頃にはユキトやカノンの五倍くらいボロボロになっていた」「そのまま俺は気絶

に近い形で眠りについたんだ。

ちなみにその時の時間は深夜二時を回っていた。

……で、現在時刻は七時。

まさか寝るだけで生涯を終えたいと願うこの俺が、痛みのあまりたった五時間しか寝られないとは……

今日のアルセイド戦、大丈夫か？

……骨折れてないのは、奇跡だな。

それだけが、今の俺の救いだった。

七時半。

食堂にて高町達を含めた今日することを発表すると言っていたので、顔を合わせずらいのを我慢して、男三人で食堂に向かう。

……てか、相良達はどこに行ったんだ？

まさかもつとつかで特訓中か？

出番少ないことに少し同情（笑）。

「なあ、お前等って、水着持ってきてるか？」

いきなりユキトがそんなことを言ってきた。

「いや、流石に泳ぐってわけじゃないだろ……」

まだ時期的に早いし、高町達も加わるんならそれはないだろう。

「じゃあ山でなんかすんのか？」

「そうだな。カノン、メイからなんか聞いてないか？」

「いや……そういうえば、昨日こんなことを呟いていたぞ」

『準備忙しくなるなあ』

「……………」

メイが準備するって事は……何か機械を使うな絶対。

今まで言う機会はなかったが、メイは超を越えて極がつくほどの機械オタクで、機械開発も行っていて、つい先日モガラクタ部品を広い集めて普通にパソコンを一台作りやがったからかなあ。

……インターネット以外は最新のノートパソコンとかわからない性能だった。

マジで凄いつす。

そんな機械に精通してるメイが準備……

……何するつもりだアキナ。

「サバイバルゲームよっ！」

食堂に入った途端、目をキラキラ輝かせたアキナが、開口一番そう叫んだ。

……サバイバルゲーム？

「ってわけで、早速チーム分け……」

「どついうわけで！？てか、ちゃんと説明しろっ！」

いきなりすぎてわけがわからん。

サバイバルゲームなんて、一体どつで……

「ん」

……材料は……

「メイが準備した」

……高町達は……

「楽しそうだし、いいよ」

「……」

こうして、俺達はサバイバルゲームという名の遊びとはみせかけのバトルが始まった。

只今、森の中、森の中。

ここでサバイバルゲームのルール説明をしよう。

自分の体にぶら下がっているペイント玉が、割れたらリタイア。

森の中にはメイが仕掛けた様々なトラップがあり、それによってペイント玉が割れてもリタイア。

参加プレイヤーはそれぞれ腕に特殊な機械をつけており、味方が半

径二十メートル以内にいる場合は青く光り、敵が半径十五メートル以内にいる場合は赤く光る。

制限時間は三時間。

先に敵のフラッグを撃ち抜いたほうの勝ち。

もし制限時間以内に撃ち抜けなかった場合、生き残ってるのが多いほうの勝利になる。

フラッグは、指定されたエリアの中に必ず置くものとし、フラッグを隠したりすることは禁ずる。

リタイアしたプレイヤーが体をはって味方やフラッグをかばった場合、反則とみなしそのチームの負けとする。

まあ、ルールは大体こんな感じ。

にしてもまさか、ゴールデンウィークにこんなところまで来てサバイバルゲームって……

本当に色んな意味で常識はずれしてるぜ皆さん。

……怪我させないでね？

いや本当に。

狼煙が遠くから上がった。

ゲーム開始の合図だ。

俺のチームは、カノン、メイ、ハラオウン、ヴィータ。

敵のチームは、アキナ、ユキト、高町、八神、シグナムになっている。

リインは見学。

理由はおそらく、あの体型維持に力を使うからだろう。

まあ人数もちょうどだから、問題もないか。

俺達は、互いの顔を見合わせた後、無線機（メイが1日で全員分作った）片手に散会した。

俺達のチームは、三つに別れている。

まずは最前衛、敵のフラッグを撃ち抜く奴。

くじで決めた結果、運のないことに俺とハラオウンになった。

これって一番危険な仕事だからなあ。

次に中継、フラッグではなく敵の数を減らす奴。

これは畏の位置を性格に把握し、自由に動け回れるメイの仕事だ。

そして最後の後衛、フラッグを守るのは、カノンとヴィータだ。

フラッグをできるだけ畏や障害物が多い位置に仕掛け、自分たちは安全な場所からフラッグを守る役。

はっきり言って、メイのほうに後衛からもう一人選出したかったが、その場合メイの足を引っ張る可能性もあるので、その分を後衛に回した次第だ。

さて、まずは制限時間三時間のうちに、敵のフラッグの位置を確認しないとな。

(どうする？ 一気に敵陣地まで行く？)

木の陰に隠れながら一緒に行動していたハラオウンがそう聞いてきた。

だが俺はそれに首を振った。

(駄目だ。畏の位置が俺達にはわからない上、開始早々に敵陣地に行けば、大人数を相手にする可能性もある)

(じゃあ、時間をかけてゆっくり行くの？)

(いや、それも違う)



(?)

(普通なら直線コースが一番早く敵陣地につくけど、その分トラップが多いってメイが説明してたろ?)

(うん)

(だから敵は、外周して近づいてくる)

(……まさか)

(そうだ。俺たちは、一定時間が経った後、一気に直線上を突っ切る)

(無謀じゃない?)

(そうしないといけないんだ……少なくとも向こうに一人、そう考えてる奴がいるから)

(?)

不思議そうな顔してらあ。

俺だってこんな無謀な策実行したくねえよ?

でも外周から行ってそいつを通させたら、メイ一人じゃ止めきれない。

だから罠が多くて余り動けない場所で、二人がかりで仕留めるしか

ない。

その分外周の警戒が甘くなるのはわかるが、そのためのメイだ。自由に動け回れるあいつなら、二人までならなんとかなるはず。

そこを突破されても、フラッグがある場所はトラップと障害物が多いカノンとヴィータが守る場所。

俺達が、これから戦う奴さえ抑えれば、何とかなるはずだ。

(誰なの？それって……)

(……アキナだよ)

この作戦の最大の欠点は、アキナに勝てる確率、だろつなあ。

とりあえず、この第一関門を突破すれば、後は勝てるはず。

シグナムとか剣ばつかだろつから銃とか駄目だろつし(笑)

……まあ、そんじゃ早速。

(行きますか)

side：三人称

「んじゃ、行きますか」

ユキトがそう声をかけたのと同時に、それぞれの持ち場に散会する。

アキナは、時計と無線機を両手に持ちながら、ユキトからの合図を待っていた。

アキナ達のチームも、三つに別れていた。

ただ、カイト達のグループわけとは異なっている。

まず、アキナは罫の一番多い直線道を通り切る役。

そして、ユキトとなのは、アキナと同時に左右から敵陣に向かう役。

最後に、シグナムとはやてのフラッグの防衛だ。

彼らは……正確にはユキトは、カイトのたてた作戦をわかっていた。

だが、敢えてその作戦にのってやることにしたのだ。

理由は単純で、アキナなら勝てると判断したからである。

カイトも、作戦がわれていることなど百も承知だが、ユキトならそのまま続行するだろうと考えていた。

アキナの身体能力は、それほどずば抜けて高かった。

そのアキナは今、無線機からユキトとなのはの応答を待っていた。

開始三十分後に、一斉に真ん中、右、左の三方向から攻める予定である。

一番危惧すべきなのはメイだが、いくら彼女でも右と左の両方を同時に対処することはできない。

アキナの迎撃に人員を割く分、防衛の人数は少ないはず。

ユキトは、アキナさえ勝てば、100%勝てる作戦をたて、アキナならほぼ100%の確率で勝てると思っている。この勝負は勝ったと思っていた。

対するアキナは、ユキトとは少し違うことを考えていた。

『カイトをボコボコにする』

カイトは昨日謝りたおして許してもらえたと思っているようだが、全然全くこれっぽっちもアキナは許していなかった。

しかし、いつまでも引きずるのはよくないので、アキナは『それならゲームに見せ掛けて、カイトをボコろう』と思ったのだ。

カイトはどうやら女の恨みをなめていたようだ。

この後に、カイトはアルセイド戦を控えているが、そんなことは知ったこっちゃない。

アキナは、最早勝敗などどうでもよく、ただただカイトを痛め付けることを考えていた。

「カイト……見てなさいよ……」

怨念のこもった言葉を呟いたのと同時に、無線機から声が聞こえてきた。

『所定の位置についた。準備はいいか？』

「いつでも」

『それじゃ、行くぞっ！』

ユキトの言葉とともに、人間離れた跳躍を試みせるアキナ。

その身のこなしはまるで猿のようで、軽々と地面を走るかのように木を登り、そして枝から枝に飛び移るといふ超人技を發揮させながら、一直線にフラッグ……いや、カイト目指して駆け出した。

「ふふふ。待ってなさいよカイト」

彼女の口からもれた、楽しそうな楽しそうなその言葉は、誰にも聞こえることなく空中に霧散した。

side:三人称了

ゾクッ

何だ？

今なんだか物凄い悪寒が……

(どうかした？)

隣でハラオウンが心配そうに声をかけてきたが、今はそれどころではなかった。

俺がこの感覚を味わった時、それは百%ろくな目に合わない時。

つまり今から戦うことになるアキナから、ヤバイ目にあつというこ  
とで……

(……降参したくなってきた)

(え？)

(何でもない。それより、そろそろこっちも行くぞ)

(うん、わかった)

ハラオウンとともに、罾が大量に張り巡らされた場所めがけて走り

だす。

……何でだ？

悪寒がとまらないのは……

……いや々な予感がしてきたかも。

とりあえず、今は走るか。

ぼーっとしてて罅にはまるなんて間抜けすぎるからな。

side…ユキト

はあ〜。

やつべえ……

このままじゃカイト、ボツコボコにされるだろうなあ……

これって全部、昨日の俺の悪ふざけが原因だよなあ。

さっきのアキナの殺気……

考えただけでも寒気がするぞ。

やっぱカイトとアキナをあたらせるのは失敗だったかも……

……なんとかしたほうがいいかも。

かといって、ここで裏切ってカイト助けにいったら……

……すまんカイト！

生きてたら、なんか奢るからな！

side…ユキヲ了





## その19 ゴールデンウィーク？（後書き）

### 次回予告

カイト

「それぞれに与えられた作戦」

ユキト

「みんな遊びということ忘れ、本気でぶっかかりあった」

アキナ

「まあ、それも無理ない話で……」

カ&ユ&ア

「畏の威力強すぎだよメイッ……」

カノン

「次回、魔法少女リリカルなのは、面倒くさがり屋の勇者、その20、ゴールデンウィーク？」

メイ

「テイク、オフ……」



## その20 ゴールデンウィーク？（前書き）

久々の投稿っス？

駄文の上不定期投稿で申し訳ありません？

## その20 ゴールデンウィーク？

side:メイ

「……よくよく考えれば、カイトとアキナをあたらせるのってまじいよつな……」

木陰に隠れながら、昨日あったことを思い出して、そう呟いた。

だって、あのアキナが何時間か謝った程度で許すとは……

うーん……あれ？何だか冷や汗が流れてきた……

でも、ここを離れたら敵の侵入許しちゃうしなあ。

……でもカイトって、この後戦い控えてるんだよね？

「……ユツキーに相談しようかな」

一応、昨日のことはユツキーに責任があるし、頼んだら手伝って……

『そしたら俺の命がねえっ！！』

……今ユツキーの魂の叫びが聞こえた気がした。

うーん、やっぱり私が助けに行こうかなあ……

ドカーン……！

どこかから爆発音が聞こえてきた。

あつ、あれ多分私が設置した地雷だ。

いやあ、昨日張り切りすぎちゃったからなあ。

まあ、直撃しても吹っ飛ぶだけだから、大丈夫かな。

他にもたくさんあるけど、大丈夫でしょ。

さて、私は私の仕事をするよーっ！

side:メイ了

あ、あつぶねえ〜っ！

俺は目の前にできた半径三メートルくらいのクレーターを見ながら  
そう思う。

地雷があるって聞いてはいたけどやりすぎだろっ!!

「大丈夫か？ハラオウン？」

俺は、下で寝転がっているハラオウンに尋ねた。

地雷が爆発する瞬間、一瞬早く気付いた俺が、とっさにハラオウンに飛び付いて、爆発の場所からギリギリ逃げる事ができたのだ。

「う、うん。ありがとう」

ハラオウンは、少し顔を赤くしながらそう言った。

あー、まあ今の俺ってハラオウンを押し倒してるようなもんだからなあ。

ま、とりあえずどくか。

俺は立ち上がり、爆発した場所をもう一度見た。

この爆発音は、恐らくゲームフィールド全体に響き渡ったはずだ。

しかも煙まで、狼煙の如く天まで続いている。

つまり、それは自分達がここにいますよとアピールしてるようなもので……

「……………っ！ハラオウン！」

「え……きゃっ」

俺は立ち上がりかけていたハラオウンの手を無理矢理引っ張り、そのまま木の陰に半ば倒れるように移動する。

直後、一瞬前までいた場所に無数の弾丸が降り注いだ。

木の上から撃ってんのか!?

あいつはサルかっ!!

「……っ! 敵襲!?!」

感心なことに、事態を一瞬で把握したハラオウンは、すぐさま戦闘態勢にはいった。

でも、その『一瞬』ってのは、あいつからすれば充分すぎるほどの時間で……

「も〜らいつ!」

ダダダダッ、とエアガンの連射音が響く。

俺は地面に頭から突っ込むように前進してそれをかわした後、前向きをしながら体勢を整えるのと同時に、先程の銃声のしたほうへとエアガンの照準をあわせる。

「くらえやっ!」

そして俺は、連射をセミオートできるようにしておいたエアガンの



引き金を引いた。

ユキト side

おいおいマジかよ……

地雷って一体どんだけ火薬使ってたよ!?

メイの作ったもんだから、大ケガはしてないだろうけど……

「痛そお……こうなりゃ俺もマジに……っ!」

いきなり弾丸がこちらに飛んできたのが目に映り、慌てそれを避け、木陰に隠れる。

……最悪だ。

こっちに来るなんて……

俺は木陰からそつと顔を出して、襲撃者の姿を確認しようとしたが、そこには誰もいず、気配もまるでない。

どこから来る？

そう思っていると、今度は後ろからエアガンの射出音が聞こえ、慌てて横に飛んでかわす。

カチッ

「…………へ？」

横に飛んで着地した瞬間、そんな音が聞こえた気がした。

最後に、何かものすごい音が聞こえた気がしたが、俺が覚えているのはそこまでだった。

side:ユキト 了

side:メイ

「…………あちゃー、やりすぎちゃったかも…………」

目の前で、白目を向きながら倒れているユッキーを見てそう呟く。

いやあ、ユッキーのせいで色々やばそうになってるって思ってた、ち

よつとムカついて火薬の量増やしちゃったんだけど……

「……まあ、頑丈にできてるし、大丈夫かな」

体痙攣してるけど大丈夫大丈夫。

さて、と。

とりあえず一人は仕留めたし、私はオフセンスにまわろうかな。

私はユツキーのペイント球が割れてるのを確認してから、敵陣地に向けて走りだした。

side:メイ了

side:なのは

「……」

えーっと、さっきから爆発音がいくつも聞こえてくるんだけど、本

当に大丈夫なのかな？

って、よくよく考えれば、メイちゃんはなんで地雷とかその他もろもろの罠とか作れるの？

「……だ、大丈夫だよね？」

誰もいないが、そう呟かすにはいられなかった。

そのまましばらく、トラップに警戒しながら移動していると、フラッグが目に入った。

周りを見回してみると、見張りはいなかった。

どこから狙われているのだろうか？

ここからじゃ撃っても届かないだろうし、このまま近づいてもやられちゃう。

やっぱりまずは、見張りを倒さないと。

私はフラッグには近づかず、フラッグを中心にして円周りに見張りを探し始めた。

side:なのは了

side:メイ

「……」

私は目の前の光景に唾然としてしまった。

目の前には、八神さんがシグナムさんの上に覆いかぶり、シグナムさんの豊かな胸を揉むような手つきの状態で、二人揃って黒焦げになっていた。

私的予想。

八神さんが暇だからシグナムさんにいたずらしようとする。

シグナムさんそれから逃げる。

八神さん追いかける。

八神さんが追い付いたところで地雷発動。

二人仲良く気絶。

そこに私が現れる。 今こころ。

……何だかなあ。

まあ、ゲームを早く終わらせた方が、アキナの暴走止められる確率もあがるし、都合がいいって思おう。

私は二人のペイント球が割れているのを確認してから、トラップを避けながらフラッグを探し始めた。

うーん、なかなか見つからないなあ。

フラッグの場所は、多分ユキトが決めただろうから、結構見つかりにくい場所にあるんだろうけど……

「本当に見つからない。あの二人、一体どれだけ走りまわったんだろ……」

あの二人が倒れていた付近は全て探したけど、見つからなかった。

本当にどれだけ走ったんだろ、あの二人……

そうしてまたしばらく探すと、ようやくフラッグを見つけることができた。

……フラッグは八神さん達から500メートル位離れた場所にあった。

山道なのに、体力あるなあ。

私はそう思いながら、エアガンの引き金を――

ドガアアアアンッ！！

——引こうとしたところで、いきなりの爆発音。

それも一つではなく連続していくつも同時に音が聞こえてきた。

……いや〜な予感がする。

とりあえず、私はフラッグを撃ち抜いた。

side：メイ了

——遡ること少し前

side：三人称

「……暇だ」

フラッグを見ながら、ヴィータはぼつりとそう呟いた。

対する隣にいるカノンはというと、開始時からずっとイライラしているヴィータをどうしたものかと考え無言。

二人の間には、重苦しい空気が漂っていた。

そして、たまたま二人を見つけたのはは、後ろから二人を見ながら、呆れたような困ったような顔で様子を伺っていた。

(うーん……ここからじゃまだ旗まで届かないし、かといってこのままじゃどうしようもないし、二人共不憫すぎるし……)

などと、考えをめぐらせていると、いきなりどこかから木を薙ぎ倒すような音が幾つも聞こえてきた。

「な、何この音……」

ドガガガアアアアアアアアアアアン!!

音はまだ止まず、どんどんとこちらに近づいてきている。

「や、やばいかも……!!」

私は慌てて、見つかるかそんなことはもう無視して、ヴィータちゃん達の方に向かって走った。

「っ!?!?なのは!?!?」



ヴィーちゃんがかつちに気付いて慌てて銃口を向けてくるけど、今はそれどころじゃ……！！

そこまで考えたところで、ついに私のすぐ後ろの木も薙ぎ倒され、それと同時に……

「フハハハアツ！！死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ねい！！」

「ぐばばばばつ！？も、もう許しぐぎゃああああああああああああああああああ！！？」

なんて声が聞こえてきて、私の意識は途切れてた。

――更に遡ること少し前

side：カイト

「くらえやつ！！」

セミオートの銃口から、数十発のペイント弾が放たれる。

いくら何でも空中で体勢もろくに整ってない状態で、これは防げな

いだろ！

……この時の俺は、そんな甘っちょろい考えを持っていた。

俺の予想を覆すことを、アキナはやってのけた。

まずアキナは、懐から新しいエアガンを取り出し、両手それぞれに構えた後、セミオート設定にしてあるエアガンで、『自分に当たるペイント弾だけ』をあっさりと撃ち落としやがった。

更にその後、ベルトから仕込みロープを取り出し、それでターザンのように移動しながら、まずは死角に隠れていたフェイトを一発で仕留めた。

更にその後、ロープを手放して着地し、そのまま俺に狙いをつける。

この間、わずか一秒弱。

俺がペイント弾をリロードしている間にあつた出来事だ。

これで勝ち目はほぼ無くなった。

2対1というアドバンテージも無くなった上、予想していたよりずっと強くなってやがるもんなあ。

……よし、降参しよー

「ふっふっふっ……さあて、どういたぶるつかしらあ」

「ーうとか言ったら本気で殺されますねハイ。

さて、これはなにがなんでも勝たないと死ぬぞ。

どうしたものか……

俺は、事前にメイに聞いていた大まかなトラップの配置を思い出す。

……ふむ。まあ、真正面からやるよりはかなりマシか。

俺はアキナに背中を向けて、全力で走りだした。

「逃がすかぁ!!」

後ろから般若の如く叫ぶアキナが追い掛けてきているのだろうが、振り返ったら確実に殺られるので、速度を更にあげる。

……そういやフェイト置いてきぼりにしちゃった。

まあ、別にいつか。

「ぜえっ、ぜえっ、ぜえっ……」

や、やっぱ……は、速く走りすぎた……!!

ア、アキナのペースに合わせりゃ、そりゃこうなるか……!!

「鬼ごっこはもう終わりかにゃー？」

観音のような笑顔を顔にはりつけ、阿修羅のような殺気を放つアキナが、猫なで声でそう聞いてくる。

やばい、ちびりそう。

ちっ、こうなったら……!!

俺は一度目を閉じ、そして開いた。

アルファ・ステイグマ  
複写眼、開眼。

「おっ、やるき？」

ゴキゴキ、と指を鳴らしながら、「こちらに近づいて来るアキナ。

よし、そうだ。

そのまま来い。

複写眼はただの餌だ。

本当の狙いは……

今お前の下にある地雷だ!!



どんな言い訳もルールもきかないと思いき知らされた。

ああ、もう好きにしるよ……

何度も回転して得た遠心力と、アキナの怪力によって、前後上下左右の感覚がなくなるくらいに速度でぶっ飛ばされる。

その際木にぶつかったりもしたが、もはや感覚すら曖昧になってきていたので、よく覚えていない。

その後も更に色々されたが、よく覚えていない。

結論から言おう。

勝敗は、メイが旗を撃ち抜いたので、俺達の勝ちとなった。

試合中、地雷やアキナの暴走によって、負傷したものが多数いるが、まあ気にしないでおう。

そして俺達は今、各々自由行動ということで、俺は魔法で治った体（高町達にケガを見られる前に治した）で、これからの為の準備を

していた。

「……まあ、こんなもんかな」

準備を終え、後はただ待つだけとなってしまう俺。

ぼけーっとしてると、後ろから誰かが近づいて来た。

「……アキナか」

アキナは、何も言わずに俺の隣に腰掛けた。

何か話があるんだろうけど、アキナは何も言わない。だから俺も、黙って沈んでいく夕日を見ていた。

吹いてくる涼風が、肌に当たる。

この時期のこの時間帯は、まだ少し肌寒かった。

しばらくして、夕日が完全に沈みきった頃、ようやくアキナが口を開いた。

「……ねえ、覚えてる?」

「何を?」

「一つだけ、何でも言うことを聞くなって約束」

ああ、そういえばあったな。

てか、約束ってよりは、脅しだろあれは。

「そりゃ覚えてるけど……何？まさか約束は、“今日の勝負に勝て”とか？」

「うづん、違っ」

「？じゃあ何だよ？」

「勝ち“続けて”」

「……？」

どういうことだ？

「これから先、7つの欠片を全て集めるまで、なにがなんでも、絶対に勝ち続けて。なにがなんでも、絶対に死なないで。その事を約束して」

アキナは、俺の目をまっすぐ見ながらそう言った。

さっきの俺を半殺しにした時よりも、今まで見たどの顔よりも、その瞳からは鋭さとも言えるほどの真剣さを読み取れた。

だから俺は迷わず、二つ返事した。

かつてした約束を守る為に。

そして――



「わかった、約束だ」

いつか手にいれる、未来の為——

その20 ゴールデンウィーク？（後書き）

次回予告（Angel Beats風）

「百鬼<sup>ビィク</sup>夜行！」

「その程度か!？」

「答えるっ!!！」

「稲<sup>いづち</sup>光 いいいいいいいいいいいいいいいいいい!!！」

次回、その21、ゴールデンウィーク?

カイト

「あゝ、お楽しみ〜」

その21 ゴールデンウィーク？（前書き）

いや、ひっさしぶりの投稿すみません？

ずっと書く気にもなれないし書いてもなかなかできない状態が続いてしまいました……。

これからも続くかはわかりませんが、なるべく書くことと思います。

あと、次回予告をとあるアニメからパクりました。

なんか書きやすいので（笑）

## その21 ゴルデンウィーク？

side:カイト

「……よお、あいさつしてからの方がいいか？」

暗闇の中から現れたアルセイドに向かって、そう尋ねる。

すると奴は、無言で構えた。

今日はどうやら交戦的らしいな。痺れを切らした、といった所だろう。

俺ももう、言葉の応酬に意味を感じなかったので、指先に意識を集中させた。

メイの結界が張り終えるのが、開戦の合図となる。

張り終えるまで後5秒。

その間にも、頭の中で何度も自分の作戦を成功させるためにシミュレーションさせる。

後4秒。

こちらには敵の能力が全てわかっているという圧倒的アドバンテージがある。

後3秒。

初めて能力を見たあの日から、何度も何度も練った作戦の中でも最良の作戦だ。

後2秒。

それに俺には、負けられない理由がある。面倒くさがりの俺が、負けたくないって思ってしまっような、理由があるんだ。

後1秒。

約束を、したんだからな。負けるわけにはいかないでしょ。

110秒。

瞬間、俺は今までとは違い、本気の手速で魔方陣を、一瞬で3つ描き、叫ぶように唱えた。

「求めるは雷鳴>>>・稲光!!」

3つの魔方陣の中心に雷の塊が生まれ、アルセイドに向かって放たれる。

アルセイドは、その雷を見て一言。

「その程度なのか」

次の瞬間、アルセイドの姿が消え、雷が虚しく空をきる。

「……っ!!」

慌てるな。冷静に観察しろ。

右か、左か……いや、真正面か!!

俺はアルセイドの放つ喉元を狙って手刀の突きを、体を反らして受け流すように避け、そのままその手を取り、

「……らあっ!!」

背負い投げてやった。

すると、投げ飛ばされた状態で、アルセイドが右手をこちらに向け、

「百鬼夜行ヒック!!」

バカでかいドリルが、こちらに向かってくる。

それを俺は、魔方陣と同時に描いていたもう一つの魔法を叫んだ。

「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す!」

俺の体が一瞬光り、光りが消えた瞬間、俺の速度が通常時の何倍も速くなる。

俺は横に飛びながら、今度は空間に文字を走らせる。

百鬼夜行が俺のいた地面をえぐる音が聞こえたのと同時に、魔法を唱えた。

「我・契約文を捧げ・天空を踊る光の魔獣を放つ！！」

不定形な獣が俺の目の前に現れ、その獣がアルセイドに向かう。

「……………変える力」

ドゴッ

「……………っ！？」

いきなりアルセイドの姿が消えたと思ったら、俺はこいつに思いつきりボディーブローを決められていた。

“一秒を十秒に変える力” かつ！！

俺は慌てて新たな魔方陣を描こうとしたが、その手をとられ、間接を決められそうになる。

「……………ちっ」

慌てて自分で間接を外して、アルセイドの拘束から逃れた後、体勢の崩れたアルセイドの腹を蹴って距離をとりつつ、一瞬で間接をはめなおす。

…………… やっぱあの能力相手に、近接戦じゃ勝ち目がないか。

ま、限定条件で武器が使えないのが唯一の救いだな。

…………… まあでもー

「快刀乱麻」

全長約十数メートルはあるであろう大刀で、木を薙ぎ倒しながらそれをこちらに向かつて振ってくる。

俺は半瞬で魔方陣を描き、唱える。

「求めるは光陣>>>・縛呪！目標の木を捕縛！捕縛後収縮！」

魔方陣の中心から光の縄が現れ、その縄が数十メートル先の木に向かってのび、巻き付いた後収縮して快刀乱麻をなんとか避けた。

「鉄」

すると、かなり距離を開けているにも関わらず、そこから鉄を撃ってきた。

これだけ離れてりゃ、避けるのはたやすい。

そんなことは向こうもわかっているはず……

つてことは、

「理想を現実に変える力」か……」

多分、絶対命中のはずだから、稲光で撃ち落とせばいい。

俺は魔方陣を描――

「っ！？」



「……こうとしたが、それを中断し、思いっきり横に飛ぶ。

すると、予想通り鉄は俺の後ろを通りすぎ、木を薙ぎ倒しながら境界をぶちぬきやがった。

「……やっぱり絶対粉碎だったか。

鉄のスピードが異常に速かったから、もしかしたらと思ったたらドンピシャだ。

取り敢えず俺は、木陰に身を隠した。

あちらの姿も気配も消えた。

距離にして、およそ五十八メートルくらいかもしれない。

さて、どうしたもんかな……

「……使うタイミングは考えないとな。

俺は作戦を頭に浮かべ、これからどう動くかをもう一度シミュレーションする。

「……ん？何か暑いような……」

下から何やら異様な熱気が……

下を見ると、マグマが流れていた。

……っつて、

「あぢいいいいいいいいいいいいいいいっ!?!?」

溶けた靴を脱ぎ捨て、木に飛び移る。

あ、危ねえ……!!

後少しでも気付くのが遅れてたら、足の裏の皮膚がなくなってたな。にしても、いくら結界内で好き放題できるからって、マグマで森まるごと焼き尽くす気かよ!?

そう思いながら木の上の方の枝に飛び移ると同時に、目の前にアルセイドが現れやがった……!!

そりゃあんな大声出したら位置ばれるよねー!!

俺は慌てて魔方陣を描こうとするが……

「遅い。百鬼夜行!」

アルセイドの手から百鬼夜行が放たれる。

魔法が間に合わない判断した俺は、なんとか体をひねった。

「があっ!」

しかしそれでも避けるのには間に合わず、右肩が少しえぐれてしまった。

右肩が異様に熱を帯び始めたが、今はそんなことを気にしていられる状況じゃなかった。

何故なら今、俺の真上で快刀乱麻を思い切り振りかぶっているアルセイドがいたから。

「プロテクション！」

とっさに左手を前に出し、防御の魔法を発動させるが、それごと快刀乱麻で真下に叩きつけるように吹っ飛ばされる。

「……っ！アクティブガード！」

マグマで一杯の地面にぶつかると同時に、なんと空中で留まったが、これでアルセイドの猛攻が終わるわけではない。

アルセイドは、懐からお手玉を取り出し、それをこちらに投げつけてきた。

「……っ！ マズい！」

俺はプロテクションを三重に張って、衝撃に備えた。

お手玉は、プロテクションに当たるのと同時に、大爆発した。

「がっ……あっ……!!」

くそっ……“ビーズを爆弾に変える力”か。

お手玉って、どんだけビーズ入ってると思ってんだよ。

しかも魔力こめて、威力倍増してやがるな。

てことはあいつ、魔法も使えるのかよ……!!

俺は痛む右肩を庇うように、地面から起き上がった。

爆風によってマグマが吹き飛ばされたとはいえ、地面はまだ熱した鉄板のように熱い。

「……はあ。痛い……」

なんか情けなくなってきた。

……なんて、微塵も思わないのは、やっぱり俺だからかなあ。

ま、プライドなんて今まで持ったことないし、これからも持つつもりないけどな。

「……この程度か」

上から、一日振りのアルセイドとの、抑揚のない声で発せられた会話第一声は、そんな言葉だった。

「……よう。やっと会話する気になったかいシャイボーイ」

「……」

取り敢えず軽く冗談を言ってみたが、普通にスルーされた。

なんか悲しい。

「……君はその程度なのか？」

「……さあ？どうだろうな？」

結構一杯一杯ですハイ。

もうちょいいいけると思ったんだが、いかんせんブランクが長すぎた。

ちょっと反省。

「それより俺も一つ聞きたいんだけどさ……」

さて、念のためこれは確認しておかないとな。

「お前をさしむけたのは、『レイヴン』……クソ鴉で間違いないか？」

「違う。あの方は神の使徒だ」

あ、この心酔ぶりは間違いないわ。

あんの鴉、とことん面倒なことを……！！

ああ、もう二度と会いたくない奴ではあるけど、物凄くあいつの顔を軽く百回くらい殴りたくなってきた。

「あ、そのなんだ……神の使徒？そいつは今どこにいんだよ？」

「知らないよ。あの方は、多忙な方だ。一ヶ所に留まるような暇な奴らとは違うんだ」

ああ、それには納得かな。……別の意味で。

てことはやっぱ、奴の手掛かりはなしか。

「今度はこちらが質問だ……君は、本当にこの程度なのか？」

「……はあ」

ったくあの鴉、一体どんなこと吹き込んだんだ？

……やめよう。考えるだけ無駄だ。

「さあ、どうだろね？」

「……！！」

背中から聞こえた声に気づいた時には遅く、腹に重い蹴りが入り、数メートル後ろに吹っ飛ばされた。

「にやろ……！！」

吹っ飛ばされた瞬間にそれは見えた。

アルセイドの腕に、ブースターのようなものがついたなにかを。

あれを俺は知っている。

ヤバい。そう思った時には既に俺は空中に文字を走らせていた。

空中で1回転して体勢を整えるのと同時に魔法を唱えた。

「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿すっ！！」

それに重なるように、アルセイドが叫ぶのと同時に動いた。

「指輪をロケットに変える力！！」

ドゴアアッ！！！！！！

アルセイドのロケットパンチをギリギリ避けた俺の耳に、地面を抉る音が聞こえる。

直撃くらってたら内臓破裂じゃすまなかったな。

俺は素早くアルセイドの腕をとり、思いきり地面に叩きつけた。

するとアルセイドは倒れた体勢のまま自分の足で俺の足をとって俺をこかせてきた。

ヤバい

反射的にそう思い俺は倒れた勢いで足を外して地面を転がった。

ヒュンツ、と風をきる音が聞こえた。

多分、『口笛をレーザーに変える力』だな。

適当にあたりをつけ、おれは魔方陣を描き、それを地面に向けた。

「求めるは雷鳴>>>・稲光いねこう！！」

一旦、稲妻による粉塵で距離をとり、隙を伺い奇襲……するはずだった。

「なっ……」

魔方陣から放たれたのは稲妻ではなく、白い粒子状のものだった。



まさか、『電気を砂糖に変える力』か!?

その考えにいたるまでのほんの少しの時間、俺は不覚にも隙を作ってしまった。

アルセイドの腕を天高くあげる。

「快刀乱麻」  
ランマ

数メートルもある大剣が、俺に降り下ろされた。

## その21 ゴールデンウィーク？（後書き）

### 次回予告

カイト

「どうも！1日平均睡眠時間が12時間のほうカイトです！いやもう戦闘とかめんどいからマジでやめて欲しいのに……次回、面倒くさがり屋の勇者その22、ゴールデンウィーク……何番だっけ？」

その22 ゴルデンウィーク？

side:カイト

ズシヤツ

血飛沫があがる。

肩から胸が熱い……

ああ、斬られたのかと漠然と思った。

強いなあ……

他人事みたいになんとかそう頭の中で呟く。

能力だけの話ではない。体術は俺と同じ位のレベルだし、能力の使い方、戦い方……一流じゃん。

はあ……あゝ、もうダメだな。

だって基本スペック同じなのに能力で負けてるんじゃないや勝ち目ないもんな。

勝つとか無理ってか論外？

そうそう無理無理。

今のままじゃ絶対に無理だな。

勝つにはせめてこっちも能力同じくらい強くしないとな。

だからもうそうする。

出し惜しみはもうやめだ。

「行くぞ、アイリス」

自分の相棒にそう呼びかけると、いつもの情けない声ではなく、真剣な声で一言。

『Yes, sir』

その言葉に被せるように、俺は呟いた。

「神の力No.3、リミッター解除」

アルセイド：side

あっけないな。

今自分が斬りつけた人物を見て、そんな感想が浮かぶ。

彼は肩から大量の血を流しながら膝から崩れていく。

本当にこの男なのだろうか？

ここに来る前、『あの御方』に言われた言葉を思い出す。

『彼は、君を救ってくれるよ。僕じゃなくて、彼がね』

おかしそうに、肩にかかるくらいの黒髪を揺らし笑いながら『あの御方』は、その日に僕の生まれ故郷の国を滅ぼした。

理由を聞けば、『その方が面白くなるからだヨン』と機嫌良さそうに答えていた。

生まれ故郷に未練のなかった僕は、『あの御方』の考えを理解できるはずもないと悟っていたので、そうですか、と淡泊に返し、彼のもとへと赴いた。

そして、彼は想像よりも弱い、弱すぎた。

僕より強いものとはかり思っていたから、この結果には落胆する意外の言葉が思い付かない。

果たして自分より弱い彼が僕を救う器であるのか甚だ疑問に思ってしまう。

……おや？

彼が立ち上がり、デバイスに向かって何か語りかけている。

これ以上は時間の無駄だな。

そう思い、僕は手のひらを彼に向けた。

「百鬼夜行<sup>ヒツク</sup>」

カイト：side

あれは確か九歳の頃、『7人の一人』を封印して数ヶ月したところだ。

何がきっかけだったかは覚えてないし思い出す気も全くないのだが、その時偶然、俺の手から稲妻が放たれたのだ。

もちろん魔方陣は発動していなかった。

そしてその稲妻を『複写眼<sup>アルファ・ステイグマ</sup>』で解析した結果、驚くべき事実が発覚した。

それは、その稲妻が『封印した神の力の能力』だったのだ。

そのことをアイリスに問い質すと……

『あれ？封印した神の力は使えるようになるって説明しませんでしたっけ？』

「……思い出したら腹たってきた」

傷口を塞ぎながら、そう呟く。

『何がですか？』

むかつくくらい自然に返してきやがる……一生あの時のことに対する愚痴を忘れないことをここに誓おう。

俺は立ち上がり、右手に意識を集中させた。

1、2、3……………9

九つの光の玉を腕に集束させ、まだ治っていない肩を無理矢理ひねって動かし、拳を迫りくる百鬼夜行の側面にむけて下から振り抜いた。

「雷華崩拳！……！」

ドゴアッ

低い轟音をあげながら、百鬼夜行は大きく上に跳ね上がった。

おおっ、案外出来るもんだなんだな……まあ素手じゃ絶対無理だろ  
うけど。

治癒の魔法で止血だけすませ、アルセイドと向き合う。

オーオー、驚いてらあ。

ふう、あんな顔させれたのなら、使った甲斐があったってもんだ。

そう、俺のもう一つ之力……『魔法先生ネギま!』の世界の力を。

「とりあえず、今のうちに呪文唱えるか」

んで、『闇の魔法』で一気にかたをつける。

『魔王』を使われれば厄介だからな。

「ラス・テル・マ・スキル・マギスキル、契約により我に従え高殿  
の王……」

それに気づき我にかえったアルセイドが、すぐさま構える。

「腕を6本に変える力……快刀乱麻<sup>ランマ</sup>」

「……はあっ!?!」

マジかよ……アルセイドの腕が6本になったと思ったら、その一つ  
一つにランマがあり、それを全て俺に向けて振るう。

でも残念、俺のが早い!



「千の雷、固定、掌握！！」

雷の塊が俺の右腕に球体となって集まり、それを俺は握り潰して体の中に取り入れた。

「雷天大壮！！」

体が白い雷を帯びる。

ドゴオッ

「がっ……………！！」

鈍い音とともにアルセイドが吹き飛ぶ。

雷速瞬動……………雷の速度で移動する某魔法先生の必殺技ともいえる魔法だ。

にしてもあれだな……………速っ！

自分でどう移動したかいまいち把握出来なかったよ！！

アルセイド吹っ飛ばしたのも拳そえただけだからね！！

ぶっちゃけ当たったのまぐれだよコンチクショウ！！

「くっそ〜、やっぱり雷天双壮じゃねえとキツいなあ……………」

神経伝達の速度あげないと自分の動きに反応できねえからな。

もう一度千の雷を発動して、それを体に取り込む。

「雷天双壮」

白い雷を纏った髪の毛が数メートルまで伸びる。

「うわ……すげえ魔力とられるなこれ……それに」

自分の中で何か、全くの異物がうめくような……でも、しっくりくる。

やっぱり俺は闇の魔法と相性がいいみたいだな。

多用すれば闇にのまれるかもしれないらしいけど、逆に完全に使いこなせば大きな力になる。

ハイリスクハイリターンってやつだな。

でもこの勝負、もう負ける気がしないなあ。

アルファ・ステイグマ  
複写眼で『闇の魔法』を使いやすくアレンジしてるし、他にもホント加減しないと相手殺しちゃうような魔法たくさんあるからなあ……

注意すべきなのは『理想を現実に変える力』と『魔王』くらいかな……ん？そーいや『魔王』って何発撃てるんだ？普通一人6発までしか打てないはずだけど、まさか無限に撃てたりして……

……負けるかも。

遅延呪文で魔法をため終わり、アルセイドをふっ飛ばした方を見る。うわ、どこまで吹っ飛んだんだろ、全然見える範囲に確認できないんだけど。

ズドドド……

「……ん？」

なんだ、今の地面挟りながら移動してるみたいな奇怪な音……まさか！

慌てて遅延呪文を解放する。

「右腕解放、固定、千の雷！左腕解放、固定、雷の投擲！術式統合、巨神ころし！」

十数メートルもある、雷を纏った、大きな翼をもった槍を出現させる。そしてその槍を前方に向かって思いきり投げる。

瞬間、前方の地面をえぐり、木々をなぎ倒しながら、文字通り見た目が魔王の『巨神ころし』の十数倍の大きさの全身の毛が黒く、手足が骨の角をはやした化け物が現れ、その額に『巨神ころし』が刺さった。

刺さった直後に右腕をあげて叫んだ。

「解放、千雷招来！！」

『巨神ころし』が刺さった『魔王』の内部で、百メートルもある岩

石を溶かす大魔法、『千の雷』を解放し、『魔王』を内側から破壊した。

「おっしやあっ！！」

思わずガッツポーズ。

でも『魔王』一発一発にこんなに魔力使えないな……さっさと決める！

空にあがり、もう一度『魔王』を発動しようとしているアルセイドを視認し、雷速瞬動でアルセイドの目の前に移動した。

「なっ……！！！」

「解放、魔法の射手・光の57矢」

驚いているアルセイドの前で拳を大きく振りかぶりながら、解放した魔法を拳に纏う。

「桜華崩拳！！！」

その拳をアルセイドの腹にぶちこむ。

「がっ……っ！！！」

「おらあああああああああ……！！！」

思いきりその拳を振り抜いて、アルセイドをぶっ飛ばす。

これで気絶してなかったら化け物だぞ……

そう思つて、すぐさま雷速瞬動でアルセイドを飛ばした場所に移動する。

すると驚くことに起きやがりやがつた！

まさか天界人と地獄人の体質もあんのか！？

天界人は人並み外れた回復力とタフさ、地獄人は神器を扱う天界人と素手で渡り合えるくらいの身体能力……こりゃマジで厄介だな。

「前言撤回するよ、カイト君」

さすがに痛むのか、腹を押さえながらアルセイドがそう言ってきた。

「あ？何が？」

「君を『この程度』と言ったことさ」

「ああ……てか、そのセリフって優勢の奴が言うセリフじゃね？」

「……細かいことは気にしない主義だ」

「……なんか顔赤くない？」

「赤くない」

……なんつーかまあ、その、あれだよあれ、かっこつけてたのに水差してごめん。

「……なら、もう一度僕が優勢の側になろう」

瞬間、アルセイドの影からどんどんアルセイドと全く同じ姿のクレイマンが現れる。

……確かクレイマンも能力使うよな。

てことは……

「ヒック百鬼夜行」「ヒック」

「ぎゃああああああああああああああああつ!?!」

こわっ、こわっ、こっええええええええええええええええええよっ!  
!!

いきなり十人以上が百鬼夜行で俺を狙いにきやがった。

雷速瞬動で避けてなかったら死んでたわっ!!

雷の速度で移動しながら次々にクレイマンを倒すけど、これがかなり厄介だ。

倒す瞬間はその都度一瞬止まるのだが、その隙について神器とか能力で狙われる上に倒したそばから増えていくし、本体を全く見つけられん!!

「~~~~~っだ!!もうめんどくせえっ!!」

いい加減こいつらうつとうしんだよっ!!

「解放、千の雷!!」

雷系最大呪文で一氣にクレイマンを全て消滅させた。

これで本体もさすがに気絶するはず……

「魔王」

その言葉が耳に届くのとほとんど同時に、反射的に叫んでいた。

「解放・巨神ころし!!」

そして『魔王』額に刺さった瞬間、また『千の雷』を解放し、内側から破壊した。

ちっ、もうためてる魔法が少ない……!!

そしてまた『魔王』を放とうとしているアルセイドを視認し、雷速瞬動で懐に入り込んで拳を打ち込み吹っ飛ばす。

「ぐっ……!!」

吹っ飛ばされながら、影を次々にクレイマンに変える。

くそっ、マズイ……巨神ころしはもう……!!

《マスター、使うなら今しかありませんっ!!》

アイリスに言われて思い出す。

「そうだ、あれなら……！」

俺はクレイマンを無視し、とある場所に一瞬で移動する。

「……………」

それを不思議そうな顔でアルセイドが見つめる。

そんなアルセイドに向けて、俺は告げた。

「次で最後だ」

それにアルセイドが意図を理解したのか、クレイマンを消滅させて、俺から距離をとり口を開いた。

「魔王は人の想いの力が具現化したもの……だからその想いが強ければ強いほど、その力を増す」

「……………お前は、なにを魔王に何を想ったんだ？」

その質問に一瞬ためらったあと、アルセイドは口にした。



side：アルセイド

僕は、天才だった。

僕の家系は優秀で、生まれつき魔力の高いものが多く、なかでも僕は異質だった。

魔力の量、魔法を覚えるスピード、魔法の応用、魔力飛行、近接格闘、集束魔法……できないことなど何一つなかった。

「……つまらないな」

僕の人生は、まさしくその一言につきる。

できないことなんてなく、障害もなにもない決められたレールの上を歩くだけ。

こんな人生に嫌気がさした頃、僕はあることを思い付いた。

物心つく頃からある、自分の中にある異質な力を使ってみようと。

そうすれば、何かが変わるかもしれないと思い。

結果は散々だった。

それまでは僕を羨み、尊敬、慈愛、親愛、そういった感情で見っていたやつらが、化け物、悪魔、異端者と罵り、僕を殺そうとしてきた。

僕は逃げた。

逃げながら、僕は初めて自分が幸せ人生だったと自覚した。  
人生をつまらないと思うほど、僕は贅沢な人生を味わっていたんだ。  
逃げ切ったころ、もう僕にはこの呪わしい力しかないのだと思い知った。

side:カイト

「その後は、あの方に拾われて、この力を消す方法があることを知った」

アルセイドの言葉を聞いて、納得した。

あいつの甘言はこつこつやっほど効きやすいからな。

「つまり、お前の想いは……」

「力の消滅だ」

きっぱりと、アルセイドはそう言った。

だったら、俺は……

「来い。お前の想い、全部ぶつけてこい」

こんな熱いキャラじゃないんだけどなあ、ほんと。

俺の言葉に応えるように、アルセイドは右手を前に向けた。

それに合わせるように、俺は右手を『下に』向けた。

俺の行動にアルセイドは眉をしかめたが、気にせず力を右手に集中する。

俺も全魔力を右手に集中する。

そして、同時に叫んだ。

「魔王！……！」

「右腕解放、千の雷！……！」

その22 ゴールデンウィーク？（後書き）

ユキト

「ハイ！私服は必ずパーカーを着るほう、ユキトです！いやあやあつとゴールデンウィークも終わりかあ……え？まだあんの？次回、面倒くさがり屋の勇者その23、ゴールデンウィーク?!シーユー  
」!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3035o/>

---

魔法少女リリカルなのは～面倒くさがり屋の勇者～

2011年10月7日18時49分発行